

縮小社会

第3号

2018年11月

特集

生物多様性に関する論考・随筆・ルポ

【ルポ】

農村地域におけるかかりつけ医と通院患者の交流

【論文・論考】

流通が自立的な小農家を破壊する

上座部仏教から観る生物多様性

釈迦の真理から俯瞰する科学の目的と生物多様性

生物多様性社会は再生可能か

サブサハラの野生動物保護と太陽光発電

【随想・随筆】

ソーラーはライオンとマサイ戦士を救えるか

外来種雑感

霊的進化に関する予備体験

縮小社会

第3号

特集 生物多様性に関する論考・随筆・ルポ

2018年11月

一般社団法人 縮小社会研究会

縮小社会と生物多様性

一般社団法人縮小社会研究会 代表理事 松久寛

狩猟採集社会においては、自然が与える物で生きてきた。農耕社会になり、自然に手を加え、穀物を貯蔵することによって、自然と半ば闘い半ば共存して生きてきた。そして、産業革命後は石炭や石油という化石燃料を使うことによって自然を改造して生きている。狩猟採集時代には、マンモスなどの大型の動物を絶滅させたが、ほとんどの生物は健在であった。農耕社会には、田畑の拡張で多くの生物を周辺に追いやったが、絶滅にまで行かなかった。しかし、現在は大量破壊の武器を手に入れたので、動物も植物も一瞬で絶滅することができる。捕鯨を自由化すると数年で鯨を取りつくすであろう。農薬で虫は絶滅し、森林皆伐で植物もそこに住む動物も絶滅する。一つの生物が減びると、それを餌とする生物も減び、次々と連鎖反応のごとくに多くの生物に影響を及ぼし、最後には頂点に立つ人類も減びるであろう。

現在の大量生産、大量消費は、大量のエネルギーを使用することによって可能となった。そして、生産の効率化のためには、同品質の混じりけのない原料が必要である。杉、松、楓などが混じった材木は木工場には不向きである。キュウリ、トマト、ナスの混じった野菜は食品工場には不向きである。単一性が重視され、多様性は効率を阻害するものになる。その結果、必要な一種類以外は絶滅させることになる。また、日本におけ

る稲作を例にとると、消費者がコシヒカリを好むと、日本中がそれを生産する事態となる。地方によって、気候も地質も異なるので、もともとはその地にあった品種を作っていた。その地に合わないものを作るには、化学肥料を大量に施し、病害虫退治のためにすべての生物を農薬で一網打尽にすることになる。それでも想定外の気候変動や病害虫が発生すると、日本中全滅する。それを防ぐには、各地域のみならず各農家も複数の品種を栽培し、どれかが不作になっても、どれかは生き残るという戦略がいる。

縮小社会は次世代のために化石燃料などの資源の温存を図るので、大量生産ではなく、必要なものだけを作る。そこでは、地産地消、家庭菜園、適材適所、多品種少量生産などがキーワードになる。生物の多様性も自ずと保存される。生物の多様性、社会の多様性、考えの多様性など、多様性が生き残る手段であるとともに豊かな社会の基礎である。

縮小社会研究会生物多様性分科会の活動

The working group for Biodiversity of The Forum on Shrinking
Society

元田武彦

生物多様性分科会の特徴は、構成するメンバーが、それぞれ独自のテーマ領域を持って継続的に活動していることにある。それらの領域における活動項目に併せて本冊子への『掲載テーマ』を紹介する。

I. 生物多様性に直接関わる3つの主要分野の研究

1) 生物多様性に関する思想・倫理：

『科学の目的と生物多様性』他

2) 生物多様性の保全：『生物多様性社会は再生可能か』他

3) 環境汚染；サンゴ礁の消失、マイクロプラスチック、他

II. 日本における生物多様性に関連する3つの主要分野の検討

1) 鳥獣被害に対応する方策と外来種の問題：『外来種雑感』

2) 長期の視点から早急な対策が求められる森林保全の方策

3) 生物多様性に関わる農業問題

①種子法改正が生物多様性に及ぼす影響

②生物多様性を活かしたピロール農法や共生農法の調査

また、食料ロス問題に対応して『流通が自律的な少農業を破壊する』との研究テーマを設定し、研究協力者を募集する。

Ⅲ. 生物・自然・生き方に対するヒトの視点

- 1) 農村地帯における、人々の多様な生き方：『農村地域のかかりつけ医と通院患者の交流の実際』
- 2) 個人の心身のあり方：『霊的進化に関する予備体験』

第2号では、ヒトを除く「生物」に関する論考を中心に取り上げたが、第3号の作成に当たって、Ⅲの視点からの原稿を新たに迎えることにより、生物多様性分科会の活動がより多様な視点を持ち、学際的な活動に繋がることを望む。

前回の生物多様性分科会特集号は、縮小社会研究会 HP

(<http://shukusho.org/data/biodiversity%20booklet.pdf>)

より閲覧可能である。また、巻末に連絡先を記載する。

「縮小社会」第3号 生物多様性特集 No.2

巻頭言 松久 寛
生物多様性分科会の活動 元田武彦

目 次

【ルポ】

入澤仁美 農村地域におけるかかりつけ医と
通院患者の交流の実際 1

【論文・論考】

五十嵐敏郎 流通が自立的な小農業を破壊する 119
元田武彦 上座部仏教から観る生物多様性 127
元田武彦 釈迦の真理から俯瞰する科学の目的と
生物多様性 139
川邊泰嗣 生物多様性社会は再生可能か 148
元田武彦 サブサハラ野生動物保護と太陽光発電 . . 171

【随想・随筆】

元田武彦 ソーラーはライオンとマサイ戦士を救えるか
. 207
尾崎雄三 外来種雑感 212
川崎尊康 霊的進化の予備体験 216

編集後記 入澤仁美

農村地域におけるかかりつけ医と
通院患者の交流の実際
—岐阜県安八郡の荒川医院を取材して—

入澤仁美（兵庫医科大学 非常勤講師）

[はじめに]

本稿は 2016 年度に私が岐阜県安八郡の「荒川医院」を訪問し、取材した内容を元に執筆している。「荒川医院」を取材したいと考えたのは、2016 年に岡山生命倫理研究会で、当時の副院長の荒川迪生医師と出会ったことがきっかけである。荒川医師は元日本尊厳死協会副理事長でありながら現役の臨床医で、研究会では「昏迷の終末期医療—尊厳死の流動化、医療・司法・社会の稀薄性を憂う—」と、「高齢者医療の話題—診療現場で遭遇する治療、コミュニケーション課題の実際—」と題した二つの発表を担当されていた。ロースクール出身だった私にとっては、終末期医療の発表も大変興味深かったが、それと同時に、荒川医院での診察の様子について写真を交えて報告された発表は大きなインパクトであった。患者さんのリラックスをした表情、荒川医師の笑顔、通院している患者さんの状態を少しでも正確に把握しようとする荒川医師の姿勢は、私が知らない「生の地域密着型医療の現場」であった。そして、当時の私は怖いもの知らずであったため、懇親会で荒川医師に自分から声をかけ、ほろ酔い状態で機嫌の良い状態の先生に「今後、先生

の現場を勉強させて下さい」と厚かましく頼み込み、先生から「いいですよ」と握手をしていただいた。これが、私が取材を始めるきっかけとなった不思議な縁である。

その後、2016年7月、11月、2017年2月と3度にわたって荒川医院を訪問し、荒川医師の実際の診察現場を見学させてもらうだけでなく、2016年7月23日、11月29日、11月30日、及び、2017年2月18日には、通院している患者さんにインタビューをする機会を与えていただき、四回のインタビューを通して14人の患者さんから貴重なお話を伺うことができた。以前、第39回縮小社会研究会（2017年3月）にて、高齢者医療の話題提供をさせていただき、その講演でもインタビューをした人々の話をさせていただいたが、今回改めて原稿としてまとめる機会を得た。

[荒川医院の立地と患者の通院状況]

岐阜県安八郡は神戸町（ごうどちょう）、輪之内町（わのうちちょう）、安八町（あんぱちちょう）という3つの町から成り立つ59.27km²の地域で、2018年4月1日付けの人口推計データによると、人口は43,393人（人口密度732人/km²）である。「あんぱちぐん」と呼ばれるのは明治以降と言われているが、地域の歴史は古く、『日本書紀』の壬申紀に安八磨郡（あはちまのこおり）として記されている。672年の安八磨郡には大海人皇子（後の天武天皇）の湯沐令（ゆのうながし）として多

品治がおり¹、郡全体が大海人皇子の湯沐邑だったと考えられる。江戸時代には大規模な新田開発が行われ、今の農村地域の元となった。

荒川医院が立地する輪之内町は、岐阜県の西南部に位置し、揖斐・長良の両河川に囲まれた「輪中地帯」にある。人口は約1万人、総面積は22.33平方キロメートルとされているが、総面積の約半分が農地である。1838年の検地の記録では、輪之内町で収穫された粃が将軍家に納められ、「御膳粃」と呼ばれていたことが記されている。そのため、輪之内町で栽培されている「はつしも」という品種の米は、史実にちなんで「徳川将軍家御膳米」と名付けブランド化され、また、その米を原料に丹精込めて造り上げた「徳川将軍家御膳酒」を発売されている。徳川将軍家御膳米は、輪之内町内の営農組合がもととなった徳川将軍家御膳米生産組合によって栽培されている。徳川将軍家御膳米は、有機物等を有効に活用した土づくり並びに環境への負荷の

¹ 湯沐令（ゆのうながし）は、日本の飛鳥時代に置かれた官職で、皇族の領地である湯沐邑（とうもくゆう、ゆのむら）を管理した。壬申の乱を起こした大海人皇子は、自ら行動を起こす前に使者を出し、安八郡の湯沐令の多品治（おおのほんじ）に兵を挙げて不破道を塞ぐよう命じた、と日本書紀には記されている。湯沐令は、史料的には壬申紀にだけ現れたため、直前の天智天皇の代に置かれ短期間で廃止になった官職と推測される。多品治と田中足麻呂（たなかのたりまる）という二人の湯沐令は、大海人皇子のために置かれた湯沐邑の長官だったとされる。

大きい化学肥料、化学合成農薬等の効率的な使用と節減を基本としているため、生産性と調和した幅広く実践可能な環境にやさしい農業方法である「ぎふクリーン農業」として認められている。徳川将軍家御膳米は慣行栽培米に比べて、農薬や化学肥料は30%以上削減している。

「荒川医院」は、1982年に荒川医師の奥様である荒川淳子医師が開業し、開業当初は小児科と一般内科を中心として、地域に根差した医療を行ってきた。1993年には岐阜大学医学部附属病院に勤務していた荒川医師も荒川医院の診療に加わった。荒川医師の専門が循環器内科と呼吸器内科であったことから、専門的な検査器具を導入し、初期的な診察でも大きな病院と同じようなレベルで行えるクリニックにすることを目指した。2017年に荒川医師のご子息の荒川恭宏医師も診療に加わってからは、上下部消化器内視鏡を新たに導入した。この器具は鼻から挿入する経鼻内視鏡であるために、高齢者に負担がかからない検査を実現している。また、大腸ポリープの切除等も行えるようになった。現在は、採血、尿検査、レントゲン、心電図等の一般検査以外に、胃カメラ（経鼻内視鏡）、大腸カメラ（日帰りポリープ切除）、CT（頭部、頸部、胸部、腹部）、エコー（心臓、腹部、甲状腺、頸動脈）、骨密度、ホルター心電図、呼吸機能検査、睡眠時無呼吸検査、血管伸展性検査等が可能となっている。

荒川医院に通院する患者さんの多くは高齢者であり、患者の名簿を確認させていただいたところ、2016年8月17日段階

で70歳以上の通院患者数は302人で、当時の最高齢者は102歳の女性であった。内訳は、70歳から74歳の患者が119名（男性68名、女性51名）で、75歳から79歳の患者が67名（男性28名、女性39名）、80以上の患者が116名（男性43名、女性73名）となっていた。

荒川医院に私が行くときには、最寄りの岐阜羽島駅からタクシーにのり、20分ほどで目的地に着いた。また岐阜羽島駅から荒川医院まで、ほとんど信号もなかった。医院から最寄りのコンビニに行くのにも、車で10分ほどかかる。都市部に住んでいたら、病院に行くときはバスを使えて当然という感覚になるが、岐阜県安八郡はバスがほとんど通っていない。電話で予約をする形のデマンドバスの運行が平成27年から開始をされていて、医療施設や商業施設に設置された町内145カ所のバス停からバスに乗ることは可能であるものの、予約の不便さもあり、あまり利用されていない様子であった。そのため、荒川医院に通院している患者さんのほとんどは自分で車を運転するか、家族に自動車で送迎してもらっている。私がタクシーで荒川医院に向かったときに、県外からの病院に行く乗客が珍しいらしく、運転手さんからいろいろな話を伺った。

運転手さんの話によると、輪之内町に社宅を誘致していた時期があったが、社宅内の高齢化が進み、社宅の半数以上は空室になってしまっているようだ。また、家が建っているように見えても、実際は空き家になってしまっていることも多いという。これは親世代が二世帯住宅を予定して、敷地内に子世代の

ための家を作ったが、子供世代は大学に進学後、愛知県や岐阜県の都市部に就職してしまい、現地の女性と恋愛・結婚をして住居を構えてしまい、輪之内に帰ってこないケースが多いことも一因となっているそうである。

[荒川医院での診察の様子]

荒川医院に来院した患者さんは、受付の段階で「健康管理手帳」（血压等を記したノート）を預けて、待合室で医師に名前を呼ばれるのを待つ。この「健康管理手帳」とは、荒川医師が名付けた小さいノートで、中には患者の血压や体重、荒川医師からの申し送り等が記されている。そして、待合室にある血压計で、患者本人が血压を測定しておく。名前を呼ばれて診察室に入ると、診察室の左側に体重計があり、患者自身が測定をする。そして、事前に測定をした血压と体重を申告して、血压については荒川医師が再度測定し、「健康管理手帳」に記入する。体重については、患者さん本人が「自分でノートに書きたい」という場合もあるので、その際には患者さんに健康管理手帳に書き込んでもらう。また、血压が150以上になっている場合には、自主的に教えてもらうようにしている。

荒川医師が問診を開始するときには、まず患者さんに「変わったことはありませんか」と話しかけるが、大抵の場合、患者さんは「ありません」と答える。そのため、「異常があっても患者本人がたいしたことではないと思い込んで、申告しそうでないこと」については、荒川医師の方から追加的に確認をする。

例えば、おなかに異常があっても患者さんはあまり申告しないが、高齢者であることを考えると病気の兆候である可能性も高いので、「おなかはどうですか」という確認をまず毎回しているようであった。そのほかにも、高齢の患者さんは狭心症の可能性があるので、「胸が苦しくなったりしませんか」という確認もしている。ただし、胸の具合の確認をした場合、「きゅうとする」という患者さんはたまにいるものの、「きゅう」の内容が分からなくて、患者さんの状態の把握に悩むことがあるそうだ。以前に「どんな感じに、きゅうとしますか」と再度確認したところ、「きゅうはきゅうです」と言われてしまったことがあるそうである。このような場合には、医師の方で検査の必要性を判断することになる。さらに、「運動は何かしていますか」という質問もしている。

ちなみに、荒川先生は、かつては 2 年更新で患者の健康管理手帳に患者の状態のサマリーをつけていた。しかし、あまりにも労力を要する作業であることから、現在は廃止しているそうだ。医師としては好意的に行っていることでも、サマリーをつけることで診療情報及び診察結果が外部に漏れることにもつながり、転送先の病院に診断内容が流出することになるので、治療がうまくいかなかった際には患者・家族に医療訴訟を提起される可能性は否めず、医師にとってのリスクは高かった。自分の診断に責任を持つとする荒川医師ならではの試みであったが、患者さんに感謝されることがなかったことも廃止の原因のようである。しかし、患者さんの診療結果については、荒川医

師は毎日診療業務が終わってから電子カルテにサマリーを記入していた。毎晩、数時間かかる作業であるが、転院時などに直ちに必要な情報を書き込めるようにしていた。

[患者さんへのインタビュー]

荒川医師からインタビューをする体力のある患者さんを紹介していただき、7月23日、11月29日、11月30日、2月28日の計4日間のインタビューを行った。インタビューの目的は、荒川医院に通院する患者の家族・地域コミュニティへの関与の在り方、医療への関心や将来の不安等を分析することにある。インタビュー対象者は荒川医院に毎月定期的に通院している70代～90代の患者14名（男性9名、女性5名）であり、荒川医院のスタッフルームで聞き取りを行った。インタビュー初日に荒川医師からは、「インタビューを受ける意思と体力がある患者さんであっても、10分を基本に、延長しても15分程度にとどめてほしい」と主治医としての意見を頂いた。しかし、インタビューに参加して下さった方は予想外に積極的で、話が弾んでしまい「短い人で20分、長い人は40分」というのが初日の状況となってしまった。当時、荒川医師に怒られてしまうのではないかと内心ヒヤリとしていたが、笑顔で患者さんが病院を去る様子を見た荒川医師から、「患者さんたちが笑顔で満足しているからよかった」といっていただき、二回目のインタビューからは時間制限を設けない形にいただいた。そのため、11月のインタビューでは1人45分という記録が出

て、2月28日のインタビューでは1人70分という最長記録を更新してしまった。

インタビューは、事前に質問事項の10項目を定めた上で、回答者の答えによってさらに詳細に尋ねていく半構造化面接形で行った。患者さんには思いつくままに話をしてもらい、「話すことなんてない」と思われた時には、「何にも思いつきません」と答えてもらうようにした。インタビュー時には患者さんが緊張をしないように録音は行わず、適時メモを取りながら観察を行った。そのため、インタビューで確認した10項目は、①年齢、家族構成、仕事（カルテ情報と一致しているかを後日確認）、②孤食かどうか、③デイサービスを利用しているか（利用していない場合は、将来利用を考えるか）、④老人会等に所属しているか、⑤近所の人と交流はあるか（減ってきているならば、その原因）、⑥日常生活での楽しみ、⑦不安なこと、⑧今後チャレンジしたいこと、⑨困ったことがあった時に、まず相談する相手、⑩若い人に伝えたいこと、である。以下に、実際にインタビューを受けて下さった人々のありのままのエピソードを記したいと考えているが、項目に従って記述したのでは臨場感が薄れてしまうので、本稿ではあくまでも、メモからインタビュー内容をできる限り再現した記録を見直しながら、できる限り詳細に表出していこうと考える。

1. 自転車で通院していたAさん（男性、当時90歳）

荒川医師からは「自転車移動をされていて、自転車で通院し

ているが、慢性硬膜下血症で視力が悪い。奥様は肝臓がんで亡くなっている。」という事前情報を頂いていた。

実際に会った A さんは細身で笑顔が優しい穏やかな男性だった。大正 15 年 7 月 4 日生まれで当時、90 歳であったが、この日も自転車で荒川医院に来院されていた。毎日自転車で移動をすることで運動を心がけ、涼しい日は自転車で 30 分ほどサイクリングをしている。足が痛みやすいが、歩くよりは自転車で動く方が楽であり、自転車に乗る習慣は、サイクリングのような楽しみだけでなく、自分の足を退化させないトレーニングとして行っている。暑いときは自転車で遠くまで行くことは控えているが、週に一度は遠出を楽しんだりしているようだ。自宅から荒川病院までは、自転車で 5 分程度の距離で、荒川医院には 30 年近く通院しており、荒川医師が「かかりつけ医」という認識である。

A さんは、農業をしている息子さんと、息子さんのお嫁さんと三人家族であるが、すぐ隣にお孫さんが住んでいる。A さんの親戚の家は一例に並んでいて、道を挟んで、別の人の親族の家が集まっている状態だそうだ。孫は二人とも 40 歳に近く、ひ孫さんとの交流もある。ひ孫さんの学校への送り迎えを手伝うことが楽しいそうだ。自分に何かあったときは誰に相談すると思うか、という質問に対しては、「息子にまず話すだろう」という返事が返ってきた。

同じ部落内に、小学校の同級生がいて、交流もあるそうだ。同級生の奥さんは美容師であったが、寝たきりの生活を送って

いて、不憫に感じている。「同級生はデイサービスを利用している」という話が出たので、「将来Aさんも利用することは考えますか」と尋ねてみたところ、「将来自分の体が不自由になったときでも、デイサービスを利用する気はない」という返事であった。しかし、「できるだけ家族には迷惑をかけないようにしたい」「物忘れが増えていることが気になる」という言葉が続いた。Aさんは来院記録によると毎月自分のペースで通院していて、「必要な時に通院する」という認識であった。同級生がデイサービスを利用していることについては、「自分にとっての身近な問題」とはとらえていない様子だった。同級生の奥様の生活についても、不憫に感じることはあっても、在宅で寝たきりの生活を送っていることについて違和感を有している様子もなかったため、「Aさん自身が病気で寝たきりになることがあっても、施設に入ることはなく、在宅で息子さんたちに世話をされるのだろうな」と漠然とインタビュー時に感じた。

Aさんにとっての不安は、「物忘れや置き忘れやが増えたこと」「足が痛みやすいこと」であった。インタビューをした当時は7月で暑かったため、自転車に乗る前に天気予報を確認して、その日の最高気温を確認するようにしていたが、最高気温の情報についてもすぐに忘れてしまうことも話してくれた。ちなみに、気温の情報を忘れてしまったときの対処法は、自転車に乗る前に外に出てみて、「何度ぐらいかな」と体感温度を確認してから移動することだそうである。これはAさんの長年の自転車生活の経験が生きた知恵のようで、インタビューの後に荒

川医師に「A さんが脱水等で運ばれたことはありませんか」と確認したところ、「そのようなことはない」という返事が返ってきた。

「もの忘れ」について詳しく尋ねてみたところ、「大垣の病院に検査を受けに行ったが、自分が乗ってきた自転車を帰りを見つけることができなかった。地下の駐車場に止めておいたはずなのに自転車がみつからず、エスカレーターで何度も行き来をした。そして病院のスタッフにも自転車がいないことを伝え、一緒に確認してもらったところ、ここにありますよ、と言われ、すぐに探していた自転車がみつかった」という話をして下さった。この話を聞いて、「物忘れではなく、視力が原因ではないか」と確認してみたところ、「目の方も網膜の老化があり、人の顔があまり見えないため、人の顔を覚えるのが苦手なんです。でも、日常の感覚で、自転車に乗るのには困りません。自分の自転車はわかりますからね」と答えられた。やはり、視力ではなく、年相応の物忘れを不安に感じているようであった。

A さんは、食事は基本的に息子さんたちと食べているそうである。6 人掛けのテーブルに、家族 3 人で座って、食事をする。食事の時間は家族で共有をしているものの、自分の食べる漬物は自分の分のみを冷蔵庫から取るのが日課であり、同じ空間で食事をしていても家族で食べ物の共有はあまりしないそうだ。料理については、最低限のものは作ったり、作ってもらったりするが、息子夫婦と年齢が離れていて、食の好みも違うことから、自分の好みのお惣菜を各自が買ってきて食事のメニュー

ーに足すようにしている。この「自分の好きな惣菜を買い足す」スタイルは、息子さんからの十数年前の提案だそうだ。そして、Aさんの好きな食べ物はお肉。洋食も好きだが、ナイフとフォークを使っての食べ方が難しいので、お箸かスプーンで簡単に食べられるものが多いそうだ。歯は自歯であるか否か聞いたところ、「部分入れ歯で、自分の歯も残っていますよ」と笑顔で返答された。

Aさんは、老人会にも積極的に参加をしている。輪之内の老人会のイベントは、草むしりのような社会奉仕活動が多いそうだが、最近は暑く、熱中症も心配なので、あまり活動に参加できていないことを残念そうにされていた。老人会について訪ねてみたところ、「年齢層が広い」と真っ先に答えられた。ただし、Aさんの世代はほとんどの人が参加しているが、息子さんの世代になると加入者の割合も少なくなっているため、老人会の平均年齢も年々上がっているのではないかということだった。しかし、地元の人から声をかけられることが多く、病院の待合室にいと、「Aさん、同じ部落の〇〇の嫁です」と声をかけてもらえることが多いそうだ。Aさんは前述したとおり視力が悪く、近距離でもはっきり顔が見えないこともあって、なかなか人の顔を覚えられないため次にその人に会った時にも、Aさんは覚えていないことがほとんどで、その人にAさんが気づくことができなくても、「Aさん、お元気ですか」「この前会った〇〇の嫁ですよ」と声をかけてもらえたりするらしく、そのことを嬉しそうに語られていた。Aさんに「次世代に伝えたいこ

と」を聞いてみても、孫やひ孫に対しても「特に伝えておきたいということはない」という返事であり、「生きがいはありませんか」と聞いても、「特別なこと、楽しみ、というのは日常生活にはあまりないです」と答えられていたが、このようなエピソードを聞くと、Aさんが寂しく孤立した高齢者であるのではなく、自然と地域の人々に見守られている高齢者ではないかと感じる。「日常生活で特に楽しいことはない」という発言も、自身の人生への悲観や自棄からの発言ではなく、「不自由なく満足に生活を送れていること」からの発言であろう。次世代に「特に伝えたいことはない」と発言されたことも、次世代との交流の意識が低いからではなく、Aさんが家族や地域との交流を持ちながら「自然に老いた結果」であるように感じた。ひ孫の送迎が楽しいと語り、積極的に老人会にも参加しているAさんは、世代間のコミュニケーションを大切にしている人だと考えられる。

ただ一点、少し気になったのは、家族との食事の時間の状況であった。Aさんは家族の習慣として「自分のものだけを取ってきて食べる」という癖がついているので、家族とおかずを共有することがない。このようなAさんの食事は共食の形態であるが、食事の実態は孤食であると考えられる。ご本人が肉を好んでおり、自身の歯もあることから、種類も豊富な食事をされている様子であったが、本人が食事に対してのモチベーションが低下して食事量が減ったときに、そのことに家族が気づきにくかったりするのではないかという心配がよぎった。そして、

この予感、残念ながら、その後しばらくして的中してしまっ
た。

11月30日に3回目のインタビューで荒川医院を訪問した
際、ちょうどAさんが診察を受けていたので、そのままインタ
ビューを行う流れとなった。以前は自転車で荒川医院に通院さ
れていたAさんだったが、この日は息子さんに車で送迎されて
荒川医院に来院されていた。11月に入ってから、貧血になり
やすいこともあり、荒川医院には週に一度通院していて点滴も
受けている。最近では朝起きた時に足がつりやすくなっている
ので、午前中に荒川医院で診察を受けたら、その後に整形外科
に行き、その帰りにコンビニでお弁当を選んで購入するようにな
っていた。このような変化がなぜ起きてしまったのかが気にな
り、Aさんに家族との関係について詳しく確認することにし
た。

すると、Aさんは、「最近も物忘れについてひどくなっている
時がある。たまに記憶が全くなくなるときがあり、食事をして
いても、自分の口の中に何が入っているか、何を食べているか
が分からないときがある」と話し出した。自転車を置いた場所
が分からず、誰かに取られたのではないかと思って病院の受付
に相談してしまったり、最近では市民病院でエスカレーター
の場所が分からなくなっただけではない。自転車の置き場所、帰り道
の道順、人の顔、食べているものについて忘れてしまうことが多
い。それと同時に、味覚も以前に比べて、分かりにくくなって
いる感じがする。「食べ物は何が好きか」と考えても、肉は嫌い

ではないが、味全般が分かりにくいため、特に好みもなくなってきた。視力もテレビの画面は分からなくなった。人の顔については、髪の毛があるか、髪の毛が長いから女性だろうということは分かるが、特徴を捉えることが出来ないほどに見えなくなっている、ということだった。ご近所づきあいについても確認したが、「最近では減っている。隣の家の人の顔も分からなくなっている、自分から近所の人に積極的に話しかけることはほとんどない」と答えられた。ただ、外で、「Aさん」と声をかけられることは多く、声をかけてもらっても相手の顔はぼんやりしかわからないものの、声をかけてもらった出来事については覚えているとのことだった。そのため、最近では「自転車に乗ると危ない」と息子さんが主張し、Aさんを自転車に乗せないようにしているようである。11月になって寒くなってきたので、Aさんが風邪をひかないようにという配慮ではないかと思っただけ、Aさんにはあまり伝わっていない印象で、自転車で移動できないことを不満に感じている様子だった。

以前に比べると笑顔が減り、衰えた感じがしたうえで、笑顔がくもっていた。そのため、「夜は眠れていますか」と尋ねたところ、「夜は眠れることは眠れるが、2時間ほどでトイレに起きてしまう。夜中のうちに3回ぐらいトイレに起きるので、熟睡は出来ない」と応えられたため、「寒い時期に夜中に何度もトイレに行くとなると、眠れませんか。転倒されたりはしていませんか」と改めて確認すると、驚いたことに「夜中のトイレは尿瓶を利用している」と返事が帰ってきてしまった。どうや

ら、Aさんがトイレに行くときに、ドアを開けてしまっていたことから部屋が寒くなると家族に指摘され、「でも夜中にトイレはしたい」というと、「尿瓶を買ったらどうか」という流れになり、夜中は尿瓶で用を足すようになったらしい。

この話を聞いて、食事がコンビニ弁当になっていること、そして夜間トイレが尿瓶になっていることがとても気になった。人間は排泄に関しては、場所が変わるとうまく用を足せないものである。一度おむつを試してみたらいいと思うが、「ここで出しても大丈夫」と分かっている、なかなか服を着たまま用を足すことには抵抗がありうまく排泄できないことが多い。また入院患者が転倒するのも、排泄時の移動が多い。差し込み式トイレを用意しても、緊張や違和感からうまく用を足すことができないため、やはりトイレで排泄してスッキリしたいと思うものなのである。脱水で点滴を受けていることや足がつっていることから、もしかしたら夜中トイレを減らすために水分や食事を節制しているのではないかと感じた。Aさんの場合、以前はスーパーでお惣菜を買い足していたが、コンビニでお弁当を買う形では食事の幅が狭まることは目に見えている。そのため味もわかりにくくなったのではないかと思った。そのため、余計なお世話であることは認識しながらも、「前に何かあったら息子さんに相談すると思うと話されていましたが、息子さんとは今の状況についてちゃんと話をされていますか」と聞いたところ、Aさんの表情が一瞬に陰しくなった。そして「同居している息子さん夫婦には、そんなこと言うなと思うことがある。

話しても通じないと思っけししまい、けんかもすることなく、言いたいことを我慢してしまふ。息子にも嫁にも言われた辛いことは、いくら物忘れがひどくなっても忘れることが出来ない」と話された。

Aさん自身は物忘れに悩んでいるものの、まだまだしっかりしている。実際に、病院の手続き等では困らせることはなく、また健康管理にも精力的だった。しかし、ずっと一緒に過ごす家族の何気ない一言が、Aさんの記憶に残り続け、残った記憶に悩むこともある。この話を聞いて、息子さんが送り迎えをしてまで、Aさんと家族が同じ時間を共有することは、Aさんにとっても家族にとっても負担になりかねないのではないかと考え、インタビューで分かったことについては荒川医師にすぐに伝えた。約3ヶ月後の2月に荒川医院を訪問したときに、やはりAさんのことが気になって荒川医師に尋ねたところ、「Aさんは、かなり良くなっていますよ」という嬉しい返事が返ってきた。私のインタビューの後、荒川医師からAさん及びAさん家族に、日中はデイサービスを利用することを勧めたそうである。そしてAさんがデイサービスに行ってみたところ、Aさんを知っている人もいたために、「人気のお年寄り」となり、Aさんが自発的に話しかけるようになったそうである。医師として家族の問題に介入することは難しいはずであるが、デイサービスの利用を進めるといふ荒川医師の対応にも、30年近く患者さんを見続けているかかりつけ医ならではの知恵を感じた。

2. 認知症の友人を助けながら農家をしているBさん（女性、当時91歳）

荒川医師からはBさんについて「農業をされている。手術など受けずに死にたいと言っているが、病気が分かるとちゃんと手術も受けてくれている人です」という事前情報を頂いていた。Bさんはチャキチャキした女性で、91歳とは思えないほど元気で明るく、身体は痩せているものの、適度に日焼けをしていて、日ごろから日光を浴びていることが分かる外見の小柄な女性である。「研究しに来たかなんだか知らないけど、何も話すことなんか何も無いよ」、「私で役に立てるかな」と言いながらも、お話をしにやってきてくれた。ちなみに、この日の前夜は風が強く畑の作物が倒れてしまい、インタビューの約束時間を一時間遅く勘違いしたまま畑作業をしていたら、お嫁さんが出かける時間になっていることを知らせてくれて、荒川医院まで車で送迎してくれたそうだ。

Bさんの息子さんはJR勤務で毎日名古屋まで働きに出ている、お嫁さんは養老のサービスエリアで働いているため、Bさんは一人で畑を守っていて、主に植物の種を収穫している。Bさんは毎朝4時半頃畑仕事を始め、息子さんとお嫁さんが出勤する姿を見送っている。息子さんもお嫁さんも帰宅が遅い。お嫁さんは昼から出勤をした日は、帰りは22時半頃にはなり、帰宅が24時を回ることもある。それでも朝5時には起床をして家事をしているので、お嫁さんの体調が心配になる。お嫁さんが毎日の食事を作っておいてくれるので、基本的にはそれを

温めて一人で食事をしている。お嫁さんの負担が大きいので、自身でも料理をしたいと思うが、火の不始末で火災などを起こしてはいけないため、台所にはあまり立たなくなったそうだ。

午前中は畑仕事をしているが、夏は暑いので、昼からは家で休むようにしているものの、毎日の畑仕事が楽しみで生きがいなので、夜になると、「明日の朝は晴れないかな」と考えるという。「雨が降った日はがっかりしてしまう」と、はにかんで微笑んでいた。Bさんが畑仕事をしていると、「高齢者を働かせるなんて」と陰口をたたく人もいるらしい。しかし、「私は畑仕事が大好きで趣味と仕事を兼ねて続けているだけであって、働かされているわけではないし、主治医の先生も『畑仕事をいきなりやめたらいかんよ』、『やめるときは少しずつやめるんだよ』とってくれているから、まだまだ畑仕事を止めるつもりはない」と明るく話してくれた。

Bさんも老人会には参加をしている。しかし、Aさんが話していたように、「老人会には60歳の人でも参加しているため、老人会内で世代間のギャップがあり、話が合わないことも多く、世代ごとのグループに分かれてしまっている」とぼやいていた。老人会では、参加者が一緒に食事をするだけでなく、会議に役場や警察の人がいろいろな講演をして安全に対する注意喚起をしてくれているそうだ。Bさんのおうちはお寺の近くで、病院にも通いやすいため、毎朝交流があることが有り難いと話していた。

Bさんには近所に「畑仲間」がいる。Bさんより少し年下の畑仲間がいたが、どうやら認知症らしく、自分でできる範囲の作業をしようとしても、1つの作業についてBさんに10回ほど確認することもある。彼女の認知症の原因について、Bさんは、畑仕事をいきなりやめようとしたことが原因ではないかと考えていた。他の近所の仲間の人は彼女のことを「また確認しに来た」と嫌がっていて、Bさん自身も「また聞きに来たの」「何度も伝えたよ」とうんざりしそうになることもあるが、誰にも相手にされず、「迷惑をかけてごめんね」と謝りながらBさんを頼る友達の姿を見ると、かわいそうで見捨てることはできない。他の人では話を聞けないと感じて、できるだけ力になるようにしていたら、「Bさんの顔を見るとホッとする」と言われたという。

友人の認知症を目の当たりにしていることから、Bさんも認知症に対して不安が大きいそうである。認知症は病気ではなくて「老人病」で仕方がないと思っているが、やはり何もできないまま認知症になってしまうことは怖い。他人から疎まれるであろうことや、他人に迷惑をかけてしまうであろうことを考えると、自分が認知症になることがとにかく怖く、認知症予防のためにも畑仕事を続けようと考えている。「自分から百姓を取ったら、何も無い」とBさんは笑っていた。

Bさんは90歳を超えているので、同世代の友達はほとんどが他界していて、もしもBさんが認知症になった場合には頼れる友人がいないことも不安の一つである。同世代の友人がいて

も、夫婦の時間を大事にしてほしいと考えると、旦那さんがいる人と仲良くすると自分が夫婦の時間を邪魔している様に感じてしまうため、夫婦で生活をしている友達とは疎遠になってしまったりする。同世代の友達では、自分が一番しっかりしている状態なので、友達に頼ることは考えられない。そんな B さんに「何かがあったときに頼れる人」を聞いてみたところ、「家族だけ」という答えが返ってきた。B さんの家族はとても仲が良く何でも話せるし、お嫁さんのことは、とにかく大事にしようと考えている。戦後の厳しい時代に、B さんの実母から、「お嫁さんは宝」「お嫁さんは天皇陛下と皇后陛下の次に大事にしないといけない」と教えられ、当時は奇妙な話のように感じたが、お嫁さんが来てからは自分もそう思うようになったそうだ。お嫁さんとはとても仲が良く、「何もできなくても、私は大事にしとる」と笑う場面もあった。

そして、B さんの願いは、大阪に住んでいる姉たちに、生きている間に会いに行きたいということだった。B さんは9人兄弟の末っ子だが、当時97歳のお姉さんと、翌年に100歳を迎えるお姉さんは存命で、二人とも大阪に住んでいた。当時97歳のお姉さんは、97歳になるまで一人で暮らしていたが、大阪に住む息子の家族が97歳を迎えたことを契機に引き取った。息子さんが数年前に大阪で土地を買って家を建てて「一緒に暮らそう」と誘っていたが、お姉さんは「知らない土地に行く友達もいないし、高齢で家から出られないので新たな友達ができることもない」「寂しいから、本人は大阪にはいきたくな

い」といって一人暮らしを続けた。しかし97歳になって、一人暮らしで火事を起こしてもいけないと息子さん夫婦も考えて、大阪へ強制的に引っ越しをさせた。そして、引っ越しの際には、寂しくなって岐阜に帰ってしまわないように、岐阜の家と土地は売却して、帰れる場所がない形にした。97歳のお姉さんは施設をとにかく嫌っているため、デイサービスなどに通うことなく家に籠っているため、電話で話そうとも思ったが、お姉さんは耳が良くないので電話をしても会話が困難で、Bさんは「会いに行っておきたい」と考えているようだ。しかし、Bさん自身が高齢で知らない土地に一人で行くことは難しく、息子に話しても「一人で行くのは無理だよ」と反対されるので会いに行っておけられないと嘆いていた。他の兄弟は皆80代で亡くなったそうである。Bさんは90代になっても畑仕事をしているが、「長生きしたい」とは思わないと語っていた。

荒川医院までは、お嫁さんに送迎してもらっている。この日もお嫁さんが「用事が終わったら、電話をして」と言っていたらしく、話が終わればお嫁さんに電話をして、迎えに来てもらうつもりだと話していた。「どんな家族ですか」と聞くと、「のんびりしたおうちだと思う。お嫁さんの話も面白いよ」と応えてくれた。暮らしについては、家族に恵まれていて何の苦勞もないと笑顔で応えるとともに、「いずれ死なないといけないという点では限界があるね」「百姓が生きがいだから、畑仕事は限界まで続けたい」とも語ってくれたところで、インタビューは終わった。

3. 酸素治療中のとてもおしゃれな女性の C さん（女性、当時 92 歳）

荒川医師からは、90代の患者さんで肺気腫を患っているため酸素治療中であり、足腰が弱いため同伴者が必要であるものの、頭脳が明晰だという事前説明を受けていた。そのため、私は失礼ながら「おばあさん」が来ることを予想したが、実際に現れた C さんは若々しい姿で、亡女優の山口淑子（李香蘭）さんを彷彿させる外見だった。大正13年生まれで、当時は92歳。黒のインナーに青のレースのカーディガン、眼鏡もカラーレンズで、髪もきれいにセットしていた。自分でしているというお化粧もきっちりファンデーションが乗っており、眉も茶色のペンシルできれいに描かれていた。爪をきれいに伸ばしたうえで、ラウンドカットに処理されており、この日は黄色をベースにカラフルなドットのネイルアートが施されていた。この日、C さんは娘さんと来院され、自宅から荒川医院までは車で2分ほどの距離だそうだ。

まず、日々の楽しいことはないかと聞くと、デイサービスでのゲームの話をしてくれた。デイサービスのお年寄りの中でも、自分だけが答えられると誇らしげにされていた。デイサービスではスタッフが「C さんはすごい」と大事にしてくれ、マッサージの設備もあって楽しい。しかし、話が合う同世代の人がいないことがつまらないそうだ。C さんはおしゃれが大好きで、デイサービスの主任に毎月ネイルケアとネイルアートもしてもらっているそうだ。デイサービスのショートステイの時間

は朝の8時半から夕方の5時ごろまでが基本で、利用者が多い日は30人ほどで集団行動をしているそうである。デイサービスに若い女の子がいるので、着替えなどの移動の支度の介助をしてもらうときには頼むようにしているが、男性の職員が入ってくると「いくらオバアになったとはいえ、男性に服を脱がされたくないし、恥ずかしくて嫌と思う」と話された。

デイサービスでの「困ったこと」についてより詳しく話を聞いてみると、「スタッフさんはごめんねと謝ってくれるんだけど」と前置きがあった後に、Cさんからも「認知症の利用者がいて、困ることがある」という発言が出た。先日も食後に椅子にもたれて休憩していたら、認知症の女性に急に顔をつかみかかられたようだ。認知症の利用者の旦那さんは5時半にならないと帰宅せず、スタッフの人手が足りないため、彼女がいる日は、彼女に合わせての送迎の時間となってしまう。彼女は入浴も嫌がって暴れるため、一緒のお風呂に入るのが大変であり、できるだけ目を合わせず関わらないようにしている、と話された。

Cさんにも「今、不安なことは何ですか」と尋ねたところ、「デイサービスの行き来でも転倒しやすく、転倒時に骨折しやすいこと」と返答された。Cさんは約二ヶ月前の5月30日にも骨折をしていて、その日は点つなぎゲームを2時間半ほどしていて、立ち上がったときに立ちくらみがして転倒してしまい、肩の骨を骨折してしまったようだ。手術が必要な骨折で、最近まで入院していたが、今でも冷房の風が痛く感じる事が

あると話していた。「入院中は退屈ではないか」と尋ねたところ、ニュースが好きで、テレビがあれば退屈することはないと話された。そして C さんはニュースの中でもスポーツニュースが好きで、一番好きなのはサッカーだそうである。相撲も好きで日本人力士を応援していたそうだが、「せっかく応援していたのに、もうだめやね」と残念がられていた。2016年7月23日当時、「今、興味があるニュースは？」と尋ねたところ、「東京都知事選挙」と即答された。

C さんは8人兄弟の上から二番目で、男性4人女性4人の兄弟だったが、C さんと一番下の妹さん以外は皆他界してしまったそうである。妹さんは82歳になるが、旦那さんは先に亡くなってしまって、子供二人は別居していることから大垣で一人暮らしをしている。一人暮らしになった当時は「寂しい」と何回も昼夜問わず電話がかかってくるが、妹さんが犬を飼ってからは、犬の世話に夢中になって、電話もほとんどかけてこなくなったそうだ。

C さんは、独身時代は満州で電話の交換手をしていたが、結婚後は4人の娘のお母さんとなった。娘さんは、C さんが数字には強く記憶力もいいのは、交換手の経験が活きていると考えているそうだ。今では C さんには、かわいい二人のひ孫の女の子がいて同居している。そのため、3世代同居の6人家族だそうだ。肺気腫を患っているので、酸素治療をしているが、酸素を外しているときはフラフラしやすいため、自宅でも酸素をつけるようにしているが、やはり酸素の管などはうっとうしい。

酸素が必要な状態は、「厄介な病気」と考える。Cさんは2階に住んでいて、今では家事はほとんどしていないが、自分の身の回りのことは自分でできるようにして、化粧も自分でしている。下のひ孫さんは、Cさんがデイサービスに行くときに、Cさんの日課のナンプレ等の雑誌を入れた重たいカバンを「おばあちゃん、とっても重いよ」と心配しながら運んでくれたりするそうだ。最近の子はお菓子よりもお金が嬉しいようなので、使いすぎないように考えながら、一回300円のお小遣いをあげて、にこーっと笑うひ孫の笑顔を見るのを楽しみにしているそうだ。そのため、娘さんが先にお小遣いを渡してしまった時には、「笑顔が見たいから、私からあげたかったのに」ととても残念になるそうである。ひ孫は大垣で空手を習っていて、もうすぐ黒帯になるので、応援するのも楽しいと話されていた。夏休みには、ひ孫とママの三人がデイサービスに送ってくれて、家族みんなが自分を見送ってくれることが嬉しく、長生きする楽しみであるそうだ。デイサービスの人も「Cさんは必要な人だから、がんばってね」「Cさんは、答えるのが早いね」と優しく接してくれ、褒められることがとても嬉しいと笑顔をこぼされていた。Cさんの場合は、デイサービスを一種のレジャーのようにとらえていて、「介護してもらおう時間」という認識はないようだった。

また、「チャレンジしてみたいことはありますか」と尋ねたところ、「行きたい場所には、不自由していない」とも話された。どうやらCさんの家族は、Cさんを機会があれば旅行に連れて

行っているようで、一番最近ではハワイに行ったそうである。インドネシアも台湾にも行ったことがあり、中国では、兵馬俑と万里の長城がとてもよかった。そして C さんが留守番で、家族が旅行に行く時には、C さんが転倒してはいけけないので、訪問介護士に自宅に来てもらっているそうだ。「最近、家族が北海道に行ったときには、男性の介護士を雇ったけど、何もできなかった。本当に役に立たない。ご飯でもチンだけして食べてくださいというだけで、1時間のサービスでも、5分でできるようなことしかしてくれなかった。男性はだめ。やっぱり女の人がいい」と話されていた。若い男性の方が、力があって安全だと家族が配慮したようだが、C さんの感想は「男の人は話をあまり聞いてくれない」「全然使えなかった」というものであり、娘さんも「やはり女性の方がいいのかな」と考えているそうだ。

その一方で、C さんの場合は、老人会には参加しておらず、ご近所付き合いもあまりないため、交流はデイサービスが中心になっている。C さんは「私は大垣の生まれだけど、輪之内は田舎でおしゃれじゃない人が多いので、老人会には興味がなく参加もしていない。おしゃれで自分と同じように話ができる老人がいないことが残念」「老人の学力が低下しているように思える」と話されていた。

C さんは、自分のことを「病上手」と表現していた。というのも、子供の百日咳のように咳が止まらず、呼吸をすると「ヒューヒュー」と音がした。その時は「これはもう生きていけな

い」と感じたし、「これ以上がんばれない」「もう死ぬ」と思うほど苦しい時を何度か経験しているが、最終的には回復して現在は生き延びているので、そう思うそうだ。そして、Cさんが何かあったときにいつも真っ先に頼るのは、末っ子の娘さんだそうだ。デイサービスでの出来事も、毎回すべて娘さんに話し、娘さんが話を聞いて「これはよくない」と感じるがあれば、その時はちゃんとデイサービスに連絡をして、改善を図ってもらえるように話し合っている。「普段はっつけんどんで、聞いていないようにふるまっているが、実際にはちゃんと覚えている」と、はにかみながら話された。そしてCさんの娘さんも、お嫁さんをとても大事にしているそうだ。「優しいけど、何もできない嫁なのに」とCさんが笑ったところでインタビューは終わった。

4. 日本の医療政策の将来を心配しているDさん（男性、当時82歳）

荒川医師からの事前情報では、「肺気腫が重症であるが、本人の美学から酸素治療を拒否している患者さん」とだけ話を聞いていたので、私はこれまた失礼なことに「どんな頑固なおじいさんが来るのだろう」と思っていたところ、現れたDさんは「若い先生たちに伝えたいことがある」「話を聞いて下さい」と熱く語る男性だった。

Dさんは82歳で、1週間に一度だけデイサービスを利用している。500m先の場所に行くのでも、息切れをして苦しい状

態である。安八町の牧に住んでいて、荒川医院までは車で15分ほどかかる距離であるため、自分で車を運転して来院されていた。息切れがしやすく、近くでも車で移動するほうが安全なので、2年前に運転免許証を更新したそうだ。

インタビュー時も発声が苦しそうであったが、部屋に入ってお互いの自己紹介を済ませるや否や、「私たちの世代は戦争という一番苦しい時代を生きてきたが、これからの人々はどうなるのだろう、ということが心配なんです。今の日本の国の情勢だと、自分たちが死んだ後、次の世代が元気を出して働くということが出来るのかどうかも心配で」と自分から話し始められた。そのため、Dさんが「酸素治療を拒否している経緯」から聞いてみることにした。するとDさんは、『昔、肺気腫で大部屋に入院したことがあるが、そのとき「人種が違うような人」の存在を知ったのが治療を拒否しているきっかけだ』と話し始められた。Dさんが入院したときに、同室には肺気腫の診断書を書いてもらって、酸素を持ち歩くことで身体障害者の資格を取って、働かずに生活をしている人たちがいた。障害を装って手当て生活をするような人が大嫌いなDさんはそのことに衝撃を受け、Dさん自身は正真正銘の肺気腫であるものの、障害者手当を悪用する人と同じように見られるのが嫌で、酸素吸入の治療をしない決意をしたそうだ。『荒川先生のごことは信頼していて、治療方針についても何回も相談をしている。先生は酸素治療をすることを薦めていて、3年間説得を続けてくれたが、私は治療を拒否し続けました。今では荒川先生にも理解をしても

らって、酸素治療はしないという意思を尊重してもらった上で通院をしている』と話してくれた。そして、『今後の医療制度の青写真を作るのは難しい。若年世代は、掛け金を払っても、将来に不安があるはずである。医者言うことだけを聞いて、治療を受けて生活することも可能だが、そのような生活はしたくない』と続けられた。やはり、酸素治療の拒否は、「若い世代に負担をかけまい」とする D さん自身の価値観・美徳観によるものだった。

ここから先は、D さん自身の身の上を語っていただいた。以下、D さんの価値観が形成された経緯が少しでも伝わるよう、D さんの話をできるだけそのままの流れで記す。

D さんは5歳の時に、海軍に所属していた父親を亡くした。男性は戦争でみんな死んでしまう時代で、母親も自分を苦勞して育ててくれ、6歳のころに空襲を逃れて大垣にやってきた。母親は自分が食事することなく、食べ物に分けて育ててくれた。母親は農協関係者で昔はいい暮らしをしていたが、女手一つで3人の子供を必死で育てる生活を強いられ、とても苦勞をした。昭和19年に大垣にも空襲があり、流れ弾で安八の田んぼもすべて燃え、田んぼにも不発弾があるかもしれないからと立ち入り禁止となり、財産をすべてなくすことになった。その年には大きな台風も来て、地域一帯に食べ物がなく、母親と60キロの距離を、荷台に食べ物を積んで歩いて運んだ。D さんは学校での教育を満足には受けられなかったが、「助けたってくれんかな」という大人の言葉は子供ながらに理解ができた。大

人になったら、人様の役に立てるように生きようと考えた。今の生活スタイルは、その当時に助け合った経験が基盤となっている。今は幸せな D さんでも、当時は生活がとても苦しく、どうやって家族で生活すればいいかを考えて、一生懸命働くばかりだった。D さんは26歳の時に大垣の太平洋工業に就職する。学歴はなかったが、小さいうちから苦勞をして生きていた経験が買われ、会社の役員になってほしいと頼まれたが、学歴のない自分にはできないと考えて辞退をした。その後、太平洋工業を辞めて、金丸工業の鉄工所に30年近く勤めた。溶接業をしていたが、鉄工所の設備が悪くなかったため、肺気腫を患ってしまった。当時の同僚も肺気腫で死んでしまった。肺気腫になったときには、この先10年生きることができないと診断され、自分は長生きしても仕方ないと考えて、酸素治療を拒否したが、同時期に肺気腫の診断を受けて酸素治療を受けていた同僚よりも長く生きてしまっている。とにかく酸素治療はしたくない。障害者手帳を悪用している人と同じのように、酸素を持って歩く生活をしたくはない。荒川先生と知り合った時、最初は先生も酸素治療をやれと言っていた。でも、自分は今のような状態でいいと考えている。肺気腫になったのは会社の責任という人もいるし、責任を取ってもらったら、今よりいい生活ができるのかもしれないが、自分はそんなことは望んでいない。

これが D さんの身の上話だった。D さんは、今は7人家族（D さん夫婦、息子さん夫婦、孫3人）で、この上なく幸せであると感じているそうだ。19歳の孫は「おじいちゃんの話

聞いたから京都大学に進学したい」と言ってくれた。親は反対をしたが、河合塾に一年通学して結果を出してくれた。そして「おじいちゃんとおばあちゃんがいてくれるのが一番いいなあ」「今の自分がいるのは、おじいちゃんとおばあちゃんがいてくれるからだ」と言ってくることが、とても幸せである。「車を運転できた方が、おじいちゃんが便利だから」と、孫は運転免許も取ろうとしてくれている、と自慢もされていた。

Dさんは太平洋工業時代に「役員になってくれ」と言われたときに、『自分の人生は仕事ばかりで、生活の為に仕事をしていたが、誰かの役に立てるということが分かった』と語る。そして、自身を戦争犠牲者だと称し、『「世間のいい、悪い」や「悲しい、苦しい」は早くに経験で学んだ。学歴はなくても、何が社会にとって、人様にとっていいのかということは分かっている』と続けた上で、『82歳の今になって、これからの世代はどうなるのか、ということがふと頭によぎるようになった』『自分一人では何の力もないが、そんな自分でも役に立てることはある』と話された。

そして、私たちが「次世代に伝えたいこと」についてこちらから尋ねなくても、Dさんのほうから『次世代の将来のために、研究者の人には、身をもって、やろうと思ったことは、徹底的にやり通してもらいたいです。自分がこのようなことを言うことはおこがましいが、荒川先生からインタビューの話を頂いたときに、これだけは伝えたいと思って、今日やってきました』と話し始められた。Dさんに、「酸素なしで過ごすのは、辛

いでしょう」と声をかけたところ、『今でも酸素なしで生活をすることは大変です。息切れもするし、フラフラするし、考えるときにも必死に頭を探る。それでも少しでも社会が良くなるように、自分の頭を巡らせています』と話された。Dさんは最近になって、「日本の政府も人々も将来のことをあまり考えていないことに気づいた。政治家は選挙で自分に票が集まることばかりを考えて政策を作っている。」という。Dさんは将来の医療制度が一番気にかかっている、「世間の今の状態があまり良くないと感じ、今の手当を続けると日本は潰れてしまう。自分はいい生活をしたいと思わないが、家族にはこれからいい生活してほしい」ということを荒川医師に伝えたところ「あんたの言うことも一理ある。それでも頑張ってください」と言ってもらえたことに、励まされ、「がんばろう」という気持ちになれたそうだ。このような懸念をDさんが持つようになったきっかけは、孫が京都に行って一年目に、Dさんが京都に会いに行った時の出来事だったという。京都の駅には小学生のお母さんらしい人がたくさんいたが、自分の子供の面倒をしっかりと見ることができていない若者ばかりだった。そのため、親が子供の心配をするように、年寄りには若い世代を心配するべきであると感じたという。

最近、Dさんは、小学校三年生の子がいる家に、大きなスイカを届けて、スイカ割を教えたあげたそうだ。今の子がしらない遊びを伝えるのも年寄りの仕事だと思っている、と目尻を下げられてにっこりとされた。「不安なことはありますか」とイン

タビューの最期に確認したところ、「自分の将来には不安はない。経済的にも不安はないので、無駄遣いをしないようにして、これからの人々が高い教育水準と良い環境で生活できるようになってほしいと考えてます」と応えられた。

Dさんのインタビューについては、Dさんが事前に「これだけは話しておきたい」ということをまとめて下さっていて、この日も酸素を吸入することなく、約45分間、一気に話し続けて下さった。インタビューの前に定期的な診察を受けられていたが、荒川医院で配布されている健康管理手帳もちゃんと持参されていて、「先生のことは本当に信頼しています」と言いながら手帳を眺められていた。Dさんは「次世代の生活をより良くしなければならない」という信念が強く、少しでも次世代の負担を軽くするために、苦しくても自分の治療を控えるような正義感の強い人である。もちろん、Dさん一人の治療費の削減だけでは、日本の医療制度の負担は変わらない。それでも、「上の世代の医療費の負担を減らさなければならない」と若い世代を大事にしようとしてくれる高齢者がいることに、私たちは感謝すべきだと思う。

Dさんは帰られるときに「また会えるかもしれませんね」「私でよければ、いくらでもお話をしますから、よりよい社会づくりをしてください」と言って、私に握手をしてくださった。私は個人的には、Dさんのような人には、苦痛のない形で長生きをしてもらいたい。できれば酸素治療も受けていただきたいと感じる。それと同時に、肺気腫を患っていても、予測された期

間以上に長生きをして会話も可能な状態であることは、D さんの肺が酸素治療に頼らずに生きるために、より強いものへと進化しているのかもしれない。あるいは、D さんの肺活量が、日常生活を円滑に送るために増えているのかもしれない、とも感じた。酸素治療に頼らない生き方も、患者の肺を酸素治療に依存させない点ではいいのかもしれないが、D さんが「苦しい」と感じるときがある以上は、D さんの美学を理解したうえで、私が医者であれば、荒川医師と同様に、酸素治療という選択肢を考慮に入れてくれるように説得を試みるだろう。荒川医師の「3年間かけて酸素治療への説得」は、医師のジレンマの一つの事例であるように感じた。

5. 読書好きの E さん（男性、当時 86 歳、）

E さんに初めて会ったのは、2016 年 11 月 29 日のインタビューだった。荒川医師からは E さんについては、学歴はわからないが、知識豊かで一気に話すタイプの人という事前情報を頂いていた。E さんは車椅子であるため、息子さんに付き添われて、介護タクシーで来院された。

E さんは昭和 5 年生まれで、当時 86 歳。E さん夫婦と息子さん夫婦と同居の 4 人暮らしで、同じ敷地内の隣家にお孫さんが住んでいるそうだ。お孫さんはご飯を食べてお風呂に入った後は、ほぼ毎日、E さんのお家に遊びに来ている。E さんは車椅子なので家の一階に住んでいて、できる限り E さんは自分のことを一人でするようにしているが、週に三回は訪問介護士に

来てもらって、週に二回は午前中にお風呂に入れてもらっている。Eさんの食事は、お嫁さんが作り置きしたものをレンジで温めて、Eさんの好きな時間に一人で食べることが多いという。Eさんは車いすになってしまったこともあり、近所の人との交流はほとんどなくなってしまい、老人会等には参加しておらず、日々の楽しみは読書で、哲学書や倫理学書、仏教の本を読むのが好きだそう。インタビューの最初は初対面の緊張からかあまり話そうとせず、息子さんに話すように促されていたEさんであったが、私が「どんな本を読むのが好きですか」と聞くと、一瞬にして目が輝き、戦争中のことや読書が好きになった経緯まで一気に話してくださった。

Eさんは大工で戦前は市営住宅の建設に関わっていて、戦時中は特攻機や、爆弾を仕掛けるための飛行機の翼を作っていた。Eさんの2人のお兄さんのうちの一人は空襲で手足を無くして他界してしまい、もう一人のお兄さんは特攻志願をして九州に行ったが、特攻機に搭乗する前に終戦となり、地元に戻られる形で復員した。戦後の社会は混乱し、皆が「何をしていたか」が分からなくなったようだった。GHQの憲法が公布されて平和な世界が来ると思っていたものの、自衛隊が組織されてからは、「また戦争に徴兵されるのではないか」という不安がよぎり、朝鮮戦争時に、「若い人は戦争にいかされるかもしれない」と発言をしたため、レッドパージを受けたそうである。

Eさんの友人が本屋だったことから、戦後は本に親しむ生活をして、たくさんの本を読んだ。政治や思想に関する月刊誌も

読み、古典や外国の哲学の翻訳書を読み始めた。今でも本だけでなく、新聞も毎日読んでいる。本を読み続けることで、生きる意味を見つけることが出来たと思うそうだ。最近では宗教について考えることも多く、親鸞上人の歎異抄を読んだところ、「自分はどう生きるべきか」という答えが見つかった。その上で、人間には、「考えること」が大事という結論に至った。というのも、人間には欲があり、知識があれば賢くなるのではないのが人間の宿命であると考え。目先の利益に走った政策では、長い目で見ると失敗する可能性が高い。しかし、権力を持つ政治家に反論をして、より良い方向へ社会を向けるために議論する場が日本にはないため、結果として将来「負の結果」を迎えるかもしれないことが悲しく、息子、孫、ひ孫が心配になるそうだ。Eさんは哲学や宗教の勉強を家族に勧めているが、なかなか家族は勉強をしてくれないので、哲学や倫理学の話も家族とはあまりできないことは残念であるそうだ。Eさんの奥様は、お寺の娘さんで、お経を読むことが多かったため、最近ではEさんもお経を読むようになった。すると、お経を読むことがストレス発散になることに気づいたそうである。

また、Eさんは「病気になっても、すぐ元通りにしてくれる荒川先生には感謝をしている」と話した。Eさんは3年前に脱水症で倒れたが、すぐに元通りにしてもらえた。白内障も患ったが、手術をしたら視力も0.7まで戻り、読書をする上でも困ることはない。88歳の米寿までは生きることを目標にしている一方で、最近では自分自身の衰えを感じ、家族に負担を押し付け

るのではないかと不安に感じるそうだ。1年前から手足が不自由になってから、日常生活に支障が出てしまっている。手が不自由だと食事の時に箸がうまく使えず、スプーンになってしまうこともあるし、夜はなかなか寝付けない。できるかぎり自分の身の回りのことを自分でして家族に迷惑をかけないようにしているが、それでも家族に負担をかけてしまうことが心苦しいと語られた。そして、Eさんは家族に迷惑をかけないようにするために、「早く死にたいと考える欲」は、自分の中では90%あるといわれた。でも家族が黙ってEさんの生活を見守ってくれているから、Eさんが自分らしく生きていく自信がつくことも多いそうである。

そのため、Eさんには少し酷な質問になるかもしれないと考えたが、「一番迷惑をかけたくないと思うことは何でしょうか」という質問を投げかけた。すると、「家族に排泄の処理だけはさせたくない」という返答が返ってきた。Eさんは、親子であっても、「排泄の世話はさせるべきではない」と考えているそうである。そのため、お嫁さんが朝ご飯を作ってくれているが、朝は自分だけはパン食にして、起きることのできるタイミングや消化の時間を考えながら食事をすることによってトイレに行くタイミングを考えて、自分でトイレに行って排泄できるように工夫しているという。Eさんは父親の介護の時に排泄の処理をしたことがあるが、親の尻を拭くことは難しいと感じた。今までに二度だけ、排泄に失敗してしまったことがあるが、家族に後始末を手伝ってもらったことが辛かったと話し出した。お尻を

拭く側にも、「ごめんね、こんな姿にして」という恥ずかしさがあるし、拭かれる側も失敗した恥ずかしさや後悔の気持ちがある。そのため、Eさんは、排泄は「家族に甘えてはいけない壁」だと思うし、困ったときはいつも家族に相談をしているが、排泄の世話だけは困っても頼らずに、まずは自分で何とかすることを考え続けたいと話された。

ここで私はインタビューの最後の質問として、「次世代に伝えたいことはありませんか」という質問をした。すると、Eさんは以下のような内容を答えてくれた。

『最近「お金さえあればいい」という考えをする人が多い。確かに、お金があるとお菓子も買える。でも欲も刺激される。将来、「自分がどう生きてどう死ぬべきか」と考える手助けにはならない。縄文時代にも弥生時代にも日本人の生活があった。贅沢を完全にやめろとは言わないが、便宜ばかりを優先するのではなく、日本の文化を大事にすることを、今の若者に忘れないでほしい。だから、これからの若い人にはソクラテスの考えを伝えたい。生老病死は避けて通れないが、哲学や宗教を考えることは、生き抜く中で大きな役割を果たしている。そして「どうやって生きるか」ということは、「どう死ぬのか」ということにつながることを忘れてはならないんです』

インタビューの最中には、「あなたは面白いことを聞いてくれるね」と笑顔を見せてくださり、「この話を聞いて、論文にするのかい？」と質問をされたので、「何らかの形でEさんの声も原稿にしたいと思っています。完成したときはお渡ししますね」

と応えたら、「そうかい、そうかい」嬉しそうにされていた。そのため「米寿のお祝いまで、元気でいてくださいね」と私がいうと、Eさんはにっこりと笑い、息子さんが「米寿までは本人も張り切っていますよ」と笑顔で答えてくれた。インタビューが終わった時には、「話したいことが話せた」と満足げにされ、「めったに話が合う人がいないから、たのしかった。また話そう」と言って下った。

6. 農家の嫁に来たらいい、と言ってくれた F さん（男性、当時 93 歳）

E さんと同じ日にインタビューをしたのは同い年の奥様の介護をしている高齢者の F さんだった。荒川医師からは、糖尿病で奥様の世話をされていること、および、闇市や特攻隊員の実体験話などの話題があり長い話が予測されるという事前情報をいただいていたが、荒川医師が予想していた戦時中の話とは違う方向に話題が進んだ 35 分間となった。

F さんは男性 2 人と女性 2 人の 4 人兄弟の一番末っ子で、大正 12 年 9 月生まれの当時 93 歳だった。F さんは白髪だが、歯は全部自分の歯で、実年齢よりもずっと若く見え、肌艶のいいおじいさんであった。最初に年齢を聞くと、「大正 12 年生まれだから…いくつかな？ 93 か 94。あとは計算して」と言ってくださり、なんだか場がなごやかになった。「なんでもいいので話してください」といったところ、「あなたの方から質問してくれないと、いろいろな話があるもんで」と笑顔でインタビュ

一にに応じてくれた。

Fさんは、奥様と息子さんの三大家族である。奥様は大正12年1月生まれなので、年齢は同じでも、学年はFさんより一つ上で、Fさん曰く「姉さん女房」だそうだ。奥様は3年ほど前に脳梗塞を患って半身不随になってしまったため、それ以来ベッドで寝たきりの生活となり、Fさんと息子さんができる限りの介助をしている。朝食と夕食はFさんもしくは息子さんが担当しているが、平日の昼間は仕事に出ている日も多いため、日中に訪問介護士に来てもらって、入浴と昼食の介助を頼んでいるそうだ。Fさんの住まいは荒川医院から1キロほど離れた、車で移動すれば3分ほどの場所にあるため、この日は息子さんに送迎してもらっていた。家族3人で平凡に暮らしているので、日常生活に「特別に楽しい」ということはないが、「ただ、一日一日、生きられることが楽しい」らしい。

Fさんの実家は農家で、学校を卒業すると長男以外は奉公に出される時代であったため、名古屋に奉公に行って洋服の生地を扱っていた。その後戦争が始まり、徴用され、Fさんは岡本工業という笠寺の工場で飛行機の生産に携わる。奥様とは戦争中に出会い、結婚し、二人の子供に恵まれた。60代の息子さんとは同居をしているが、娘さんは嫁入り後名古屋で暮らしている。近所の方との交流状況について尋ねたところ、「みんなのうなっけしもうた」と話し始められた。同級生が近所に2人いたが、他界してしまったために、近所にお年寄りはいないらしい。そのため、家に遊びに来る人もいなくなってしまった。F

さんは老人会に参加しても、世代が違うし近所の人もいないと考え、参加はしていないそうだ。

Fさんに「不安なことはありませんか」と尋ねたところ、「毎日の生活で不安なことは特にありませんね。夜は三人で過ごして、一日無事にすごせたな、と安心して寝床に入る毎日です」と応えられた。しかし、息子さんにお嫁さんがいないことについては、不安ではなくても、気にかかっているらしい。Fさんは、息子さんが結婚できないことは、運がなかったのではないかと思い困っている、と話された。息子さんは奥様の介護もよくやってくれていて、土日の食事は息子さんが料理から食事の介助まですべて頑張ってくれている。毎日の食事も勝手に作るのではなく、Fさんと息子さんの二人で食事の内容をどうするかを話し合ってから作っているそうだ。「これからチャレンジしたいこと」について聞いてみたが、「今は特にはない」という答えであった。三年前からの奥様の介護は初めての経験で大変だったが、「やらないといけないから」と毎日頑張っている、と話された。Fさんは息子さんのことを心配しながらも自慢に思っている印象だったので、息子さんについてどのような人かを聞いてみた。Fさんの息子さんは、岐阜の製紙会社に就職し、表紙だけでなく、色紙や、革のような特殊な紙も作る仕事をしていた。60歳で定年になったが、今も会社から頼まれて、一週間に数日のペースで会社に通っているそうだ。

Fさんに「次世代に伝えたいことはありますか」と尋ねたところ、「今の若い人に伝えたいことは特にはない」という回答であ

ったが、その理由が世代を反映しているようで実に面白かった。というのも F さんは「昔は『あそこの息子さんは極道やで』『あそこの息子はどうにもならない』というような話もよく聞いたし、現実になんな息子をたくさん見たが、今ではそんな話を聞くことはなく、今の若い人は『真面目に頑張っている』という印象です。今の若い人は、いい子ばかりで、真面目に勤めている人ばかりで、ヤクザモンなんていないからね」と理由を述べられたのである。この理由には、思わず私も笑ってしまった。

F さんは高血圧の治療で長年荒川医院に通院しているようだ。そして、息子さんも F さんと同じく、血圧の治療で荒川医院にかかっている。「荒川先生はいい先生でね、これからもずっと通院したいと思ってます」と微笑まれていた。

ここで、F さんの方から質問が来た。「あんたはどこから来たん？」と聞かれたので、「兵庫県の神戸の方から来ました」と話すと、「えらいところからきてもらって」と驚かれていたが、「結婚はされているの」と聞かれたので、独身であることを正直に伝えると、「いくつになるの」と聞かれ、「31 歳になりました」と答えると、「ちょうどいい年やで、いい人を見つけないと」と笑ってくれた。続けて、「田舎は嫌やろ？」と聞かれたので、「ここでもいいんですよ」答えたところ、「それなら農家のお嫁さんになったらいいよ。好きなことして暮らせるよ」と笑って話された。これは地元の話も聞けるかもしれないと考え、「私は本ばかり読んでいますが、それでも農家の嫁ができるん

ですか」と聞いたところ、Fさんは輪之内の農業体制について教えてくれた。どうやら輪之内には、農協ではなく「営農」という組織があるらしい。営農ができてからは、農業に必要な高額な機械を個人で購入する必要もなくなり、米などの収穫物は営農が買い取ってくれる環境になった。そのため、「百姓」という感覚はなくなっているし、農家であっても機械を使うことが前提となったので2、3人でも農業を営むことができ、奥様が田んぼに入る必要はなくなっている。Fさんの据え膳で農業が出来る。営農組織になってからは、「据え膳」状態で農業をすることができるようになり、少人数の男性で農業に取り組んでいたり、作物の作り方も詳しく知らないまま農家を始める家もあるそうだ。Fさんは一通りシステムを説明された後、「この地区は共同組織で農業をしているから、農家が損をしないし、農家であって農家でねえわ。女の人は、田んぼでもおしゃべりをしているだけだよ、だからあんなのような人でも農家に来れるよ」と豪快に笑われたので、笑顔の区切りでインタビューを終えた。Fさんも、インタビュー終了後に「この話、いつ本になるの」「出たら教えてね」と自分の話が原稿として残ることを楽しみにされているようだった。

7. 銭湯好きで病院嫌いのGさん（男性、当時72歳）

荒川医師からは、Gさんが72歳で、肺がん手術後に転移が見つかり化学療法中であることと、女性好きを豪語する面白い人であるという事前情報を頂いていた。Aさんのインタビュー

の開始が遅れてしまった関係で、Gさんのインタビューの開始が大幅に遅れ、「大変お待たせして申し訳ありません」と声をかけると、待合室で読書をしながら待って下さっていた Gさんは「もう入っていいの？今日はよろしくお願いします」と少し恥ずかしそうに挨拶をして下さった。Gさんはがっしりとした骨格で、筋肉質な男性で、軽トラックを運転して荒川医院に来院されていた。声も大きく滑舌も良く、話すスピードも速く、頭の回転が速いことが伝わってきた。

この日の Gさんは高血圧の治療もかねて病院に来ていた。Gさんは月に一回のペースで通院されている。しかし、「血圧の薬を飲まなくても、132/87 でいい結果だったよ」と嬉しそうにされていたので、「どうして薬を飲まなかったのですか？」と尋ねたところ、前日に整形外科で坐骨神経痛がひどいことを伝えたと、「血圧の薬から坐骨神経痛が起きているのではないか」と言われたために、薬を飲まないで様子を見ようと想った、ということである。荒川医院には 2009 年から通院しているそうで、通院のきっかけを尋ねたら、「同級生よ。あ、もちろんあちは優等生で、全然違う子だったけどね」「言いたいことが言えるんで、ここに通ってるんよ」という返事が返ってきた。荒川先生と Gさんは小学校の同級生で、荒川医師は小学生の頃から真面目な優等生だったそうだ。

Gさんは奥様と娘さんの 3 人家族で暮らし、以前は兼業農家をしていたが、今は厚生年金暮らしだそうだ。経験した兼業は力仕事が多く、日雇い人夫の経験もあるが、トラックの運転手

をしていることが多いという。農業は 2015 年では米と野菜を作っていたが、2016 年からは家族で食べる分だけの野菜を作り、水田は他の人に任せているそうだ。G さんの話を聞いて、F さんが話していた「据え膳農業」の話を思い出したので、「農業はすればするほど儲かると聞いたのですが、兼業をされているのですか」と尋ねてみたところ、より詳しく輪之内の農業について教えて下さった。岐阜の安八郡の農業は、10 年～20 年程前に営農組合（農協とは別）を皆で立ち上げてから、土地の分だけ、年間決められた金額を支給されるようになった。営農と農家は、小作人と地主のような関係で、田んぼに対する配当金をもらうのが農業の収入となる。営農ができるまでは、農機具を自分で一括で購入することが必要であったため、利益を上げることが大変で、一家の大黒柱として家計を支えるためには兼業をする必要があった。G さんは 30 歳くらいの時に農業を任されるようになったが、農家は田畑に対して固定資産税がかかるため支出が多いと感じていたそうだ。

日常生活での楽しみを聞いたところ、「喫茶店と銭湯」という答えが返ってきた。G さんは毎週土曜日に喫茶店に集まって同年代の友人と集まったり、毎日車で 15 分ほどの「羽島温泉」（岐阜羽島にある銭湯）にいった「憂さ晴らし」をしているそうだ。G さんに毎日通う銭湯はどんな場所なのかを聞いてみると、「安住の地やで」と言われたので、詳しく銭湯での話を聞いてみることにした。

「安住の地」の銭湯を見つけた契機は、坐骨神経痛で通院して

いた針きゅうで「温泉に行ったらいい」とすすめられたことだそう。銭湯に行ってみると職場の同僚と同僚の同級生が銭湯に来ていて、割り込んで話をしているうちに仲良くなり、20年以上の友人となっている。その友人は G さんより 6 歳年下だが、毎日銭湯で会うのが日課になっているので、お互い「今日も会える」と思っていて、自分がいけないときは必ず電話をして行けないことを伝えるようにしている。入浴後のジュースを買う時でも「100 円いい？」と言えるような友人で、貸し借りも気にしなくていい。ちなみに、銭湯は利用するメンバーが顔見知り、決まった席があり、知った顔を見つけると、湯船の中でも自然にお互いの場所を譲るような習慣もある。G さんの場合は毎日 7 時過ぎに銭湯に行って、7 時半からお風呂に入り、8 時ごろにお風呂から上がって、30 分くらいテレビを見てから帰宅することが日課になっているそう。G さんの場合は「安住の地」として銭湯を見つけたが、他人に見つけてもらった場所では満足できないのが人間であるため、自分にとっての「安住の地」は自分で開拓して見つけないといけないと考えているそう。そして、G さんの場合は、「安住の地」が無かったら、「話をぶつけられる場所」がなくなってしまう、と話していた。どんな話をするのが楽しいかを聞いてみたところ、「パチンコの話ね。あ、今日も打たないと」と笑いながら答えられた。

楽しい話題で盛り上がったので、次は「不安なこと」について確認してみた。すると、「将来に対しては不安だらけ」という、明るい G さんからは想像できなかった答えが返ってきた。

病気になること、障害がでること、認知症になること、物忘れがひどくなること、すべてに不安を感じているようだ。「最近畑仕事に行ったときに、どの用具を取りに行ったかを忘れることがあって、そんな時に、『自分も物忘れが始まったか』と思うことがある」と話されたので、「それは私にもありますよ」と答えたら、「確かに自分が忘れていないことに気付いているから、まだ認知症ではないからかもしれない。でも三人で住んでいるから、自分に何かあった時が心配」、「不安を感じる一方で、『なるようになるしかない』と考えている部分もあるけどね」「娘には世話かけたくないから、何かあったら施設に入ろうと思っているんだけどね、年金を越す費用が掛かるんじゃないかってことも心配なのよ」と話された。また、筋力が最近落ちてきたようにも感じているから、体力が維持できるように毎日 6000 歩くらいは歩くように努力している」と話されていた。「車の運転がお好きそうだけど、そんなに歩くようにしているんですか」と聞くと、「坐骨神経痛があるし、長時間座っていると、足がしびれて来るから、車を運転するのは嫌いやで。でも軽トラを運転するのは好きなんよ。座席が高くて、運転しながら景色が見ることができるし、ベンチシートのような椅子だから、体も楽に感じるし」と話され、荒川医院の周りのおすすめの喫茶店や中華料理店などを教えてくださった。ここまで話して、G さんから「がん」について話題が出ないことに気付いたが、「初対面の私には話したくないのかもしれない」と感じて、別の話題に移行することにした。

「近所づきあいの状況」について尋ねてみたところ、「田舎暮らしでは、今でも付き合いが必要不可欠」と話し始められた。Gさんが小さい頃は毎日みんなで夕食の時間まで一緒に遊び、けんかしても次の日には普通に遊べる文化があった。その一方で、子供のころからの「当たり前」の付き合いが、大人になると「監視」の側面を持つこともあり、そのことを息苦しく感じることがあるそうだ。田舎はご近所さん同士が支え合うことができる環境であるものの、面白いことがあるとすぐ話題にされてしまう部分もある。銭湯で友人に悩みごとを相談できるのも、友人が地元の人ではないからGさんの話が地元にも漏れる心配もないし、友人があれこれ話し続けるタイプではなく、結論を出そうと考えて話してくれるタイプであることが大きな理由であるそうだ。

昔と今で、ご近所との交流形態が変わらないかを尋ねたところ、「40戸くらいの世帯で一つの部落が主流だったけど、新興住宅が10戸ほど出来てね。新興住宅の人も行事には出席するけど、「田舎ならではの付き合い」というものは崩壊してきているように感じる」ということだった。そして、「最近の子はゲームばかりで、そのゲーム内容もほら、人を殺すような内容ばかりやろ？だから義理人情に薄くなっているように感じる。世代交代として仕方ないことなのかもしれないけどね」「最近では義理人情が薄れると共に、隣に住んでいる人のこともよくわからなくなってるわ」と話された。昔は、子供たちが喧嘩をしたりもめたりすると、親世代の大人が叱るのが普通であったが、今

では隣近所に住んでいる人がどんな人かわからないことから、若い子を叱ることはなくなっているようだ。「今でも女性が井戸端会議をする光景はあるけど、最近では農家の男性同士が立ち話ができる環境は無くなっているな」と少し残念そうにされていた。このような環境の変化が、Gさんの「土曜日の喫茶店」や「毎日銭湯」の習慣につながっているのかもしれない。

Gさんに「将来チャレンジしたいこと」についてきいてみたところ、「特にはないけど、『自分にできる歳の取り方』を次世代の人々に伝えたいかな」と話された。自分が将来施設に入所するかどうかは、自分が世話をかける身になったときに、嫁と娘という「残されるもの」に決めてもらうつもりであるようだ。その方が「気が楽」だから。「施設を利用すると月に17万はかかるだろうから、それは年金を充当するつもり。結婚して家族であるといっても、嫁も他人であるから、いろいろなことをあきらめてほしくないし、自分が将来嫁や家族に迷惑をかけるくらいならば、施設に入って迷惑をかけない生き方をしたい。親子でも夫婦でも他人であり、考えることは多様であるので、言いたいことを言いすぎてお互いに腹を立てない方がいい」ということだった。

Gさんに「奥様との出会い」について尋ねてみたところ、「先生、そんなことも言わなあかんの」とはぐらされてしまった。ただ、「女性の中でも、熟女が好き」ということは教えてくださった。インタビュー後に「またお話を聞かせてくださいね」といったところ「きれいな人と話すのは楽しいからね、また話そ

うか」と言って下さったため、翌年の 2 月に荒川医院を訪問した際に、G さんに二度目のインタビューを申し込んだ。

2 月 28 日に再会し、「お久しぶりですね、お元気にされてい
ましたか？」と声をかけると、いい声で「死んでました。でも
ね、今日はランチがつくと聞いてやって来たんですよ」と返し
てくれる、という冗談めいたやり取りから 2 回目のインタビュ
ーは開始した。G さんは私が荒川医師と同じ岐阜大学の出身
で、その縁で荒川医院の取材をしていると思っていたようで、
私が兵庫県から岐阜に来ていることに驚かれていた。私が兵庫
医科大学に所属していることを話し、私の活動が掲載された新
聞記事²を見せると「あら、かっこいいねえ」と言ってくださっ
ていた。

G さんはこの日は、「ランチが出るから来たんだけど、本当に
病院が嫌いだから」「病気について取り上げられている本やテレ
ビに対して、興味を持って読んだり見たりすることも嫌いなん
よ。嫁は荒川先生の著書も真剣に読んでたけどね」と話し、「聞
いていらっしゃると思うけど…」と切り出されたので、私も
「癌について話そうとされている」ということを察して、「事前
情報で G さんが化学療法中だと聞いていました」と正直に話す

² 産経新聞『ベリーダンスで心のケア 認知症やがん患者、即興で踊れる
手軽さと芸術による癒やしの力に着目』（2016.10.22 夕刊）

産経新聞『ベリーダンスで高齢者の健康調査、腰使い独特リズム効果あ
り？大阪の施設で研究開始へ』（2017.2.7 夕刊）

と、「化学療法はもう去年終わった」と答え、自分が何故病気を取り扱う番組を嫌うのかを説明してくれた。

Gさん自身小さい頃からいろいろな病気を経験していて、テレビ番組で自分が経験した病気に取り上げられていることもあり、「病気になるとこうなりますよ」「これで予防できます」というような話題を聞くと、「何を言っているんだ」と信頼できない気持ちになるそうだ。奥さまはそういうテレビ番組も好きであるが、Gさんは医療に関する番組は絶対に見ないようにしているという。いろいろな雑誌で『手術をするのがいいか』というような記事がでていますが、雑誌によって逆のことを言っている場合もあり、自分にとって何がいいのかを知る材料には出来ないと感じ、それからは自分自身だけを信じて、メディアは信じない、見ないようにしている」と話された。

そしてGさんは、検診や検査をされるのも、病気を見つけられるのが嫌だから避けたいし、病院の雰囲気嫌いである旨を話し、「自分が弱ることは、つい考えてしまうけど、やはり考えたくない」と続けられた。ここで、「荒川先生のごことは信じられますか」と、突っ込んだ質問を試みたところ、「信じられるかどうかじゃなく、ここに来るのが嫌や。血圧で一回来たけど、やっぱり検査をされるし、ここに来るのが嫌なんだ」と答えられた。Gさんとは2回しか話していないが、嫌なら嫌、信じないならば信じないとはっきり言う人であるため、荒川先生のごことは信頼されているのだと私は感じた。上述したように、荒川医院では「血圧を測って体重を図って、それを自分で書き込

む」システムであり、G さんも他の患者さんと同じようにルールを守っているし、荒川医院には入院施設はないものの、やはり「病院」という空間は苦手だそうだ。坐骨神経痛や腰痛の痛み止めの点滴をしてもらっている整形外科に対しては苦手意識はないものの、病院は検査があるため「大っ嫌い」なままで、好きにはなれないという。

がんの宣告を受けた時は、「なるようになれと思った」と話された。手術までに 1 か月以上あったので、とにかくしっかり食べて体力を保つようにしていた。肺がんの手術の時も、ストレッチャーに乗せられて運ばれるのが「病人みたい」で嫌で、手術室までは自分の足で歩いて行って、手術台が並んでいる様子も確認したそうだ。「がんの化学療法はつらくはなかったが、毛量が減ってしまうので、銭湯へ行く上で気になっていた。担当医師から「化学療法中は何を食べてもいい」と言われたため、できるだけ無理をしてでも食べて、体重を減らさないようにしていた。病院で一番苦手なのは、入院時の消灯時間後に廊下が真っ暗になる状態だという。消灯後の暗闇の中に、非常灯や懐中電灯などの明かりだけがぼーっと光る様子から、留置所や鑑別所にいるような気になってしまう。消灯時は不安があおられたが、不安に負けてははいられないと思い、昼に病室の人と話すときには「一時帰宅」や「退院」のことを「仮釈」「本釈」と言って笑っていたと話されていた。しかし、こんな冗談を言いながら気丈にふるまう G さんであっても、外出許可がでて一度家に戻った後に、病院に再度入院するときに本当に辛かったそう

である。

Gさんは肺がんになってから禁煙をしたので、一年以上煙草を吸っていないということ話を話してくれた。「禁煙が出来るなんて意思が強いですね」というと、「意思は弱い。自分で辞める決意をすればできる人もいるのに、自分は病気にならないと止められなかったから、意思は弱い」と話された。Gさんは禁煙をしてからでも、すごく暇な時には「吸いたい」と強く思うことがあるそうだ。煙草を辞めてからは、間食が多くなったという。体質的に太りにくいため、間食によって太ることはなかったが、筋力の衰えは感じているらしい。ここで、Gさんは自ら上半身の服を脱いで、手術の痕を見せ。そして「こんなに筋肉が落ちてしまった」と腕から背中にかけての筋肉の厚みが亡くなったことを気にされている様子だった。私から見ると、肋骨が透けているわけでもなく、72歳にしても筋肉質だと感じたが、Gさんは肉体労働の経験者でもあるため、病気をするまではもっと逞しい体つきだったのだろう。Gさんは「特に肩の周りの筋肉とおしりの筋肉が、仕事を辞めたら一気に落ちて、食べたら肉は下腹部につくようになった」「筋力が衰えたら、身体のいろいろな部分に痛みが出てくるようになった」と嘆いていた。

Gさんには再度「不安」について、今度は「癌になってからの不安はありますか」と聞いてみた。すると「やはり、将来の生活には不安がある」と答えられた。「考えたところで、持ち金も決まっているので、くよくよしても仕方ない。ただ、思うこ

とは『死ぬまで元気でいたい』『家族に迷惑かけたくない』ということ」と話されたうえで、「それ以外のことは『なるようにしかならない』とあきらめて、その日その日を大事にするようにしている」と話された。奥さまと二人でいても、その日その日を大事にするようにしていたら、家庭の中がほんわかして笑えるようになる、とGさんは語った。そして以前は奥さんのことを話したがらなかった、この日は夫婦の話を始められた。「人は結婚をするまでは、いいように取り繕うが、結婚をしたら、夫婦のどちらかが我慢をして妥協をするようになる。女の人とはとにかく良く話す。話すことが快樂なんだと思う。女性は話があちらこちらに飛んでも話すことを楽しめるが、男としては結論が出ない話に我慢が必要になったりする」ということだった。そして、「結論を出そうとしてくれる人」を銭湯で見つけてからは、家庭での話と銭湯での話を分けて、家族で楽しく過ごせるようになったと話されたところで、少し照れたのか「あ、もうランチ行かないと」と居心地を悪そうにされてたので、インタビューを終えた。

Gさんは私と話している時に「関西弁を聞くと懐かしい」とおっしゃっていた。それと同時に『『いい思い出』として関西にいたころのことを思い出すようになるのは、年になった証拠』だと笑っていた。Gさんは仕事の関係で鶴橋方面に行くことが多く、今でも交差点の場所や喫茶店の場所、町の焼き肉の匂いを思い出すことがあるという。大阪に汽車が走っていたころはよく遊びに行っていたが、新幹線が開通してからは親戚付き合

いくらいでしか大阪に行かなくなって、親戚との交流もあまりなくなっているそうである。

Gさんは「病院が嫌い」と言いながらも、待合室できっちり待ってくださる律儀な人だった。そして帰りに「病院が嫌いなのに、ごめんなさい」と声をかけると、「今度はランチの店で話しようよ」と笑われていた。最後にGさんには一緒に写真撮影をしてもらえないかと頼んだのだが、「子供のころに視力を失っていて、目が変だから、写真の顔がおかしいから」と断られてしまった。というのもGさんは子供のころに山で遊んでいて、顔から転んだ時に目に石が当たってしまい、手術をしても治らず、片目が中央に寄ってしまった。「そんなこと気にしないで」といったが、「それならまた来てよ。その時も元気かどうかはわからないけどさ」と笑顔で軽トラックを運転されてランチに向かわれた。

8. キャリアウーマンとして生き抜いたHさん（女性、当時96歳）

荒川医師からは高血圧を患ってはいるものの、高齢でも独歩で移動できて、100歳を超えることが予想されているという事前情報を頂き、家族が付き添いでいらっしゃるので、家族からも生活実態のお話を伺ったらいい、という事前情報を頂いていた。Hさんの家は荒川医院から車で5分ほどの場所で、この日は娘さんに付き添われて車で来院されていたが、インタビュー室にはとことこと一人で歩いて入ってこられた。話す声は高

く、かわいらしいおばあちゃんだった。白内障で視界がぼやけているそうで、私が名刺を渡したら、娘さんが「先生、若い女性だよ。帰ったら一緒にルーペで見ようね」と優しく話しかけられていた。

Hさんに「長生きですね」とお声をかけたところ、「長生きすると思わなかった」と言うとともに、「家族に見守られて早く逝きたい」と言っていた。「どうしてですか、長生きしましょうよ」というと、「家族に迷惑をかけているので、長生きしていても仕方ないと思うことがある」と答えられた。

Hさんは独身で、娘さんは養女らしい。そして農村地区で女性が一人で生きていくためには、手に職をつけることが必要であり、Hさんは「働く女性」として和裁を身に着け、90歳近くまでは和裁の先生をしていた。町で和裁の生徒さんに会うと、「先生、元気ですか」等と声をかけてもらえることが、Hさんにとっての外出の楽しみでもある。娘さんから見て、Hさんは昔から何かを作ることが好きな人で、手芸や編み物や折り紙も好きだったため、白内障がひどくなる3年前ぐらいまでは公民館の会に参加をしていたそうだ。今のHさんの日常生活の楽しみは、テレビとお話をする事。朝は朝食を食べたらまず織り込み広告を確認し、新聞のテレビ欄の確認をした後に、新聞を読んでいる。テレビで「おちょぼさん」(千代保稲荷)の番組を見て、地元のことを確認することが多い。おちょぼさんのテレビがつくと、おちょぼ稲荷の店に友人がいたことから、「〇〇ちゃん元気にしとるかね」等と話したりする。テレビも友人の

安否確認の一つとなっているようである。

Hさんの家から車で5分くらいの場所に、99歳になるHさんのお兄さんのお嫁さんが住んでいて、娘さん夫婦が仕事に出ている日中は一緒に過ごしているそうだ。昔は嫁と小姑のような関係でいろいろあったようだが、今は仲良く過ごしている。4時くらいになると、役場で働いている娘さんがHさんを迎えに行っている。朝はHさんと娘さん夫婦で三人一緒に食べ、昼は娘さんが作ってくれたお弁当を温めていることが多いが、カップラーメンを作って食べている時もある。夕食は娘さんが迎えに行った後、3人で自宅で食べるようにしているらしい。週末は家族で過ごすことが多く、30代の孫が毎日夕食後に、積極的にHさんにあれこれ話しかけている。休日には、家族がHさんをドライブに連れ出すこともある。

Hさんは要支援1の認定を受けていて、週に一回のペースで訪問介護に来てもらっているものの、自分の身の回りのことは基本的にはすべて自分でしている。一人でお風呂にも入り、トイレも和式だが家族が手伝うことはない。訪問介護の人が来る前日は自分で洗髪もしているそうだ。「では訪問介護の人は何をしているのですか」と聞くと、「話し相手ですかね」「週に一回、日中を違う人と過ごすことでも気分が変わりますし」と娘さんが笑われていた。

Hさんの好きな食べ物を聞いたところ、ケンタッキーのフライドチキンとピザという驚きの回答が来た。宅配のピザも好きで、2ピースは必ず食べるそうである。入れ歯であるもののな

んでも食べられ、ピーナッツも好きで、歯ごたえのある柿ピーや煎餅も好物だそう。Hさんが具合が悪くなることはほとんどなく、回復も早い。数年前にインフルエンザを患ったが、タミフルを指示通り服用すると、副作用もなかったそう。タミフルが効いて、発熱した夜でも、家族と一緒にエビを食べていたという。Hさんに「お元気ですね」と声を掛けたら、「亡くなった母親はもっと元気でした」と返ってきた。Hさんのお母さんはデイサービスを利用していたものの、99歳でもぴんぴんとしていたらしい。

娘さんに「娘さんにお母さんが不安を話されることはありませんか」と聞いてみたところ、「うちは私たちが送迎をしているから不便もないようで、母は体調が悪いときはすぐ言ってくれるし、特に不安な発言をすることは無いのですが」と話し始め、娘さんが考える「地域の問題」について話してくれた。まず輪之内町は交通の便が悪いので、高齢者が一人で出かけるのが難しいという地理的難点がある。バスの本数が少なく、デマンドのバスを呼ぶことはできるものの、呼んでもなかなか来ない。そのため交通手段のない独居の高齢者は活動を自粛せざるを得ず、「地元の高齢者は寂しいのではないか」と感じることもあるらしい。というのも、Hさんと娘さん・お孫さんは交流があるが、近所のほとんどの家庭では、週末にも家族と交流のない老人が多い。そのため「オレオレ詐欺」のような電話がかかってきて、引っかかってしまう老人もいる。「私たちからすると、どうして声が違うことがわからないのか、と思うのです

が、最近ではわからないんですよね。長い期間子供の声も聴いていないお年寄りが多いから。久しぶりに電話がかかってきたうれしさから、電話口の声が困っているような様子であれば心配して動こうとされてしまうんです。自分がお金を持っていても仕方がないから、と騙されてしまったり」と話された。Hさんの娘さんはショートカットの綺麗な女性で、役場で働いていたが、団塊の世代で定年になり、Hさんとの時間が増えているそう。娘さんは60歳を過ぎてからの趣味で津軽三味線を習っていて、高齢者施設のボランティアで演奏したりもしている。津軽三味線は演奏が長いと高齢者は退屈することが多いので、まずは童謡のような皆知っている曲を演奏して、最後の一曲に本格的な津軽三味線も曲を演奏することが多いらしい。「チャレンジしてみたいことはありますか」と娘さんに聞くと、「フラメンコに挑戦したかったのですが、機会がなくて」と話されていたので、私がベリーダンスなら教えられることを伝えると、「役場のランチタイムを使って教えてくださいよ」と言ってくださった。

Hさんは視力は白内障で落ちているようだが、机の上の紙屑やほこりには気が付くようで、机の上の塵を見つけては、一か所に丁寧に集めていた。耳が遠いらしく、会話のほとんどを娘さんが代弁者をする状態になっていたが、Hさんは私たちの話に何度も反応をしていた。娘さんに話をさせる体制ではあったが、違うことを言った場合にはHさんが訂正しそうな雰囲気もあった。私たちが娘さんと話していて、Hさんが聞き役に回っ

ている時も、Hさんは手をよく動かしていた。Hさんがしっかりしていることは、Hさんがいつも身近なものを触って、それに対して考えて、思い立ったらすぐ手を動かすことが関係しているのかもしれない。

9. サルから野菜を必死に守るIさん（女性、当時90歳）

荒川医師からは90を超えているやや華奢な老人であるため、インタビュー時間を短くしてほしいという事前情報を頂いていた。現れたIさんは、紫のセーターにグレーのカーディガン、茶色のハンドバックに腕時計もされているというおしゃれな出で立ちで、髪も茶色に染めて、きっちりとセットをされていた。確かに声はか弱いものの、いろんなことをたくさん話してくれる老婦人だった。

Iさんは、大正生まれの90歳。荒川医院には、3,4年前から通院をし始めたという。最近、肺炎のワクチンを受けた日に発熱し、二日間下痢をして、病院に来たら38.9度出て、その時は本当につらかったが、今は体調も安定している。Iさんは、息子さん夫婦とお孫さんと一緒に暮らしているが、お孫さん（男性）が32歳でも独身であることが不安だそう。「ひ孫の顔も見たいと思うけど、こればかりはどうしようもない。孫は奥手で、なかなか恋愛が出来ない気がする」と話されていた。Iさんは畑仕事が好きで、以前は自分で畑を耕して耕作をしていたが、最近は年齢的に骨が弱くなって背骨を圧迫骨折したこともあるため、息子さんに畑を耕してもらっている。血圧が上がり

やすいことと、声が出にくいことが悩み・不安であるものの、冬の気候が辛いというようなことは特にないそうだ。高血圧や声が出にくくなるような不調は加齢によるものではないかと私個人は感じたが、Iさんは「仕事のしすぎでバチがあたっているのかな」と気にされていた。というのも、息子さんに「畑仕事を続けているから、体調がえらくなるんだよ」と言われたことがあるという。お嫁さんにも「もう畑仕事で無理をしないで」と言われることがあるが、野菜が成長するのが嬉しくて、どうしても屋敷周りの畑仕事をやめることはできないそうだ。Iさんは息子夫婦が心配して、畑仕事をさせないように発言をしていることはわかっているものの、「でも、畑仕事はしたいの」と笑っていらっしまった。

Iさんは30代のころ、肋骨カリエスを患い、肋骨の除去手術を受けている。当時は結核かもしれないと心配をしたが、結核ではなかった。ここ三年、レントゲンの写真には影があるが、体への異変はない。「肺がんになるかも」と言われた時期もあったが、最近荒川医師から「もう大丈夫ですよ」と言われたそうだ。「荒川先生はね、一月前には『歩かなあかんよ』と言ってたけど、それから一か月後の検診の時に、『でも90かぁ…』つぶやいた後に、『転ぶと次は歩けなくなるかもしれないから、屋敷でも杖を突いて歩かなあかん』と言ってきて、荒川先生が私のことをしっかりと考えてくれていることが分かって、とても嬉しかったの」と話され、「ここに通って良かったと思っています」と言っていた。しかし、「転んでからでは遅いからと先生は

対応をしてくれているけど…杖は面倒だから使いたくないの。畑でも杖をつくとなると面倒くさいので使わないと思います」と苦笑いをされていた。Iさんの毎日の楽しみは、まずは畑仕事。それ以外では、趣味は編み物と習字と体操。月2回、集会所の「ふれあいサロン」にも参加をしている。60歳以上の人が対象であるが、若い人はあまり来なくて同世代の人が多く、「ふれあいサロン」には友達が13人ぐらいいるという。同世代の友人は認知症になって施設に入ったり、友人の他界の知らせを受けることが多くなり、友人が家に遊びに来ることやご近所付き合いは、最近ではほとんどなくなってしまった。しかし、畑があり、野菜の成長を毎日見ることが出来るから、寂しいと感じたことはほとんどない。

Iさんの最近の悩みは、サルに畑の野菜を食われてしまうことだそう。今年もスイカや玉ねぎをサルに食われてしまい、玉ねぎは鹿にも食べられたという。シカやイノシシに畑を荒らされることもあるが、柵を設けることである程度被害を防止できたりしている。しかし、サルの侵入はなかなか防げない。「サルは集団で食べ物を取りに来ることもあるけど、遊び半分で食べることも多くてね、まだ小さい野菜を一口食べて投げ捨てられていることがあって、そんな残骸を見たときはとても悲しくなるの」と本当に悲しそうに話された。大根も上の方だけかじられてしまい、ハンターが来て威嚇で銃を打つとサルの集団は移動をするが、個別行動をしているサルはなかなか居なくなる。また、サルは畑の野菜を食べるだけでなく、屋根

からものを落としたり、瓦を落とすようないたずらをするこ
ともあるという。一時期、Iさんの家の洗濯場の前の湯沸かし器
の近くにはやたら色々なものが落ちていたため、近所の人からの
嫌がらせかと悩んでいたら、サルがいたずらをしてものを投げ
ていたそうだ。

Iさんは岐阜の山側に住んでいる。関ヶ原の下で、荒川医院ま
では車で15分ほどの距離なので、お嫁さんに送迎してもらっ
て、荒川医院には月に一回のペースで通院している。今の悩み
は「サル」であるものの、将来に対して不安なことは何もない
という。家族も優しいし、畑があるので毎日が楽しく、「今が本
当に幸せ」と語られた。夕食はいつも家族で食べているが、孫
は帰りが遅くて一緒に食べられないこともある。これからチャ
レンジをしたいことは、一生畑仕事を続けること。外に行くこ
とは望まないし、家族みんなに心配をかけたくない。そして、
日中は畑のそばに居たいから、デイサービスは利用したくない
そうだ。

荒川医師からインタビューを短くしてほしいという要望を受
けていたため、この日はここまででインタビューを終えた。話
の大半は畑関係の話で、畑仕事が本当に好きなことが伝わっ
て来た。Iさんは声が出にくいことを気にされていたが、畑仕事
の話が夢中でしているうちに、声も大きくなっていった。この日は
30分ほどにとどめたが、こちらの印象としては、まだまだ畑
の話ならば続けてくださりそうな印象だった。そしてIさんの
「今、本当に幸せ」という言葉を聞いた時には、こちらまで暖

かい気持ちになった。11月にインタビューをした人で写真撮影にに応じてくれた方には、写真を同封して、荒川医師を通してクリスマスカードを届けていただいた。するとIさんからは年末に直筆の手紙が届いた。しっかりとした綺麗な字で書かれていた手紙の内容は以下のようなものだった。

『年の瀬となりました。先生、先日はありがとうございました。先生にお逢いさせて頂く様な私ではありませんでした。何のお役にもたたく。申訳なくなく思っています。優しく接して下さい先生に、何の遠慮もなく思ひのままを、お許してください。楽しい一時を過ごさせて頂きました。ありがとうございます。』

帰りには、おいしいお土産迄頂きありがとうございました。又寫真を送っていただきありがとうございます。きれいな先生と御一緒に、有難くうれしく思ひます。後から思い出しては感謝の一時を送ることと思ひます。ありがとうございます。

私、若い時に、ある先生から、朝顔を洗う時に水に感謝しますか、トイレに感謝しますか、お風呂に感謝しますか、と教えて頂き、当たり前のように思っていた私、ハット気づき、何事にも感謝出来る様になりました。病気で床につく時は、よく働いたから神様がお休みを下さったと思へとか。おかげさまで割と健康で、唯骨が骨がもろくてね・・・痛くなると、家族にやり過ぎとおこられたりね。九十年も長い人生を頂きました。幸せでした。毎日が感謝の日々です。

入澤先生にお逢ひさせて頂き、ありがとうございました。ど

うか先生もお体を大切に。ありがとうございました。

失礼なことを書いたかも。お許し下さいませ』

この手紙を受け取って、私はIさんと再会したいと感じ、荒川医師を通してインタビューのアポイントメントを取り、翌年の2月に再度Iさんの人柄に触れることになる。2月のインタビューの時には、「体験したことがないだろうものを持っていこう」と考え、有機ネイルとハンドマッサージ用のクリームを持参した。

2月18日の午前10時、「すみません、わざわざ」と言いながら部屋に入ってきたIさんと再会した。以前から、骨が砕けないように整形外科から飲み薬を処方されていたが、最近足（特に膝）の痛みがひどくなり、整形外科で骨を作る注射を受けることになったものの、注射を受けると発熱したことがあり、週に一回の注射を受けることが苦痛になっている、と話された。発熱に気付いてくれたのはお嫁さんだったそうだ。Iさん自身は注射後のだるさが収まって楽になっているように感じても、お嫁さんが念のため検温したところ 38.2 度あったため、病院にお嫁さんが連れて行ってきて、先生に「注射後に体調が悪い」と相談してくれた。整形外科の担当医からは「注射をやめたら骨が折れる」と言われて、Iさん自身は脅されているように感じてしまう。やはり「骨を折って動けなくなって、家族に迷惑をかけてはいけない」と思うため、苦痛を感じる注射も受けるようにしている。つい4日前にも注射を受けたが、やはり注射後の体のしんどさは改善されないため、「もう少し早くお

暇を頂けたら楽だったのにな、と思う」とのことだった。

最近、友人を見送ることや、友人が不調である連絡をもらうことが以前より増え、悲しいような寂しい気持ちになることが多いという。先日も友人から、大阪に住んでいる友人が一人暮らしをしているはずだが、電話をしても出ないし、どのように暮らしているか、生きているかも分からないことを知らされた。せっかく生きていられるのだから、しっかり食べて生きられるだけ生きようと電話で友人と互いに励まし合ったそうだ。

「最近みんなが居なくなってしまうという寂しさが強くて」と話しはじめ、「一緒に大正琴をしていた人も一人は亡くなってしまって、もう一人は『いずれ娘さんたちが帰ってくる』と一人暮らしで待っていたものの、結局娘さんたちは帰ってこず、その人がけがをしたタイミングで名古屋の施設にはいってしまった。知らない場所で生活することになって、友達や親戚にも会うこともできず、お見舞いに行っても誰かが分からない状態になってしまった」「このような話を聞くと、『体が痛んでも、家族と共に、今の屋敷で生活できることは幸せだ』と感じるとともに、家族に迷惑をかけていないか心配になる」と話された。今になると、家族に迷惑をかけたくないものの、家族と一緒にいたいと考えてばかりいるそうだ。

このようなことを話しているうちに、Iさんの右手の親指が変形していることに気付いたので、「どうされたんですか」と聞いたところ、若いころに畑仕事をしていて、感染症になったことを話してくれた。「感染症になった原因は分からないが、近くの

医者に診てもらったら毎日通わないといけなくなると思ったら気が重くなり、通院の開始が遅れてしまった。結局、指の先端は切り落とすことになり、昔は骨が出ていたが、今は変形しながらも爪が生えている状態で、痛みもないし、日常生活や畑仕事には支障がない」ということだった。この話をしたのちに、「仕事一点張りで、毎日を忙しく過ごしていたから、一息つく間もなく、『おしゃれ』や『かわいくすること』には無縁で過ごしてきたんです。指や顔のおしゃれは、ほとんど機会がなかった」と話されたので、「しめた」と思い、私が持参した有機マニキュア等を見せて「良かったら試してみませんか」と提案したところ、「もったいないよ」「こんな体だし、顔にも塗ったことがないから」と照れ笑いしながらも、私にネイルケアを担当させてくれた。爪が割れていた部分は爪やすりで整えた。爪は自分で切られているが、短くしすぎると畑仕事がしにくいから、少し爪を残して切っているそうだ。私が「メモを取りながら話すより、こうやって手先の手入れをしながら話した方が緊張をしないかな、と思ったので」と話したところ、「これは最高です。一生忘れません。冥途の土産が一つ増えました」言って、「こんなにしてもらったら、手を洗えませんか」と笑いながら冗談を言って下さった。私が大阪の高齢者施設で毎月ダンスを教えるイベントをして、イベントが終了した後には参加者にマニキュアを塗ったりハンドマッサージをしていることを伝えると、少し驚いた表情で「ええことをやっておくれやすのね」と目じりを下げて微笑まれた。透明のベースを塗ったら「これ

で結構です」と言われたが、せっかくだったので、ピンクマニキュアを足し、ドットの柄を足した。

サルにはまだ悩まされているのかを尋ねたところ、「しばらくは来なかったけど、最近また来るようになってね。最近は親子で3匹で来るようになってしまったの。お嫁さんがダイコンや玉ねぎに網をかぶせてくれて、サルに悪戯されないようにしたんだけど、少しでもいい加減にかけていると、サルが外してしまうの」とため息をつかれていた。

Iさんの気持ちが少し沈んでいるように感じたので、「家族も一緒にいたいと感じているから、お嫁さんも熱を測ったり、病院に相談したりしているんだと思いますよ」と話したところ、「肺炎の注射を受けた時に高熱が出た時に、『このまま肺炎になって死んでしまったら楽かな』と思ったこともあったけど、死んだ主人が肺を悪くしたときに『このまま死にたいです』と病院の先生に話したら、先生が『それなら病院に来なかったらいい』と言われたことを思い出してね、『こんな気持ちではいけない』と思ったの」と話された。Iさんは荒川医院には通院を始めてちょうど一年ほどになるが、それまでは医者にかかることがあまりなく、特に内科の先生には今まで全然縁がなかったそう。血圧が高く198近くあったことから、荒川医院に初めて来たときは、「(健康で内科知らずだった自分が病院にいることが)変な感じ」だったという。2回目に医院に来た時も、血圧を待合室で測ったら数値が高く、看護婦さんが「大丈夫ですか」と走ってきてくれたことがきっかけで、荒川医院に毎月通

院することになったそうだ。

この日のIさんは会話の節々から「家族に迷惑をかけているのではないか」という気持ちが表れていたもので、Iさんには思わず「もっとわがままになってもいいんですよ。Iさんが育てた息子さんなんだから、家族だってIさんのお世話をしたい時があるんだし、Iさんが笑顔で過ごせることが一番なんですよ」と話したところ、「家族は本当にええようにしてくれています。ほんとに、ほんとに、それしかない。ありがとうと思う」と言い、その後に「こんな私に、ようしてくださって。おおきにね。これ(ネイル)も本当に思い出です。私のような人を気にかけてくださって」と言われた。「本当はね、今回はご無礼させていただこうと思ったんだけど、お手紙で失礼なことをしてしまったかもしれないから、お詫びしたくて。特に役に立つ話も出来なくて、自分とこに来るサルの話くらいしかできなくて。でも、ええ思い出が増えました」と言われたので、「また会いましょうね。病院に来るのが大変だったら、私がIさんのおうちの近くまで会いにいきますよ」と言ったら、Iさんは突然黙り込みそのまま泣き出してしまった。どうやらIさんは私から再び面会のアポイントメントを受けたときに、「会って迷惑をかけないか」と迷っていたらしい。そして荒川医師に相談したところ「会ったらいいんじゃないの」と勧めてください、診察を兼ねて会いに来てくれたようである(そして、私に会うと決めてからは、面会前日にパーマ屋に行って髪形も整えられていたという)。Iさんの涙が止まらないので、私があわてて背中をさすったら、「お嫁

さんがね、写真立てを買ってきてくれてね、先生との写真も写真立てに入れて家族の写真と共に飾ってるんですよ。だから毎日先生に会えるんです」「毎日拝んでるんです」と言ってくださった。「ありがとう」「おおきにね」「幸せ者です、私は」繰り返されるので、Iさんの華奢な体を抱きしめたら、しっかり力を入れて抱き返してくれた。Iさんと一枚でも多く記念の写真を残したいと思い、インタビューの最後に、「もういいですよ、飾ってありますから」というIさんに、スマホの自撮り機能を使って一枚だけ写真に付き合っていたいただいた。「いい先生に会えたことは、いい思い出だと、こちらの先生(荒川医師)にも言ったの。こちらの先生にお世話になる縁で、一生の思い出が増えました」「幸せな一日をありがとうございます」と言いながら、Iさんは部屋を出て行った。

10. 二人三脚で地域政治に尽力したおしどり夫婦のJさんと奥さん(男性、当時88歳 女性、当時86歳)

初めての夫婦インタビューであった。荒川医師からの事前情報によると、ご主人のJさんは元町会議員で、旭日双光章³受賞者であるが、老いが徐々に進行しているということだった。J

³ 旭日双光章(きょくじつそうこうしょう)：日本の勲章の一つで、旭日章(きょくじつしょう)6つのなかで5番目に位置する。2002年8月の閣議決定「栄典制度の改革について」により、「勲五等双光旭日章」から勲五等が省かれ現在の名称になった。

さんの奥さんは胆石術後再発再手術経験者で、脂質異常症があり、しっかりした女性だという。Ｊさんと奥さんは「病院に来るから風邪をもらってはいけない」ということで、荒川医院につくや否やちゃんとマスクを着用されていた。夫婦のインタビューというのは初めてで、インタビュー時間は 50 分ほどであった。この日は娘さんと三人でインタビューに臨まれたが、驚いたことに娘さんはＪさんの息子さんのお嫁さんであった。

Ｊさん夫妻は、独身の次男さんと 3 人で暮らしているが、長男さん夫婦も同じ敷地内の家で暮らしていて 5 人家族状態。お孫さんもいるが、今は離れて暮らしているそうだ。Ｊさんは昭和 4 年 5 月 23 日生まれの 87 歳で、来年が米寿、地元の人からは Ｊさんの「タケオ」という名前にちなんで「たけちゃん」と呼ばれている。Ｊさんの奥さんは 85 歳。息子さんたちの仕事の関係で夕食はばらばらになってしまうので、朝ご飯は必ず家族で一緒に食べるようにしている。奥さんは 365 日毎日三食の料理を作っていて、息子さん夫婦の食事も担当している。息子さんやお嫁さんの夕食は、奥さんが作って冷蔵庫に保管して、温めたらいつでも食べられるようにしているという。

「ご主人がおうちにいらっしゃるようになっていかがですか」と尋ねたところ、奥さんは「Ｊさんは昔はたくさんお金を持っていたけど、今は引退しているから、邪魔になるわ」と言われて笑われた。Ｊさんは、知り合いからデイサービスの利用を勧められて、2016 年の 3 月からデイサービスを利用し、最初の三ヶ月間は週 3 日利用していたが、6 月からは利用回数を増

やして週 5 日利用している。お風呂はデイサービスで入るようにして、入浴後は塗り絵と昼寝と体操をしている。J さんはお花が好きで、お寺の立花を担当していた経験もあるため、色彩感覚が豊かで、複雑な塗り絵も得意だそう。J さんはデイサービスにはあまり行きたがらないため、週に一回は奥さんもデイサービスと一緒にいくようにしている。J さんはデイサービスに通うことを決めたときに、知り合いから「楽しい人にならないかん」と言われていたため、デイサービスを「楽しい場所にしないで」という意識があるようである。

将来の不安なことを聞くと、夫婦では「特に何も」とおっしゃっていたが、奥さんがマスクを外して小声で「認知症がね、ここ一年で急にひどくなったの」と言われた。J さんには認知症の不安はないようだが、奥さんは深刻に捉えて心配していた。認知症については、この日はそれ以上聞かないようにした。J さんにチャレンジしたいことを聞くと、「まだまだたくさんあるよ」と笑った。J さんは若いころに野球をしていたこともあり、スポーツが好きなので、まずは東京オリンピックに行きたいそう。奥さんが「行きたいの?」と呆れた顔をして、「そりゃあ、行きたい。今回は直接見に行きたい」とはっきりと答えられた。

J さんは町会議員を 9 期、計 36 年勤め、体育協会の仕事もしていた。この間、奥さんは「大変だった」という。今から思うと「ようやっていたな」と不思議になるそう。娘や息子が大きくなってからは奥さんの役目を手伝ってくれたが、最初は

家事と議員の妻の両立が大変で、立場上悩みができて「誰にも言われへん」ことが一番つらかった。Ｊさんに「Ｊさんも疲れませんか」と尋ねてみたが、「そういう仕事が好きだから」と夫婦で同時に答えられた。

Ｊさんの家は兼業農家で、農業と酪農をしていた。酪農が始まってから５年後くらいから、織物業を奥さんが開始し、Ｊさんは田んぼの役員やPTAを継続して担当し、老人会を主催していた時期もある。当時は夜中でも何かトラブルがあればＪさんはすぐに現場に駆け付けるようにしていた。議員をしていたころは、Ｊさんは近所の人からいろいろと頼まれごとをしていたが、町会議員を止めてからは、人付き合いは急激に減った。仲良くしていた人が高齢になって亡くなってしまったこともある、若い人ともたまには交流があるが、恒常的な交流にはならない。

話を聞いていて、おしどり夫婦の印象を受けたので、「おしどり夫婦ですね」というと、またしても「そんなことはない」と夫婦でハモるかのように同時に答え、その場にいた全員が暖かく笑ってしまった。私が「奥様の方が強いのですか」と聞くと、奥さんが「そんなことはありませんよ」と笑っていらっしゃったが、するとＪさんが「今はこっちが食べさせてもらっているから、弱いわ」と笑った。Ｊさんは奥さんに普段から「家のことを全部してもらっている」「料理を作ってもらっていて、奥さんがいなくなったら困る」という認識を持っていて、Ｊさんが奥さんに感謝していることを奥さんも分かっている。奥さんは

「お父さんが議員をしているときは、とにかく逆らわなかった」と言っていたが、それは J さんが政治や人助けが好きなのを分かった上で、「好きな仕事をさせてあげたい」という思いからだったという。60代から70代にかけては、Jさんと奥さんは時間を作っては二人で世界中を旅して回り、ブラジルまで行った。娘さんの話では、Jさんが議員を辞めてから、娘さんがどこかに連れて行ってあげると誘ったりしたが、「今になったら、特に行きたいところもなくなった」と Jさんも奥さんも旅行に行きたがらないという。すると Jさんが「旅行はもういいかなと思うけど、ひとまず、東京オリンピックには行きたい」とまた言い始めたので、「本当にオリンピックには思い入れがあるのですね」と私も笑ってしまった。

お二人は、娘さんに送迎されて、荒川医院には月に一回のペースで通院している。奥さんは膝の調子が悪く、治療のため接骨院に毎週通院していた時期があるが、最近は調子がいいので通院回数も減り、(それでも先生は「来て下さいね」としつこくいうので)別の接骨院に通ってみようかなと考えているそうだ。Jさんは今は足腰に不調がないが、過去には足をよく怪我をしていた。実家の農業を手伝おうとするとアキレス腱を切ったり、怪我が治ってまた農業の手伝いを再開したら、今度はリヤカーで踵を損傷したこともある。「Jさんは忙しくなると怪我をするの」と奥さんは笑っていた。そして、1日か2日農家の仕事をすると何らかの健康トラブルを起こしてしまっていたことについては、Jさんも自覚があるらしい。ちなみに、Jさんの

お母さんは 94 歳まで生きて、前日までご飯もおかずも食べて平穩死だった。そのため、J さんの体の弱さは、「親譲りのものではないと思う」と親子でうなずかれていた。

奥さんは J さんが町会議員をやめた際に、これからの楽しみとして、「二人でお茶を飲みましょうね」と思って茶器を集めたりしたが、いざ茶道をしようと思うと、奥さんが糖尿病になってしまって、茶道のお茶菓子は体に良くないからあきらめることになってしまった。J さんはお酒が飲めなくて甘いものが好きだったために、近所付き合いの度にお菓子を食べて、糖尿病になっていたのではないかと奥さんは疑っている。「隠れて食べてたんですよ、きっと」と奥さんが言っても、J さんも「ははは」と笑って目線をそらすだけで否定しなかったところを見ると、当たっているのかもしれない。「お茶菓子が食べられないから、お菓子の代わりに漬物でもいいかな」と奥さんは笑っていた。

J さん奥さん夫婦が次世代の人に伝えたいことは、「喧嘩をしないこと」である。他人の前で喧嘩をすることはよくないと考え、二人は子供たちの前では、一度も喧嘩したことはないそうだ。J さんが議員を辞めてからは、奥さんが言い返すことも出てきたが、言い返しているだけであるにも関わらず、孫が奥さんに「おばあちゃん、そんなに喧嘩しとったの!？」と聞いて心配してくることがあるので、孫には「おばあちゃんたちは一度も喧嘩はしたことがないんだよ」と言っている。実際に J さんに家にいる時間が出来るまでは、喧嘩する暇など一度もなか

ったそうだ。Ｊさんが外で近所の人を守って、奥さんが家を守ることを当然として 36 年間に過ごしていた。これからようやく夫婦二人の時間が出来るはずだが、Ｊさんは「(夫婦の時間なんて) あったらあかんわ」と笑っていた。Ｊさんと奥さんは趣味が全く合わないが、二人は「趣味は仕方ねーで、合わせるもの」と思っているようだ。Ｊさんは今でもテレビで国会中継を見るのが好きであるが、ただ、国会中継を気になって見ても、「どうしようもない」と感じてはいるようだ。何もできることはないので、政治は「どうしようもならないものになっている」と考えているという。Ｊさんは近所の人にも喧嘩をしないでうまくいってほしいと考えているため、何かあると、「どうぞ、どうぞ」と支えたり、仲介に入ってしまう。「政治は誰かがやらないといけないことなので、率先してやっていきたい」とＪさんは話した。Ｊさんが近所の世話ばかりを焼いていることに対して、奥さんは泣いたことはないけど、「つまらんなあ」「情けないなあ」と思うことはあったらしい。

Ｊさんは近所の人からは「たけちゃん」と呼ばれているものの、奥さんは Ｊさんのことを下の名前やあだ名で呼んだことはないという。Ｊさんも「呼んでもらわなくていい」と気恥ずかしそうにしていたら、奥さんが「私は『あんた』って呼んでるから」と笑った。奥さんは Ｊさんのことを「お父さん」と呼ぶことが多かったが、孫が出来てからは「おじいさん」と呼ぶことが増えたという。奥さんの話では、Ｊさんは 80 歳を過ぎてから聴力が低下して補聴器が必要になったにもかかわらず、隣

の部屋であっても、なぜか J さんに関する話は全部聞こえている「地獄耳」だから、悪口が全く言えないそうだ。奥さんが「地獄耳」と発言した際に、J さんが「ふっふっ」と笑っていた様子からすると、本当に聞いているのだと思う。

ここで、J さんと奥さんの若かりし頃の話や、夫婦になった馴れ初めを話してもらった。J さんは高等科卒業後、鳴海（愛知県）の学校モールス信号を打つ訓練を受け、戦争中はモールス信号を打っていた。鳴海に戦闘機が来たときは、戦闘機を追い返そうとして日本人が石を必死に投げたりしていたが、今から思うと届かなくて当然だと思う。当時は通信の仕事ばかりをしていて、大垣電信電話でも通信を担当していた。奥さんは二木（岐阜県）出身で、J さんは、地域の青年団で知り合った。当時の J さんはかっこよく、話も合い、敏子さんは初めて出会った時から「いいなあ」と思っていた。奥さんが「本当にかっこよかったんですよ」というと、J さんが「やろ？」とドヤ顔をされていた。奥さんは長女で、弟さんが 12 歳も下だったこともあり、自分が家を継ぐべきだと思っていたが、「J さんと結婚できるなら家を継がない」という覚悟を持って嫁入りをしたという。奥さんのお父さんも町会議員をしていて政治家であったので、「政治が好き」の J さんを奥さんのお父さんは気に入り、自分の跡を継がせようとしたそうだ。結婚後は、J さんの弟が同じ敷地内に住むことになって、奥さんは動揺もしたが「絶対に喧嘩はしない」と誓った。弟さんは、奥さんより 10 歳年下で、J さんと結婚した時にはまだ中学生だったが、J さん

の選挙でも畑仕事でもなんでも手伝ってくれて、とても仲良く暮らすことができた。弟さんは今 75 歳。「やり手の弟」だと奥さんは嬉しく感じていて、弟さんから「お姉さん、お姉さん」と慕われることがうれしい。

Jさんと奥さんは笑いの絶えない仲が良い夫婦で、夫婦間の皮肉やジョークもあり、想像以上の楽しいインタビューとなった。奥さんがしっかりと Jさんをリードしていて、奥さんのほうが年下であるものの、「姉さん女房」状態だと感じた。荒川医師から頂いた事前情報から、Jさんの状態はもっと深刻なのかと思っていたが、実際にお会いしてみたら、素敵な老紳士だった。奥さんが「先生はご兄弟は？」と聞かれたので、私が一人っ子であることを伝えると、「かわいそうに」「話し相手ぐらい欲しいよね」と奥さんが言ってくださった。奥さんは、家族の絆を大切にす、温かいおばあちゃんだった。ちなみに、娘さんは、ご両親はお見合い結婚だと思い込んでいたらしく、奥さんがJさんとの馴れ初めを話し始めると、「えーっ、知らなかった」「お見合いだとおもっていたのに、恋愛結婚だったの？」と驚いた表情をされていたが、娘の戸惑う姿にも老夫婦はにんまりされていた。娘さんからしてみると、Jさんは物心ついたときから父親である前に政治家で、地域全体の相談役の存在であったため、恋愛というプライベートな領域があったことは想像できなかったのかもしれない。お二人の馴れ初めを聞いたところでインタビューは終わり、一緒に記念撮影をしたが、写真を撮るタイミングで「マスクを外さなきゃ」と夫婦揃ってマスク

を外された。Jさんは写真がどのように取れたかが気になっていたようなので、画像データをお見せすると、「こんなに毛がなかったかな」と頭をさすられたので、奥さんも娘さんも笑っていた。奥さんが話したりしないような様子だったので、「またお会いしたいですね」と声をかけたところ、「本当やね、また会いたいね」「話したいね」と言ってくださった。

インタビュー後に奥さんと少し二人で話す時間があったが、奥さんはJさんの認知症「ここ一年で急激に進んだ」ととにかく心配していた。認知症の進行が早く、本人も家族も受け入れられていない部分が多いらしい。Jさんは塗り絵が好きなようだが、最近は塗り絵もうまく塗ることが出来ないことがあるらしく、奥さんはJさんの楽しみがなくなることや、Jさんと話が出来なくなることを不安に感じている様子だった。娘さんはIさんの家にお嫁に行ったが、奥さんは「Iさんがお姑さんで本当に良かった」と感じているらしい。この日は娘さんがJさん奥さん夫妻とIさんを荒川医院に連れてこられていたので、夫婦のインタビューが終了するまでIさんは待合室で待たれていたが、インタビュー後には奥さんとIさんが「どうだった?」「楽しかった」「どんなことを聞かれるのか少し怖かったけど、話に来て良かった」等の会話を交わし、「こんな話、なかなか話せないから」と奥さんとIさんは嬉しそうに話していた。

Jさんの奥さんとは、2月18日に再度インタビューをすることになる。やはり奥さんの娘さんが車で送迎されるということで、Iさんの2回目のインタビューの後で、奥さんからお話を伺

うことになった。奥さんがインタビュー室に入ってきて下さったので、私がお茶を入れようとしたところ、奥さんの方から「お父さんがわからなくて困ります。認知症はひどくはないものの、私もどうやって対処したらいいかわからんもんで」と話し出したため、まずは奥さんの話をしっかり傾聴しようと考えた。

ご主人の認知症は2年ほど前からで、急に発症した原因について奥さんに心当たりがあるかどうかを尋ねてきたところ、「議員を辞めたら、周りの人が急に離れてしまったんですよ。それまではお父さんをJさん、Jさんと持ち上げていた人も、お父さんを頼って来ていた人もきびすを返すようにいなくなってしまうてね。お父さんはショックだったんじゃないかな」「町会議員の時は、お父さんと『付き合っていたら利益があるかも』と考える人たちが、勝手によってきたけど、今では誰も来ないからね。町会議員の時に町の合併話もあったけど、合併をしないことが決まった瞬間に、人が離れて行って、さらに議員をやめたらさっぱり」と話された。認知症らしき症状を発症されてからは急に状態が悪化し、荒川医師の勧めでデイサービスに通うようになり、今では一時期ほど認知症がひどくはなくなっているものの、奥さんにとっては「いつかまた戻ってしまうのではないかと」気になり、些細なことでも「認知症だからこうなるのではないかと」気が気でないらしい。例えば、Jさんが食事の度に飲む薬を忘れてしまうことに対しても、奥さんは「認知症のせいではないかと」気にかけていた。息子さんが食前の薬

を持って来るが、食事だと思うと、Jさんはまずお箸を持とうとしてしまう。毎回、薬を置いて、水を置いて、食事を置いて、薬を食前に飲んでもらおうとするが、ご主人はまず箸をとって食事を食べようとしてしまうそうだ。奥さんは「お父さんはとにかくご飯を食べないといけないと思っているのか、みんなが揃う前にも食べてしまうんです」とため息をつかれた。この話の内容からすると、Jさんの薬の飲み忘れは認知症と云うより、食欲旺盛から来ているように思われるが、こうしたことも奥さんにとっては心配の種になっている。また、Jさんはトイレは自分で行くものの、自宅ではたまに失敗することがあるので、デイサービスの人に「お父さんはトイレを失敗しませんか」と聞いてみたら、「失敗なんてされませんよ」という答えが返ってきたそうだ。デイサービスは自宅ではないから、Jさん本人も「しっかりしているから」と自慢げにしている、デイサービスの人には「しっかりしている Jさん」と思われたいようであるが、奥さんは「外ではちゃんとできているのに、やはり認知症なのか」「家ではどうしてうまくいかないのだろう」と気になって仕方がないという。

Jさんは昨年はデイサービスに行きたがらなかったが、今年になってからは毎日「今日は俺、行きたない」と一度は渋るものの、なんだかんだ言いながらも毎日皆勤で通っている上に、デイサービスがない土日の朝も自発的にデイサービスに行く準備をしているところを見ると、ひとまず嫌がって奥さんに構ってほしいのではないかと思うそうだ。土日に「今日は行きたく

ない」という J さんに、奥さんが「何いうてんの、土曜日はやすみよ」というと、「ふーん」と言って、特に行かなくていいことを喜んでいるような素振りもない。J さんがデイサービスに行きたがらないから、週に一回は必ず奥さんが同行することを続けていたが、1 か月ほど前に膝を痛めてしまって、最近はデイサービスに同行したくないと感じることもあるそうだ。整形外科に通うのが面倒になって、去年の10月ごろから注射を打ってもらうことをやめたら、年末から痛みが再発してしまい、今はまた毎週の整骨院への通院を再開しているという。整骨院の先生からは「奥さん、こそこそ動き回ってはいかんよ」と言われ、実際についつい部屋を掃除したり、洗濯物を干したりしていたら、痛みがぶり返したので、娘からも孫からも怒られてしまったそうだ。

荒川医院に通院されたきっかけを尋ねたところ、「昔から、院長先生（荒川淳子医師）が一人で病院をされていた頃から、娘がお世話になっています。荒川（淳子）先生はそれはもう綺麗な先生でね。このあたりでは有名な美人さんだったんですよ。講演会に来られた時はそれはもう目立つ存在で。孫は荒川（淳子）先生の検診を受けたし、孫たちにとってはかかりつけ医なんです」と話された。「私は今は迪生先生にお世話になっていて、病気を見つけてもらったこともあるんですよ」と話された後に、「まあ、私は先生にお世話にならなくても元気なんですけど、娘が心配性だから」と言って、にやりと笑われた。

今は膝が悪化しないように、家の中ではほとんど動かないよ

うにしながらも、食事の支度だけは続けているようだ。食事はご主人の体調を考えて、息子さんの意見もあり、薄味にしている。Jさんは血圧も高く、糖尿病もあるので、塩辛いものと甘いものを避けさせようとして工夫をしているにも関わらず、Jさんはすぐに醤油やソースをかけたがり、先日も餃子にタレを使わなくていいように味付けをして作ったのに、やはりたれを使っていたので、みんなで食事の時は見張るようにしているという。Jさんはお饅頭も大福も必ず一度に二つ食べないと承知しないので、最近はおさんが「ダメ、明日あげます」と片づけをするようにしている。「意地悪をしているみたいだが、お父さんのことを思うと仕方ない」とつぶやかれた。Jさんがよく食べるのは昔からだそうで、以前はおいしいお餅にこだわって隣町まで大福餅を買いに行っていたが、Jさんは大福を見つけるとちゃっちゃと二つずつ食べていた。また、おさんはお餅を何個も食べることはできないが、ご主人は若いころはお餅を30個以上食べたりしていたという。

お餅を30個という量に驚いたので、「お餅が好きなんですか」と声をかけると、お餅に関するエピソードを話してくれた。おさんは「いい餅」にこだわって買うようにしていたところ、最近娘さんに「うちのお餅は違ったんだね、おいしくないお餅があるよ」と言われた。おしゃべり仲間の人にも、お餅を届けるときには、米からついたお餅を選ぶようにしているようだ。Jさんが以前に別のお餅を持って帰ってきたもののあまりおいしくなかったため、おいしくなるように臼でついてみた

が、やはりおいしくなるわけではなく、やはり素材がよくないと、おいしいお餅にはならない、と思っている、と話された。同じ敷地内のすぐ隣に住んでいる義理の弟さんにも、お餅は持っていくそうだ。

Ｊさんが議員を引退してからはずっと家にいるようになっていたが、家事は手伝ってくれないのかを尋ねてみたところ、「お父さんは食べるだけで、全然」と笑われた。奥さんが以前にテレビを見ていると、子供たちが食後に自分のお皿を流し台に片づけている様子が放送されていて「これはいい」と思って、「我が家でも自分が使ったお皿は流し台に自分で片づけましょう」と提案した。すると息子さん夫婦は自分のお皿はきちんと片付けてくれるものの、Ｊさんは絶対にしない。それどころか奥さんが自分のお皿を片付けて、奥さんの前が開くと、Ｊさんがお皿をそっと移動させて片づけてもらおうとする。思わず「これはもっとこっちにあったんじゃないの」と指摘をすると、Ｊさんは「足が動かない」等の理由をつけてやはり片づけようとしなそうだ。「Ｊさんは甘えているのですね」と私が笑ってしまうと、「毎日こんな感じです」と微笑まれた。「お父さんはまだまだ動けるのに。Ｉさんは９０歳を超えても自分の身の回りのことは全部自分でされているし、少しは見習ってほしいです」と微笑まれたところで、２回目のインタビューは終わった。奥さんに「またお会いできるといいですね」とあいさつをしたところ、「そうですね、こうやって家のことも話ができるのはいいですね。若い人と話せるし」と言って下さった。

11. 医学系の講習会だと勘違をしてスーツ姿で現れた K さん
(当時 79 歳、男性)

荒川医師から「明るい高齢者のインタビューもしてみてもどうか」と提案され、2月18日に「80歳頃で、元気な人」という事前情報しかないまま、Kさんとは対面することになった。Kさんは荒川医師からの今回のインタビューの趣旨を理解されていなかったようで、「健康法」や「元気な歳の取り方」のような何かの自分のためになる医学系の講習だと思って、きっちりとスーツを着てネクタイを締めて現れた。そのため、「え、私が話すんですか」と驚かれ、さらには「こんなに若い女性が来られているとは」と少し躊躇っていらっしまったが、ご本人が想定していなかった突然のインタビューであるにもかかわらず、どの質問にもしっかりと答えてくださった。

まず年齢をお聞きしたところ、Kさんは当「今79歳で、あと2か月で80歳なんです」と答えられた。Kさんのお父様は60台で癌でなくなったため、「70歳になればいいかな」と思っているうちに、長く生きてしまったとおっしゃっていた。現役時代は農業関係の仕事をしていたという。Kさんは奥様と二人暮らしで、基本的には食事もおさんと食べているので、一人で食事をすることはほとんどない。子供は二人いたが、名古屋の方で家庭をもって生活をしている。孫は25歳、23歳、18歳の三人いる。お孫さんとの交流は多く、電話で話したり、メールもしているそうだ。Kさんに通院のきっかけを聞いたと

ころ「通院を開始したきっかけは鼻炎で、最初は院長先生に診てもらっていたんですけど、血圧が高かったこともあり、迪生先生に専門的に見てもらうことになったんです。私は『これに決めたらこれ』と思う部分が強く、自分の健康は荒川先生にお任せすると決めました。だから、もし荒川先生に「よそにいけ」と言われてもほかの病院に行くつもりはないし、先生が引退すると言い出しても他の先生にかかるつもりもないんですよ」と笑われた。

Kさんは老人会に所属している。地元の海津（岐阜県）の老人会に参加されているそうだが、多少の助成金が降りているので、スポーツ活動を中心に催し物も開催されている。Kさんは若いころはゴルフをしていたが、年を取ってからは、老人会を中心にグラウンドゴルフ、ゲートボール、歩くイベントに参加して運動をしている。老人会では認知症を患っている人が多いため、小林さんは認知症の方と話す機会が多いが、「認知症の方も基本的には普通に会話をできるし、普通にしゃべっていれば返答もしてくれます」と話された。一度距離を置いてしまうと次に会って会話をしたときに「何ですか」となってしまう程度で、話しているうちに会話のキャッチボールも成立する。ゲートボールに参加している認知症の方を例にあげると、「ゲートボールを2回打ってしまったときに『二打うったでしょ?』と言うと、『まだ一打やろ』と返事をされる程度で、こちらが注意していれば、ゲートボールも普通にできる状態です」ということだった。

ご近所付き合いの状況について尋ねてみたところ、「田舎なので、近所との交流はもちろんありますよ」と即答をされた。同世代同士で顔を合わせたら、「ちょっと喫茶店に行こうか」というようなコミュニケーションも残っている。ただ、昔のような『おっかないおじいちゃんおばあちゃん』がいて、『何か問題があったらその人たちに出てきてもらって懲らしめてもらう』という風習はなくなった、と話された。今はよそ家庭の子供に注意をすると「うちの子にいらんことを言って」と母親から文句を言われたりするため、『地域で子供を育て、時には叱る』という行動は高齢者も避けるようになっている。Kさんは『年配者が秩序を教えて、下の世代を育てる』というのが、本来の地域の教育の在り方だと思っているが、そのような地域性は否定される方向に進んでいる気がする、と話された。子供のお母さんたちが井戸端会議で子育てに関する情報を交換したりすることも減っているし、子供たちのコミュニティでも『お兄ちゃん世代が小さい子の面倒を見る』『虫取りなどの知恵を教えてあげる』という交流はほとんどないという。Kさんは、昔は子供を持つお母さんたちに、「学校は勉強の場ですよ。しつけまでは出来ませんよ」というアドバイスをしていたそうだ。というのも、Kさんが小さかった頃は、軍隊上がりの先生ばかりで、何かしでかしたらスリッパで叩かれていたし、怒られた時には何か悪いことをしでかしてしまっていた。理不尽に叱られたり、叩かれたりした記憶はなく、学校で勉強することによって自然と社会でのマナーや「していいことと悪いこと」を身につけ、

下の学年の面倒を率先してみることを習得したという。それがいつの間にか、体罰が厳しく禁止されて、今では子供が先生から叱られたら親に報告をして、親が学校に文句を言いに来るようになってしまった。「これでは、自分がどうして叱られたのかを子供が考える機会が亡くなってしまっているのではないか」とKさんは懸念し、「親が先生を否定するのではなく、子供と一緒に『なぜ怒られたか』を考えてくれたら、それが子供のしつけに繋がると思うのですが」とため息をつかれた。

ここで、『次世代に伝えたいこと』について尋ねたところ、「日本人は大和民族であるから、大和民族らしさを大事にしてほしい」と言われた。「最近では西洋化が進んで、私が若いころ教えられた『男性は男性らしく、女性は女性らしく』という考えは廃れてきています。『男女平等』というのは結構なことですが、やはり男性の役割と女性の役割というものはあると思うんですよ」と続けられた。先日 K さんが教育関係の現場に行ったときに、男性がお茶を運んできたので、「女性が運んでくださる方がいいよ、気分が明るくなるよ」と言ったところ、「最近ではそれはダメなんです」と言われて、本能的な違和感を感じたそうだ。『平等』という名のもとに、最近では色々不自由になっている気がする。男性からお茶を「どうぞ」と言って差し出されるよりも、女性から「どうぞ」とお茶を出される方が、『やわらかい感じ』を受け、おいしくお茶を飲める気がする。もちろん女性は女性で『向いている』『向いていない』はあるので、家事は女性がしないといけなわけではないし、女性がお茶くみをして

男性が上司にならなければならないわけではない。でも『男性色』や『女性色』を無理に消すのではなく、男性らしさ、女性らしさを「その人らしさ」として大事にしてほしいなと思う、ということだった。Kさんはお孫さんには「必ずおいしいものを食べなさい」「おいしいものを食べたら幸せになるように、いい人と居れば、自然に笑顔になれるから」と教えているそうだ。

日常での不安なことについて尋ねたところ、まず自動車免許の制限についての不安を話された。Kさんは自動車を自分で運転して荒川医院まで来られていたが、Kさんの移動手段は基本的には自動車である。「最近が高齢者の自動車事故の話題が多いので、自分と年齢が近い人が事故を起こした記事を見ると気分が滅入ります。『一定の年齢になれば、免許を返上すべきじゃないか』という世論もありますが、車が運転できなくなると私たちの様な田舎の高齢者は生活が困難になるので、代替措置等を考えてほしいと思います」と、世論に対するご自身の考えを話し始められた。Kさんの考える代替措置は、「免許の更新は3年に統一されているが、高齢者の場合は、1年での免許更新にして、講習を受けた上で、実際に運転のテストも行い、『乗れる』と判断をした人に免許を更新する方式にしたらいいいのではないか」というものだった。高齢者の認知症は3年以内にも急に進む場合もあるし、年齢一律に免許の不更新を決めることはナンセンスに感じるという。高齢者も有料の講習を受けることによって、行政の財源も補えるかもしれないし、1年更新にすれば

「普段一緒に生活している人では気づかないような認知症の発症や進行に気付くきっかけにもなるのではないか」ということだった。Kさんに、自身が運転する上で気をつけていることがあるかどうかを聞いてみると、「車間距離を取るようになっている」という返事が返ってきた。Kさんが運転するときは、安全に配慮をして車一台分の車間を開けるようしているが、名古屋市内を運転すると混雑時に車間を取ることは難しくなる。そのため、Kさんは自分が事故を起こさないようにするためにも、名古屋のラッシュ時の道路のような、十分に車間距離がとれる自信のない道は避けるようになっているということだった。

話が「社会への不安」の方向に進んでしまった印象を受けたので、「奥様と二人暮らしで、不安を感じることはありませんか」と尋ねてみたところ「今、特に不安を感じることはありません」と答えて下さった。そのため、「もし何かあった時には奥さんに相談しますか」と尋ねてみたところ、「私は昔人間なので、相談はしないんです。（妻には）気づいて、と思うんです」という、私が予想していなかった回答を返された。詳しく事情を聞いてみたところ、今までKさんが体調が悪い時などには、3歳年下の奥様が察して行動をしていたので、自分からしゃべるということをする必要がなかったそうだ。ここでふと思い立ったように、「二人暮らしなので、老老介護になったあとに、体が不自由になったらデイサービス等を利用しないといけないと思いますが、どのような場所か分からない不安はあります」と将来の不安を話し始められた。「もちろん老人会で『これくらいのお

金を持っていないと、サービスを受けられなくて困りますよ』
というようなことが話題になったりはするが、もし本当に利用
する立場になった時にどのような手続きをして、どのような基
準でどのような施設を選べばいいのかが分からない。今は夫婦
二人だけの生活が『自分がいい』と思って続けているし、息子
には息子の生活権があるし、息子のお嫁さんにいきなり頼って
いいものかもわからない」ということを話された。そして「迷
惑をかけないためには、施設の利用を考えないといけなくなる
ことは認識していますし、老老介護の末に、介護をしていた方
が先に亡くなってしまって、介護されていた方だけが取り残さ
れるというケースも現実に見ているんです」と続けられた。テ
レビや新聞で老老介護に関係する記事を読んで「大変な事にな
っている」と感じるし、老老介護の解決案を具体的に知りたい
と思う。しかし、メディアはトラブルがあった時の報道ばかり
していて、そのようなトラブルを避けるためには、どのような
手段があったのかをおしえてくれないので困る、と話された。

これからチャレンジしたいことは特にはないが、もしできる
ことならば、ゴルフのコースを死ぬまでにもう一度自分の足で
回りたいと思っている。2年前に膝を悪くしてから、凸凹で足
を取られないように、ゴルフを辞めてしまった。最近はカート
で回ることもできるが、ゴルフをしているとラフに入ることも
多いし、やはり自分で歩いてゴルフをしたいと思う。

Kさんが生き甲斐としていることは、やはり『孫との交流』
だそうだ。「年齢的にうっとうしがられるときもあるけど、孫と

の交流が日々の楽しみです」とにっこりとされた。でも最近の孫たちが電話をしたがらず、メールばかりなので、本当はメールを読んでいるが「おじいちゃんはメールは見ないよ」と言ったりもしているそうだ。というのも、Kさんは孫の声を聴いて『元気なんだな』と感じて安心できるものなのに、電話に出られないときは、孫が後でメールで「元気にやってるよ」と返してくることが多い。メールで笑顔のマークを寄こしてくるものの、それだけでは安心できないので、ちゃんと声が聴きたいと思うそうだ。Kさんはお孫さんとの交流を通して、「高校くらいになると、一度ジジババを鬱陶しがする時期が来るが、また大学4年くらいになると孫は変わってくる気がする」という。「就職活動を経たりして、考えが変わるのかもしれませんがね。それでも、社会人になると仕事が忙しくなるからまた疎遠になって、結婚のような親戚に報告をする時期になると距離が近くなるのかもしれないと思います」と話された。そして、Kさんの一番上の孫が25歳だが、いまの子は女の子でも、全然結婚する気がなくて困る、と続けられた。「なんでもあって便利なことも、恋愛や結婚をしない原因なのかもしれない」とKさんは考えている。

Kさんが孫に会いに名古屋に行くと、電車の乗り継ぎも便利だし、高齢者の地下鉄やバスの乗り放題を使ってデパートで時間をつぶしたりもできるし、コンビニにいけば1人用のご飯もあるので、田舎より都市の方が生活はしやすいと感じた。でも、息子さんが名古屋に引っ越した時に、Kさんは田舎の感覚

で近所の方に挨拶に回ったが、挨拶にいくと「何ですか」と不審がられることもあったので、都市の寂しさも感じたという。Kさんの地元ではお嫁さんが一人やって来ただけでも町内会をあげて挨拶をする文化であるが、息子さんは3件隣の人が誰だか知らない状態だった。そのため、息子さんたちに「こっちに来なさい」と言いたくても、都市と違う風習の田舎に呼ぶことは息子さんたちに不自由を強いることになるのではないかと考えてしまい、一緒に暮らしたいという気持ちを伝えられず、将来は施設に入るしかないと思っているそうだ。ちょうど、インタビュー開始から45分が経過し、Kさんのインタビューはここで終わった。

Kさんの話には、納得させられる話が多かった。「女性らしさ」「男性らしさ」を強調することは、最近ではセクハラやジェンダー問題を引き起こす原因にもなってしまうが、「その人らしさ」というものを大事にする上で、もっと尊重していてもいいのではないかと思う。

「施設を考えるしかない」というKさんの考えの背景には、田舎と都市の文化の違いがあることも「地域性」を考える上で大事なポイントだと考える。

12. 好奇心旺盛で物事を極めることが大好きなLさん（男性、当時82歳）

「元気な高齢者のインタビューを」という提案で、荒川医師から二人目に紹介されたのがLさんだった。そのため、事前情

報については白紙の状態インタビューに臨んだが、インタビュー室に現れた L さんは、エンジのジャケットを着て、髪もきっちりセットしたおしゃれな老人だった。背筋がピント伸びていることが印象的だったが、荒川医師が「今日は L さんの話をしてあげてください。自衛隊、消防、ダンス、勲章…ね」と意味深な発言をされて、荒川医師は診察室に戻られた。

L さんは昭和 9 年 12 月 29 日生まれで、石原裕次郎と一日違いの誕生日。当時 82 歳だった。奥様と息子さん（長男）と三人で暮らしている。息子さんは放射線技師をしているので、勤務の関係で毎食を一緒にすることはできないものの、一日に一食は必ず三人一緒に取るようにしているそうだ。

そして、L さんの身の上を聞き出そうとしたところ、L さんは一気に話し始めた。そのときの様子が読み手に伝わるように、以下に、L さんの話を一気に書こうと思う。

戦争中は「産めよ、増やせよ」の時代で、L さんは父親が 40 代の時に多治見で生まれた子で、8 人兄弟の 7 番目。長男は大正 6 年生まれである。昭和 20 年に母親を亡くし、その時は「太陽がなくなった」「不幸の始まり」というような感覚だったという。小学校時代は「班長」をしていて、終戦後に「学級委員」という言葉が定着して、学級委員長になった。部落の高等科に進学し、名古屋の熱田の無線工学院を出て、無線通信士の 2 級国際試験の受験を考えた。上の兄弟が電電会社にいたために、最初は電電公社の電線を引っ張る仕事をするのを勧められたが、母親が死んだこともあり自衛隊に所属した。無線通信

士の試験の二次試験の受験資格は一年有効なので、自衛隊に行った後に二次試験を受験しようと思い、一次試験を受験した後自衛隊に就職した。しかし、二次試験を通過することができなかったため、無線通信士の資格を取ることができなかった。自衛隊には6年間勤務し、その間は北海道に滞在していて、当時は北方領土や網走も管轄内だった。Lさんが所属していたのは武器隊で、不発弾の処理や車両整備をする部門だった。Lさんは暗号士として働き、数字で暗号化されて送られてくるメッセージを解析して文章化して伝える役目を担っていた。普通、自衛隊は1期2年だが、武器隊は3年1期で、2期勤めたため、6年間の勤務となった。その後、北海道での就職活動もした。自衛隊時代にトラックの免許も取っておけばよかったのだが、実地試験で一人だけ落ちてしまった。普段通りに運転をしていればよかったのだが、試験官が車の調子を見る目的を兼ねて派手に運転しているのを見て、「ああいう運転もあるのか」とその通りに運転をしてしまったら試験には落ちてしまい、10人の受験者で1人だけ不合格だったそうだ。

自衛隊を辞めた後は、北海道の登別の本という旅館での第四番頭を経験した。就職して最初の2ヶ月は下足番をしていて、下足番から番頭に上がった。「当時はいろいろな人が旅館に応募をしていたけど、下足番にされた段階で続かない人がほとんどだったんですよ」と話された。Lさんは1日に4回くらい大浴場を利用していたが、その時に全身刺青が入ったお客さんの剃刀を間違えて使ってしまって、そのお客に「室蘭の海に浮かび

たいか」と怒鳴られて絡まれたこともある。その時にはどこの旅館に泊まっているかを尋ねて、夜にお酒を持って行って丸く収めてもらったらしい。お酒を一緒に飲んで「ごめんね、勝手に使っちゃって」と言ったところ、「いいよ、いいよ」と言ってくれて、一晩飲んで話して、朝にはすっかり打ち解けてしまった、と笑顔で武勇伝を語って下さった。

旅館の番頭をやめた後は、羽島市の第一防災に就職をした。平成 15 年 68 歳の時(小泉総理の時)に、消防本部が東京で表彰されることとなり、岐阜県の代表として L さんと奥様が東京のプリンスホテルに赴き、天皇陛下から直々に勲章を頂く機会を得た。その後、定年まで消防で働いた後は、天下りをして 5 年働いて、77 歳までは警備員をしていたという。

L さんは 17 歳の時から社交ダンスをしていて、自衛隊にいたところは夜間に帯広や札幌で社交ダンスを習い、消防に就職している間は社交ダンスを中断していたものの、定年後は大垣で社交ダンスを習った。岐阜県はモダンとラテンで 100 種目(10 種類×10 階級)あったが、L さんは全部習得をした。そして羽島市の会館で 10 種目のファイナルスペシャルに出場するつもりだったが、出場が決まっていた直前に急性膵炎になってしまい、大会に出ることは出来なかった。平成 22 年 12 月に、L さんが奥様と二人で静岡銀行伏見支店に口座の解約に向かっていた車中で、みぞおちに差し込みが来た。岐阜にすぐに引き返し、荒川医院で応急措置をしてもらい、血液検査を受けたところ、通常は 100 程度のアミラーゼ数値が 1500 もあった。膵

臓に腫瘍が出来ていることが分かり、大垣の市民病院であらゆる検査を受け、入院を 12 回もした。L さんの場合は、お酒も飲まないし、運動もしていたため、膵炎になるとは思ってもしなかったという。膵炎で入院して、点滴を受けてから、髪の毛がてっぺん禿のようになり、息子さんに笑われてしまったこともある。ここ一年は入院をしていないが、今は荒川先生から「ダンスは見るのもダメ」と言われているので、ダンスからは遠ざかり、ダンスは忘れてしまっていると思う、と語られた。

L さんにとっては、最初の入院時の 7 日間の絶食が辛かったそうだ。入院は寝ていればいいもので、最初の 2 日は絶食にも耐えられたが、三度の食事が出来ないということは思ったより苦しく、4 日目くらいからは修行僧の修行のように感じ、日に一度は「このまま寝たら、もう目が覚めなくなるのではないかな」と感じてしまったそうだ。精神的に辛くなると、夜中も眠ることが出来ず、夜中の二時頃の看護婦さんの見回りの時に「どうして起きているの」と聞かれたこともあるが、うまく理由を応えることができなかった。病気をしてから、L さんは煙草を止めた。そして検査の結果、3cm~4cm ある腫瘍が良性だったことが分かり、L さんは「手術を受けたら二度と家に帰れなくなるのではないかと不安に感じていたため、なかなか手術を決意することができなかったが、その後も入退院を繰り返すこととなり、4 度目の入院の後に市民病院の先生から「なんで手術をしないのか。このままでは膵炎で死んでしまいますよ」と怒られ、手術をしないといけないことを悟った。当時は

自分の病気について調べる手段もあまりなかったので、広辞苑や電子辞書で検索したり、本を読むことによって、Lさんはできる限り自分の病気について知ろうとした。そして外科部長の先生が手術時間の短縮を考えてくれた上に、「手術をしたら生きられる」と言ってもらえたので、手術を受けることにした。

手術後は体調がいいので、こんなことなら最初に手術を受けていたら、ダンスの大会にも出られたかもしれないと思うらしい。ダンスが出来なくなった今は、毎日青竹踏みと散歩をして、一時間座ったら5分は歩くように心がけているそうだ。「死ぬかもしれないという時は怖くありませんでしたか」と尋ねたところ、「死ぬ恐怖はなかった」という。手術した日の記憶もない。昔は「頭脳が発達しなかったら臍臓が悪くなる」という説もあって、当時はそのような迷信を気にしてしまっただが、今となっては違うと思う。「臍臓癌で亡くなる人の報道が多いので、良性のまま手術が出来てよかったと思う」と話された。

Lさんは消火器の取り扱いの資格だけでなく、ボイラーやクレーンの取り扱いの資格も持っていて、奥様からは「あなたは土方の免許ばかり」と言われるそうだ。庭師の資格は通信で、通常の半分の価格で取得した。庭師の資格を取得したときに、奥様から「それなら庭師の管理士の資格は取ってはどうか」と提案されるが、「さすがにそれは取りませんでした」と笑われた。それでもLさんは家の庭を自分で手入れ出来る程度にはスキルを磨いているそうだ。「松の手入れは手の甲の形に手入れをして、6平方センチを残すといい形になるんですよ」と豆知識

を教えてくれた。

Ｌさんの趣味兼楽しみは、四柱推命学。京都の亀石先生の本を読んで勉強しているが、40年ほど続いている。小さいころから、「人間はいくつくらいに死ぬのか」ということに興味があったことがきっかけで四柱推命に興味をもったが、奥様も息子さんも興味がないので、一人だけの趣味になっている。四柱推命の先生たちは辞書のような本を20回以上読んで暗記するまでに追求しているので、自分は40年続いているだけでまだまだだと感じるという。

Ｌさんに老人会の所属やご近所付き合いの状況について尋ねたところ、老人会に所属はしているものの、籍だけを置いている状態で、特に活動はしていないとのことだった。近所づきあいは、「可もなく、不可もなく」の状態だという。「可もなく、不可もなくというのは」と尋ねたところ、「あまり心情を入れない感じで接しているんです」と答えられた後、「たとえば、『今日の富士山はきれいですね』と新幹線の隣の席の人に声をかけられたときに、そんなに綺麗ではないなあと思っていても、ひとまずは『そうですねえ』と返事を返す感じですね」と続けられた。ここで富士山が例に出てきたのは、Ｌさんが富士山が綺麗に見える三島に住んでいた時期があるからだろう。Ｌさんは、工学院の学費でお金がなくなったときに、三島で農作業の手伝いを二週間だけして、その時に毎日富士山を見ていて、その時の富士山は格別に綺麗だったそうだ。

Ｌさんが「Ｌ家」に来たのは、婿養子に入ったからである。Ｌ

家の庭を見ていたことが縁で、今の奥様のお父さんから養子のお話を提案された。Lさんはアルコールを受け付けられない体質だったが、奥さんは酒飲みが嫌いだったので、「お酒も飲めていたら、今ここにいないかもしれない」と笑っていた。ちなみに、奥様はLさんのことを「酒を飲まなかったことだけはよかったけど、あとは全部バツだった」と言うという、また笑っていた。

荒川医院には、平成20年からお世話になっていて、最初は高血圧を患って通院を始めた。「先生に許してもらえたら、ダンスをしたいですか」と尋ねたところ、「病気になったころは、3時間踊っても大丈夫な体力だったが、やはり病気が怖いから、ダンスは好きでももうできないと感じている」と答えられた、「やはり健康が一番だからね」と微笑まれた。自分に何かあったときに相談する相手としては、まず荒川医師が浮かぶらしく、「これからも困ったことがあれば、先生に相談すると思います」と話された。

「これからチャレンジしたいこと」については、「まだ死にたくはない気がするので、ひとまずあと2、3年は生きたい」と即答で返された。「次世代に伝えたいこと」も尋ねてみたが、「若い人に伝えたいことは、四柱推命や『時が大事』ということですね。天地人の考えについて、最近の人は意識をしていないけど、ちゃんと考えてほしいです」と答えられ、約一時間のインタビューは終了した。

Lさんはとにかく勉強をすることが老後の楽しみである様子

で、家族とも仲がいいようだが、Lさん自身が凝り性の性格のため、地域コミュニティに積極的に関与するというよりは、自分自身の趣味を楽しみながら第二の人生を謳歌している印象だった。Lさん自身は、早くに母親を亡くして、様々な転職を経た後に、「表彰もされる」という経験をしたために、力を続ければ第三者から認められることも経験していて、自分の人生にはとても満足をしている様子であった。

13. 最愛の妻を看取った歌人のMさん（当時81歳、男性）

Mさんは荒川医師提案の「元気な高齢者インタビュー」の最後の対象者である。Mさん昭和11年9月20日生まれの81歳で、奥さんを看取って、現在は独居だった。Mさんは背も高く、がっしりしていて、活舌もいいので実年齢よりもかなり若い印象であった。私が名刺を渡すと、Mさんもご自身の名刺を差し出されたのでとても驚いた。そして、Mさんは1時間45分という、インタビューの最長記録を出すことになる。

どう見てもMさんが81歳には見えなかったので、「(年齢より)若く見られませんか」と尋ねてみたところ、嬉しそうに最近、脳年齢テストを受けた話をしてくださった。産業祭に行ったら脳年齢のテストをしていたため体験を試みたら、「脳年齢が70歳」という結果が出たそうだ。そして、そのことを荒川医師に伝えたところ、「どこの会社で、出処がわかるものですか」と興味のなさそうな言い方をされたが、Mさんがこっそり電子カルテの入力画面を確認したところ、荒川医師がしっかり

電子カルテに記録をしていたそうである。「なんだかんだ言って、先生はきっちりメモしてるんですよ」と笑われていた。

Mさんが私に荒川医師と知り合ったきっかけを質問されたので、岡山の生命倫理研究会で口演されていたことがきっかけであることをお話しすると、「先生はえらい方だからな」とうなずかれた。Mさんは、荒川医師の論文も読まれたことがあるらしい。そのうえでMさんは「荒川先生が考えていることがこのくらい(目線くらいの場所を左手で示す)だとすると、市民病院なんかにいる医者が考えていることはこのくらい(机くらいの場所を右手で示す)で、えらい差があるんだな」と続け、「理想を現実化していくということはなかなか難しい。下の医者が、荒川先生レベルまで上がることはできないんじゃないかなあ」とおっしゃっていて、このことは私が初めて荒川医師と会ったときに感じたことと同じ感想だったのでとても驚いた。Mさんにそう感じる理由を尋ねたところ、「一年に一回は市民病院に入院しているけど、その時には毎回『荒川先生のレベルの医者は市民病院にはいない』と感じるらしい。また、Mさんは市民病院に入院したときに、医師と看護師の壁を感じたこともあるらしい。Mさんが入院していた時に、担当の看護師さんが雑談で「私は血を見ても平気だけど、一つだけ、患者が嘔吐をすることには慣れないんですよ」と話してくれて、「昔は酔った妻に私もされたなあ」と思い出すとともに、その看護師さんと打ち解け、入院中はいろいろと話せる仲になったそうだ。そして、看護師さんが患者のために毎日しっかり勉強していることも知

り、「こんな子が医師になったらいいのに」と感じたため、感じたままを本人に話したら、「それは看護婦と医師の格差を知らないから」と言われてしまったという。Mさんは娘さんが看護師をしていることもあって、医師と看護師の格差や病院内のヒエラルキーについては多少知っているつもりだが、やはり医者が『傾聴の心を持って、看護師や患者の話を聞かないといけないと思う』という。そして、そのためには「優秀な医療者になる『准医師』という立場を作って、積極的に医者に意見をできる立場を確保した方がいいのではないかと思う」という斬新なアイデアを提案して下さった。

Mさんは四年前に奥様を亡くし、三人の子供は看護師と公務員と自営業で、公務員の息子も転勤が多いので、今は独居をしているということだった。「独居をしていて困ることはありませんか」と尋ねたところ、「去年の11月に、寝るときは平気だったのに、朝起きたら腰痛がひどくて1mも歩けずに困った体験をした」と話して下さった。「そのときはトイレに行きたくても腰が痛くて動けないことに本当に困った。消防署が設置してくれた非常ボタンまでも遠く、近くにあった携帯電話で息子に連絡をしたが、「腰が痛くて動けなくて、トイレにも行けない」と伝えたら、「なんだ、そんなことか。お父さんが死ぬか生きるかなら、走らないといけないけど」と言われてしまって、思わず「そんなことって…俺にとっては大変なことなんだぞ。死ぬか生きるかの時は、電話もできないわ」と言ってしまった。「そのときはなんとかして、時間をかけて自力でトイレに行けたもの

の、体が冷えてしまって、そのあとも体が（痛みで）つらかった。」という。そして、子供たちと連絡が取れても、子供たちにも家族や仕事があって自分のことで精いっぱいになるから、なかなか実家のことまでは手が回らないことを認識し、「救急車でなくてもいいから、動けないときに少し手伝ってくれる人が近くにいたらいいのに」と思ったそうだ。そのため、Mさんはインタビューの2日前に、地域の社会福祉協議委員会の寄り合いで、「俺のようなことを不安を感じている人はほかにもいるだろうから、俺が元気だったら、輪之内の人のところならば、連絡をもらったら30分以内に駆けつけてあげるつもりだ」と言ってきたと話された。しかし、自分もいつまで動けるかがわからないし、自分が駆けつけても老々介護になるから、難しい問題だなと考えているという。

このときに一人の老人のトイレの緊急の場合について、「ポータブルトイレ以外で何か方法はないかな」と尋ねられたので、Aさんが使用している尿瓶の話と、高齢者施設では吸水性に優れた大型犬用のペットシートを利用しているところもあることを話した。すると「下手に動くと怪我の可能性もあるし、排泄するときは人に見られないままの方がいいし、汚れるのが嫌という人がほとんどだと思うから、『これがあるから大丈夫』と思えるものをベッドや布団のそばに置いておく方がいいのではないかなと思ってるんよ。尿瓶にペットシートか、ええことを聞いたわ。」と言ってくれた。ただ、頭では大丈夫と分かっているけど部屋では排泄をしにくいのが人間の心理なので、私からは「ペ

ットシートの上なら漏らしても大丈夫と頭ではわかっているが、尿瓶ならベッドが汚れないと分かっているが、『部屋ですることの抵抗感』から、尿意があっても排泄が出来ないということもあるだろう」ということは話した。

M さんの場合、息子が「いずれは戻る」と言っているが、いつ戻って来るかも分からないので、「独居の高齢者にどのようなものがあればいいか」ということについて普段から構想を巡らせているらしい。先日は鶏のゲージを見て、「ゲージのような囲いの場所で、排泄をできて、暖かいお湯でおしりを洗える装置があればいいな」と思ったが、その直後に「いやいや、近所の人は何らかのタイミングで見て『うわ、M さん、ゲージに入っているわ。頭おかしいんじゃないの』と思われるはいけないので、この構想はダメだなと思った」と笑っていらっしやった。ゲージ式のトイレ以外にも、自分が実際に病気になってからは、寝たままお風呂に入れる装置などいろいろな想像をめぐらすようになったという。「酔っ払いの弊害は、自分が酔っ払った経験がある人でないと分からないものなので、病気になった人だからこそ分かることもあると思う」と話されていた。M さんにデイサービスの利用を考えないかを尋ねたところ、「デイサービス等の利用を考えたことはない。将来も絶対に入りたくないと思う。在宅で過ごしたい」という返事だった。

M さんは食事はすべて自分で作っていて、お惣菜を買ってきて食べるということはない。自分が年の割に元気でいられる秘訣は、約 50 年四国礼拝の旅を続けて、自分のことは自分で

する習慣をつけていることにあり、脳が元気である秘訣は、無線通信をしていて、家にいてもいろいろな話をしていることだと思う、と話された。元気で明るい印象の M さんだが、4 年前に奥さんを看取り、一度は生きる気持ちも萎えた時期があったそうだ。世間では「妻に先立たれると、夫はその数年後に亡くなってしまおう」といわれているし、自分も一時は相当に弱ってしまったが、人生の見方を変えて、「妻の 7 回忌までは生きたくないといけないな」思うようにしたらいい。今は、不安なことは、特には感じない。人生のことは、仏様にお任せをして、病気のことは荒川先生にお任せをしている。昨年末に、荒川先生にこれからの目標を聞かれたので、その時は「病気は気の病だから、気をしっかり持とうと思っている」と話したという。

M さんは、自分の思いを文字にすることが好きで、短歌を作っていた。この時は、奥様を想って作った短歌をまず見せてもらったが、奥様をなくされた悲しみが読み手に伝わって来る短歌だった。仏教の中に「諸行無常」という言葉があるが、M さんは奥様の死を経験して、「諸行無常を受け入れることはできない」と認識したという。その後、四国に行ったら、知り合いの住職が「説教を辞めた」と言い出したので、その理由を聞いたら、「どんなにえらそうに説教をしても、自分は人には言えないようなことをしていて、自分の説教と自分の行動が違いすぎるから、説教は止めた」と言う。M さんが話を聞いてみたところ、その人は「無常を説いている立場なのに、毎晩毎晩、妻の位牌を抱いて、川辺で『なぜ逝ってしまった』と号泣すること

がやめられない」と話したそうだ。やはり故人への想いを断ち切ることは、誰にとっても難しいことなのだろう。Mさんは『諸行無常』『諸法無我』と言っても、どうしようもないときもある」と話しを続けた。これ以上ないくらいに痩せた時期もあったが、その時に「そんなことではいけない」と言って、お寺に連れて行ってくれた人がいて、お寺についたら「ここに仏さんがいるから」と言われて、生きる気力を得られた時もあるという。Mさんからは、短歌を掲載する許可を頂いているので、以下にMさんが亡き奥様に当てた短歌を記す。

『すみなれし館を後にひとりゆく 西方彼方か 今いずこに
愚かなる 我を慕いて半世紀 妻（きみ）のおかげと 朝な
夕なに

ひと時も忘れぬ 妻（きみ）のひとことが 流れを今も出会いに
戻す

会うことが 別れる定めと云われても 我が心に器無きを知る

繰り返し読むたび想う文字列に 悲しい一滴ぼつりと落ちる』

Mさんは歌謡詩も作成されていて、そのサンプルも見せてくださった。「羨望の女(せんぼうのひと)」と「傷」という詩だった。短歌や歌謡詩の創作活動については、新聞で紹介されたこともあるらしい。Mさんはいろいろな場所に遊びに行くたびに詩が出来るといふ。1つの詩を作る時間が5時間だとしたら、大体99%は考えている時間で、文字にしている時間は短いそう

だ。そして M さんの感覚では、文字に一気にできた時の詩は出来がいいと感じる。M さんの歌謡詩に曲を付けようとしてくれる人もいるが、正確に音に合わせると、字数がずれてしまうことがあるため、なかなか曲がつくことは難しい。歌謡詩を作るときは、特定のモデルや時間を想定して作らないことが多い。歌謡詩は先生に就いて学んでいるが、短歌は独学で学んだという。短歌を添削する先生で「文法や言葉遣い」を異様に直す先生がいて、「こういう先生は嫌いや」と思ったが、他の先生から「作品を作ってよかったと思える詩を作ればいい」と言ってもらったことがあるので、それからは自分の気持ちを率直に表現できる詩を作成するようにしているそうだ。ここで、「羨望の女」と「傷」の歌謡詩も以下に記す。

『 羨望の女

- 一. 口づけさえも交わさずに 去り行く貴女の面影を 一人寂しく胸に抱く 切ない眼に流れる涙 あ、七色の虹よ 伝えてほしい
- 二. 貴女のうなじの思い出だけが 今宵ネオンのグラスに浮かぶ 一時だけのはかない夢か 咲かないつぼみと知りつ、も あ、それでも春に託したい
- 三. この世に貴女がいる限り 春に咲かない花もいい 秋に散らない夢もある 別れホームの恋しい胸に あ、貴女に全てを捧げたい 』

『 傷

- 一. 夜の貴女を夢に見て 夫婦を描いたその時も 涙に濡れた
私の心 忘れられない悲しみの 誰にもこの傷わからない
- 二. 涙も凍る寒い夜 たった一度の心の傷で 飲むほど貴女が
眼に浮かぶ 思い出だけのこの傷は 貴女も私も同じ傷
- 三. 萌える気持ちの口づけも 定めという字が別れを告げる
グラスに浮かぶ貴女の姿 涙とともに飲んでみたら な
ぜに消えないこの未練 』

「これからチャレンジしたいこと」を聞いてみたところ、「これからも死ぬまでお寺を回ること」と「輪之内の老人たちの助けをすること」と答えられた。四国に行くときには車で行っていて、事故がないように、1 時間に必ず一回は休憩をして、少しでも眠気を感じたらちゃんと寝るようにしているという。そして M さん自身は、荒川医師に「延命措置を希望しない」と伝えていて、サマリーに DNR（蘇生処置拒否）の意思表示を記録してもらっているが、自分が動ける間に輪之内の老人から連絡が来たときには、駆けつけたり、救急車を呼んだりもしてあげようと思っているという。というのも、M さんは「仏さん」の存在を信じているからだそう。数年前に蜂に刺されてショック状態を起こして、歩けなくなったことがあり、その時は息子さんと病院の職員さんが M さんをひきずって運ばれているような状態で、病院にいた人は「この人はきっともう助からない」と思っていたようだが、結局 M さんは助かった。このことを、

Mさんは、「世の中には仏さんがいて、救われたのだと思っている」そうだ。Mさんはお参りに行ったら、よく自然に泣いてしまうという。そして、科学では証明できない神秘的なことも世の中にはたくさんあるのだと思っているそうだ。「東北の震災の時に、火葬場の扉が開かないことがあって、ご縁さんが手を合わせたら扉が開いたという記事を見たことがあってね、神秘的で不思議な話だけど、こういう話を「嘘だ」とは思わない。そういうこともあるのだろうか、と感じている」と話された。

Mさんは聖書をすでに50回は通読しているそうだ。輪之内でも宗教の勧誘に来る人がいるが、ちゃんと聖典を読んでいる人は少ないため、Mさんはその人たちには、表紙がちぎれるまで読んでボロボロになった聖書を見せて、「5回読むだけでも足りない。表紙がちぎれるまで読んで、まず少しでも理解しようとしなさい」と伝えているそうだ。ちなみに、Mさんはごえんさん（ご院さん）に「あの世に行く日を予約できないかな」と言ったことがあるが、そのときには「それはいかん」と言われた。「あの世に行っても自分の場所がないと困るな」と思って発言をしたそうだが、「そんな切符は渡せません」と言われてしまったと笑っていた。

次世代に伝えたいことは、「目に見える世界だけでなく、目に見えない世界も理解しようとする生き方をして欲しい」ということ。科学的に証明できない、目に見えないことに対してどのような態度を示しているかという視点を大事にすれば、もっといじめとかの問題もなくなるのではないかと思うそうだ。そし

て、今の社会には他人の批判をしたがる人が多いが、そういう人には「一度読んで気に入らんなんて馬鹿な話はない。批判しようと思うなら、その人の文章を 10 回は読んで、書き手の気持ちを理解しようとしてからでしか、批判をする資格はない」と主張したいという。

M さんの交流は輪之内だけでなく、大垣の人とも交流が多いという。お寺関係で話をしたり、無線関係で話をする人は大垣の人が中心だそうだ。M さんは PC も使いこなしていて、facebook も登録しているそうである。ただ、ネットでの情報の伝達の速さを「怖い」と思うこともあるため、facebook 等の SNS に深入りはしないようにしながら、連絡手段として利用をしているらしい。気づいたら、インタビュー時間は 1 時間半を超えていたので、ここまで話したところでインタビューを終了した。

[終わりに]

以上が、私がインタビューをした 14 人の人々の記録である。どの方も限られた時間の中で必死に話して下さり、どの方の生き方も個性と尊厳にあふれていた。私のつたない文章力で、14 人の人々から得た話を十分に書き表せるとは思えない。そのため、この原稿を仕上げるのは、私にとって大きな挑戦であった。ただ、急に取材がしたいと云った私を暖かく受け入れて下さった荒川先生、そして私が現場で感じたなんとも言えない充実感を与えて下さった通院患者の皆さんへの感謝の気持ち

を少しでも原稿に残したいと考え、拙い文章を何度も書いては「こうではない」と消すことを繰り返した。

本原稿になるまで、最初のインタビューから二年以上の月日が流れてしまった。この原稿はもちろん、荒川医院に届ける予定であるが、何人の方の手元に届くのかは分からない。実際、Cさんはインタビューの直後に静岡に引っ越しをされてしまった。それでも、この原稿は「書き上げないといけない」と取材をした日からずっと感じていた。

当時、兵庫医科大学の研究生という立場であった私は、今は同大学の非常勤講師となっている。そして今から荒川医院での経験を振り返ると、それは「研究者としての覚悟を決める大きな契機」であり、研究志願者・入澤仁美の原点である。

私の初めてのフィールド調査の場所がこの荒川医院であり、私はこの場所とこの場所で出会った人を忘れることがないと考える。荒川迪生医師は私の心の恩師であり、尊敬する地域密着型かかりつけ医である。ロースクール出身で、当時は法律の知識と判例の知識ばかりに偏っていた私に、臨床を知る機会を与えて下さった先生と私を信頼して貴重な話を聞かせて下さった皆様に、ここでお礼の言葉を述べさせていただいて、結びとしたい。

荒川先生、本当にありがとうございます。先生が理想とされている医療が実現するよう、医療者が患者と向き合える環境が整うよう、私は研究者として臨床・法律・倫理を繋ぐ架け橋になることを目指します。

そして、インタビューに答えて下さった 14 人の方々、本当にありがとうございました。私は皆さんの話から、たくさんことを学び、勇気をいただきました。皆さんが「次世代に伝えたいこと」は私が可能な限り発信をさせていただくことをお約束いたします。

[謝辞]

最後に、診療時間と取材時間が重なるに関わらず取材に快く協力をして下さった荒川淳子会長、取材に当たって荒川医院まで同行してインタビューの経過を見守り、インタビューの記録を確認し、時に写真を撮る役割を務めて下さった稲垣恵一氏（日本赤十字豊田看護大学、非常勤講師）、そして『縮小社会 第三号』に本原稿を掲載することを勧めてくださった元田武彦氏（縮小社会研究会 生物多様性分科会 世話人）に厚く御礼を申し上げ、感謝の意を表す。

＜インタビューに答えて下さった皆様＞
（写真掲載の許可を頂いていた方のみ）







流通が自立的な小農業を破壊する
- 農産物廃棄問題に対する新たな調査研究の必要性 -

縮小社会研究会員 五十嵐 敏郎

【abstract】

Agriculture is essential for maintaining civilization. The development of self-sustaining small-scale farmers is critical to the healthy agriculture. Today, problems are emerging that hinder the development of self-sustaining small-scale farmers such as promotion of large-scale agriculture, seed monopoly, distribution and retail monopoly by large companies. . Here, I take up the monopoly issue of large companies in distribution and retail. In Japan, little investigation on this problem has been done. It is necessary to change the consciousness of consumers (citizens), and not the government office but we, citizens themselves have to investigate this problem. I insist that eliminating exclusive control of large enterprises in the field of agriculture is important challenge of citizens, especially for members of the Forum on Shrinking Society acting voluntarily.

はじめに

石油危機は言われて久しく、いささか“オオカミ少年”のようになっているが、採掘される石油の量及び質の推移を調査すると、いよいよ 2020 年代には現実になる可能性が大きくなっている^{1) 2)}。質の低下で石油価格が高騰したり、量の減少で石油の供給が制限されるようになると、石油への依存が大きい交通・運輸システムに続き大規模農業も崩壊の危機に直面する。農業は文明維持のための一丁目一番地であり、農業が崩壊すると文明が崩壊する。石油危機に陥った時に農業の崩壊を食い止めるのは、石油への依存が少ない自立小規模農業である。

しかしながら、最近になって小規模農業の自立を妨げる政策や商業システム（流通システム）が目立っている。一つは、種子法廃止法案であり、農業の入口である種子の大企業独占体制が目論まれている。非常に大きな問題であるが、別の機会で述べる。ここでは、もう一つの問題である流通の大企業独占問題について述べる。種子法廃止法案が農業の入口問題であるのに対し、農業の出口問題である。流通の大企業独占は農産物の廃棄問題や農産物の不当な買いたたき問題などで小規模農業の自立を妨げる。

農産物の廃棄問題

欧米では消費者一人当たり年間 95～115 kgの食糧が廃棄されているのに対し、日本は世帯当たりの廃棄が年間 15 kgにとどまっている。これは欧米に比べて日本の食料品ロス問題に対

する意識が高いということではない。なぜなら、FAOでは食料の生産、貯蔵、流通加工、販売、消費に至るフードチェーン全体を調査しているのに対し、日本では消費者の廃棄にのみ焦点を当て、生産地、生産者の廃棄を調査対象から外していることが両者の差になっているからである^{3) 4)}。特に流通の効率化のために、規格に合わない農産物、例えば曲がったキュウリ、規格より長いキュウリ、短いキュウリなどは流通で使用する箱に効率的に収まらないという理由で、農場で廃棄されることが問題として指摘されている。

この隠れた問題の実態を調査し、改善策を提案することが真の食品ロスを減らすために必要である。効率的な流通のために廃棄される農産物も、人件費や肥料・農薬などの経費が出荷される農産物と同等にかかっており、このため生産者の所得が不当に毀損され、大手流通業者による農産物の不当な買いたたきと合わせて農業後継者が農業を継ぐ意欲を失う原因になっており、農業従事者の高齢化による耕作放棄地の拡大を招き大きな問題になっている。

流通の問題は、流通業者自身の効率化とともに、大型スーパーなどの対面販売をしない大規模小売業者を通して曲がったキュウリよりまっすぐなキュウリを好むという私たち消費者の“我儘な”要求の結果でもある。問題の解決には、私たち消費者自身の意識改革が不可欠である。このため、政府や行政が音頭を取って進めてもうまくいかず、市民一人一人が問題を認識して自身で方策を立てる必要性が生じる。ここに、市民が構成

する縮小社会研究会が積極的にこの問題に取り組む必然性が生まれる。

農産物廃棄問題に対するこれまでの調査研究

これまでの論点、先行研究、当事者の見解・主張など農産地での廃棄問題を取り上げた研究例は少なく、消費者側の食品廃棄の削減を減らすためのキャンペーンが主である^{5), 6)}。これまでの農産地での廃棄問題を取り上げた研究では、市場調査による物流コストの算定や農林水産省の調査結果をもとに品目ごとの全国の収穫量と出荷量の調査を行い³⁾、FAOと日本の行政資料を基に全国の野菜の廃棄状況の調査を行った⁴⁾。それらの研究からは、生産地と消費地を結ぶ物流問題が見えてこない。また、全国の統計資料を集約しているために、近郊生産地、中距離生産地、遠距離生産地の違いも不明である。

農産物廃棄問題に対する新たな調査研究の提案

調査研究では、物流問題に焦点を当てることで問題点を明確にし、また近郊生産地、中距離生産地、遠距離生産地をそれぞれ選定し、地に足の着いた調査を行うことでそれぞれが抱える問題点を明確化することが可能になる。

調査対象は野菜を主体に、一部果実も取り上げる。近郊生産地、中距離生産地、遠距離生産地でそれぞれ調査に協力してもらえる生産者を選定し、正規価格での出荷量、廉価での出荷量、生産地で廃棄された量を調査し、廉価販売になった理由や

廃棄になった理由を調査することで物流問題（物流の効率化問題）の生産地での農産物ロスの実態を把握し、ロスを減らすための対策案、ロスを減らすための新規な物流方法を考察する。

調査研究のねらい

第一の狙いは、物流の改善による生産地での農産物ロスを減らすことである。

第二の狙いは、物流の改善による生産地での所得アップと雇用拡大の可能性を探ることである。

密かな狙いは、物流の改善による農産物の過剰包装をなくし、海洋に流出するプラスチックゴミを減らすことである。

なぜ新しい調査研究が必要なのか

2017年5月9日にアナハイムで行われたプラスチックのリサイクル問題や海洋プラスチックごみ問題を取り上げ議論するPlasticity 2017の会合で、米国では食料品の40%が廃棄されていること、埋め立てゴミの21%が廃棄食料品で占められること、米国では安全な食品を摂取できない人が4700万人（人口の約15%）、生産地から消費地まで10日かかる場合の食料品ロスが40%であるのに対し生産地から消費地まで2日しかかからない場合の食料品ロスが5%であるという報告⁷⁾を聞き、日本の場合はどうなんだろうと調べると、生産地や流通段階での食品ロスがほとんど報告がされていないことを知った。行政の怠慢と言ってしまうまでもだが、この問題は市

民（消費者）の意識改革が必須であり、行政が調査するよりも市民自ら調査し、意識改革を行う必要があるのではと考え、市民団体との接点が多い縮小社会研究会が取り組むテーマではないかと考え今回の提案に至った。

具体的な調査研究の実施案

調査品目と調査地、生産地での調査協力者を選定し、少額の調査協力金を支払うことで各品目別の流通業者への出荷実態を記入してもらう。定期的に現地訪問し、記入された出荷実態の集計と問題点の聞き取り調査を行う。問題が大きいと判断した場合には、直接流通業者に出向いてヒヤリング調査を行う。6か月目に中間報告を作成し、必要があれば調査方法の修正などを行う。

1年後をめぐりに最終報告を取りまとめ、物流の問題点の集約と改善点の提案を行う。

期待される調査研究の成果

調査研究では、次の成果が期待できる。

- 1) 既存の物流システムが引き起こす食料品ロス問題が明確化される。
- 2) 生産地と消費地の距離に応じた最適な物流システムが明確化される。
- 3) 生産地の農業所得向上と新規雇用創出の方策が見えてくる。

- 4) 農産物の物流段階での過剰包装問題が明確になる。
- 5) 海洋に流出するプラスチックごみの量を減らすのに寄与する。

調査研究の成果は、学会での発表を通じて行政や専門家と称する人たちに問題を提起すしたり、市民集会やメディアを通じて市民（消費者）の側の意識改革の必要性を訴えるのに役立つ。

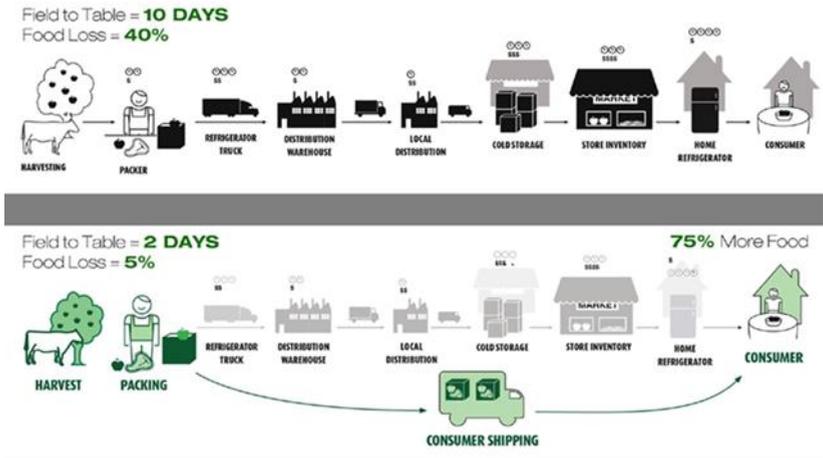
ほとんど調査が行われていない問題を取り上げ、本格的で広範囲の調査の必要性・重要性を喚起できる。日本は見かけの食料自給率が圧倒的に低い国であるが、隠れた食品ロスを限りなく減らすことで食料自給率はかなりの程度高くなるのではと期待される。日本は地域自立の必要性が言われて久しいが、農業所得の低迷と地域での雇用機会が少ないことが、地域自立が進んでいない主因であると思われる。農産地での食品ロスを減らし、地域に合った物流システムに改革することで、農業所得の向上と雇用創出を行えば、地域の自立が可能になる。

縮小社会研究会の皆さん、一緒に調査研究に取り組みませんか。キーマンになる人を募集します。

参考資料

- 1) 山本達也, 暮らしと世界のデザイン, 花伝社, 2017年5月.
- 2) 中田雅彦, 日経エネルギーネクスト, 2017年9月27日.
- 3) www2.cgu.ac.jp/kyouin/yamada/link/kyou13/1302kimu.pdf
- 4) 小寺将哉 他, 日本大学生産工学部第49回学術講演会講演概要, 2016年12月3日.
- 5) 政府広報オンライン, 「食品ロス」を減らそう, 2016年10月11日.
- 6) 消費者庁, 食べ物のムダをなくそうプロジェクト,
- 7) Scott Clear, “Unexpected Innovation through Design Leadership”, Plasticity 2017.

参考図



上座部仏教から観る生物多様性
-Biodiversity from View Point of
Theravada Buddhism-

博士（工学） 元田 武彦

【abstract】

In the era of Heian Buddhism, which flourished independently of the Tang Buddhism, a wonderful thinker named Annen appeared. He deeply considered the relationship between “sattva” meaning human beings and animals and the environment, and his thought was one to be as close as possible to Buddha Buddhism. However, since the Four Noble Truths, the essence of Buddha Buddhism, had not been introduced to Japan, his idea was not passed down to posterity. Meanwhile, Theravada Buddhism that has conveyed the teachings of Buddha Buddhism was revived by Putthathat and became to have a front-to-face influence on biodiversity.

第1章 はじめに

縮小社会第2号特集号において、「生物多様性の危機と思想」というテーマで日本仏教を取り上げた¹が、本稿では生物多様性の思想に繋がる仏教について取り上げることにする。

平安仏教は、安然という素晴らしい思想家を輩出した。延暦寺の僧であった安然は、「草木自成仏説」に対する唐決²に対し、「唐側の答えはいまだ無心の草木が自ら発心するかどうかの疑いを解決することが出来ていない」と批判した。そして草木自成仏説を論理的に証明する狙いで870年頃『斟定草木成仏私記』³を著した。彼は執念深く、緻密な思弁を展開して「非情の草木国土が有情の人間を含めた動物と全く同等である」との結論を導いた。その過程で、有情(sattva)と環境が同等になるための縁起として、随縁真如⁴という密教の概念を導入している。平安時代においては共生進化のような生命原理が全く不明であったため、真如という密教概念に頼らざるを得なかったと思われる。安然は、随縁真如により、有情と環境がそのまま一体であると結論して、草木自成仏説の根拠とした。

安然の思考プロセスをたどるためには、安然が置かれていた日本仏教の状況を理解する必要がある。紀元前5世紀に成立した釈迦仏教が、どの様にして日本に伝承されたかについての基本的な認識が欠かせない。幸い文献学的に整備されてきており、大筋を把握することができる。本論者では、大乘仏教と上座部仏教の成立過程を概観、評価した後、釈迦仏教のパーリ聖典を解釈し、生物多様性との関わりを考察する。

第2章 大乘仏教の成立と伝承

釈迦入滅後、4世紀ほどたった紀元前後に、主要な大乘經典である法華經、般若經、華嚴經、浄土3部經等の原型ができたと推定されている。これらが、紀元1世紀から7世紀にかけて北インドから中央アジアを経て中国、朝鮮、日本に伝えられた。6世紀中国の隋の時代、天台智顛が、これら大乘經典を全て釈迦が説いたと解釈して經典の序列化を行った。それが「教相判釈」五時八教説（天台）であり、日本へは最澄が紹介した。その順序は、華嚴經→阿含經→阿弥陀經・觀無量寿經・大日經→般若經→法華經→涅槃教となっている。

大乘經典のうち、日本で最もよく知られているのが「般若心經」である。色即是空とあるように、教えているのは「空」の思想である。釈迦仏教に無かった「空」の思想を大乘經典の中心思想にしたのは龍樹（ナーガールジュナ：紀元 150~250 年頃活躍）である。

以下、三枝充恵の著書⁵を参考にして記述する。龍樹は『中論』で、「縁起」—「無自性」—「空」の系列で「空」思想の基礎付けを行った。縁起とは、或るものが生ずるのには、必ず、他のものがある、他のものとの縁によって生じてくることをいう。他のものとの複雑な関係性において存在していることを強調することにより、無自性、すなわち、全ての実体は無いのであり、空であると言っている。また、龍樹は『中論』冒頭に有名な八不を説く⁶。

不生、不滅、不常、不斷、
不一、不異、不來、不去であり
戲論が寂滅して吉祥である縁起を説示した正覺者（ブツダ）
に諸説法者の最上者として、私は稽首する。

三枝は、『しかし、これは誤りだ。明白な誤りだ。しかもこれが誤りだと指摘した人は、これまで誰ひとりいなかった。ブツダはこのような「縁起」を決して説示していない』とっている。

この点について、私は、三枝とは異なる理由で、生きものに適用するのは間違いだと考える。というのも、「釈迦の眞理から考察する科学の目的」⁷において、生命体が地球に誕生して以来、環境を含めた生きとし生けるものとして目的を持つに至ったと述べた。すなわち、宇宙が誕生してから生きものが現れるまで現象・原因・法則の3元系であった世界が、生きものが現れてからは、現象・原因・目的・法則の四元系の世界に移行したと解される。目的を持つ存在に対して、無自性はあり得ない。生命は共生進化してきたが、全面的に他に依存しているわけではない。つまり、それぞれの生命種は、独自ベクトルである「自生自化」⁸を発揮して進化してきたと考えるべきである。中国の戦国時代の思想家莊子も、『一切万物は自ずからにして生成し存在し變化する。一切万物は自生自化する』と唱えた。龍樹の「空」が適用できるのは、生き物がいない世界に対してのみであろう。

第3章 上座部仏教の成立と伝承

史実によると、釈迦入滅の三ヶ月後、マガタ国の首都である王舎城郊外にて五百人の比丘が結集を開催したという。そこで羅漢たちに口伝で伝承されていた釈迦の言動を経蔵（ブツダの教え）、律蔵（仏教徒の戒律）、論蔵（経の解釈）の三蔵に編集し全員で唱和・確認した。これが仏教の聖典（口頭伝承）となる。入滅後、約百年、二百年、三百年後と 1871 年および 1954 年に結集を開催して、聖典の確認が行われている。その間、アショカ王の時代に上座部仏教としてスリランカに伝わり、紀元一世紀に筆記されてパーリ聖典となった。これが後のテーラワード仏教となり、タイ、ビルマ等の東南アジア諸国に広がった。

上述した 1954 年の結集はビルマの首都ラングーンで開催され、その模様は次のように記されている。『ビルマ、タイ、スリランカ、カンボジア、ラオス等から三千人の僧が集まった。ちなみに中国や日本の僧は参加させず、別の場所に座らせた。大乘は仏教ではないとみなされていた。会議には提言者がいて、三蔵のすべての本の幾つもの文章が審議され、結集が終わると、様々な判断を巻末に書いて印刷し、古いものは直さずそのままにした』。そのため、パーリ語の原文はそのまま残されて、このようにして仏陀の聖典は守られてきたのである。

第4章 釈迦仏教

4-1 ブッタタート(Putthathat)による四聖諦編集

この上座部仏教を、釈迦本来の仏教（これを釈迦仏教と称す）にしたと賞賛されているのがブッタタート（仏陀の奉公人 1906~1993）である。彼は釈迦の純粋な教えをパーリ聖典から抜き出すために、自ら創設したスアンモーク寺院で、釈迦出家の原点である滅苦の観点から実証していった⁹。二十六年間に渡る検証作業の結果を「ブッタヴァチャナ（ブッタの言葉）による四聖諦」に纏めた。後世に民衆に迎合して追加された非科学的な部分（地獄・極楽など）が削除され、全体の四割程度が釈迦の言葉として編集された¹⁰。

4-2 4つの真理

子供の頃、「お釈迦さんは苦しみから逃れるために出家して悟りを開いた」とお寺で聞き、絵本で見たりしていた。まさにそのことが四聖諦（4つの真理）の事例として、1500頁以上に渡り、分かり易いたとえ話で説かれていることに驚いた。欧米諸国の研究者が文献学の手法で長年研究し、パーリ聖典を「真のシャカムニの教え」として標準にしているとのことだが、四聖諦を読むとお釈迦さんの言葉だということがたちどころに分る。日本人にも分かりやすい例え話で表現されている。

四聖諦とは釈迦が発見した4つの普遍的な真理を指し、苦・集・滅・道と漢訳されてきた。しかし、漢語にするとニュアンスがかなり異なり、基本的なところで日本人に誤解されているようだ。

苦の原義はパーリ聖典で dukkha と言い、人の苦しみだけでなく縁起で変化するもの全ての現象を指す。集は samudaya 「生起する」で dukkha の原因を指す。滅は nirodha で『消滅する』、道は magga 「道」そのものであり、滅苦のメカニズムと言える。平たくいうと、「A. それは何か。B. 何が原因か。C. 何のために。D. どのようにして」という構成になっていて、方法論としてみると「A.現象 B.原因 C.目的 D.法則」という論理構造になっている。これが、縁起の理法を表現する真実である。

釈迦は四聖諦を「知り尽すべき真実は、苦である五取蘊（色・受・想・行・識）で、捨てるべき真実は、苦の原因である無明と渴望で、明らかにすべき真実は、苦の消滅である明と滅で、増進させるべき真実は、苦の消滅に至る道であるサマタとヴィパッサナーです」と具体的に解説し、多くの事例をあげている。

ここで重要なことは、苦の消滅で明らかにするのは、明と滅と言っている点である。滅は、人の苦しみを対象としているが、明は縁起で変化する現象世界の目的を明らかにすることを指す。

4-3 ヴィヴァサーナ瞑想と禅宗の悟り

私が四聖諦を読んで感心したのは、釈迦が発見したヴィヴァサーナ瞑想である。四聖諦には、瞑想の方法と悟りの段階の状況が具体的かつ詳しく述べられていたが、それは日本の禅の悟りと正反対なものであった。禅の悟りとの最も大きな相違は、

ヴィヴァサーナ瞑想には後戻りがないことである。初級の悟りは預流と呼び、悟りの流れに入り普通になることがない人、将来、阿羅漢になる人をいう。

釈迦は「悟り」という苦に対して、四聖諦を適用してヴィヴァサーナ瞑想法を発見したようである。釈迦入滅3ヵ月後に開催された結集に、五百人の阿羅漢（五百羅漢）を選定したとの伝承から推定すると、この瞑想法は覚者を育てる有益な方法であったことがうかがえ、また、素直な出家者の大部分は悟りを開いたと推測される。

これに対して、禅の悟りは百万人に一人と言われている。有名な白隠禅師を縁側から突き落としたと言われる正受老人は、「日本で真の悟りを開いているのは自分一人」と言ったとの伝承がある。また、白隠禅師自身も「大悟すること18回、小悟は数知れず」と言ったそうで、その間は苦悩に満ちた生活であったようだ。それは、禅の悟りに後戻りが発生することを意味している。当時の禅の悟りは一種の神秘体験であり、精神を安定させる方法論として普遍性のないものと考えられる。

この問題の核心は、大乘仏教の中心思想である「空」にあるように思われる。実態のない「空」に思念を集中することは、幻想を作り出す可能性が大きい。18回の大悟は、幻想から幻想への空虚な遍歴であったかも知れないが、その辺りの危険性も釈迦は見抜いていたと考えられる。そしてもう一人、この危険性を見抜いていた思想家が荘子である。彼は、己が欲望を満た

すためにあらゆる知恵を使って権力闘争を繰り広げる王侯貴族の実態を洞察し、『知は人間に自己を失わせる危険性をそれ自身の中に含んでいる。有限の人生を生きる人間の知は果てしなく対象を追い求め、外へ外へと無限に広がってゆく。知はその本性において外交的であり放恣なのである』¹¹ と言っている。これは龍樹を指した言葉のように思われる。

第5章 四聖諦と生物多様性

ブッタタートはその法話集において、釈迦が様々な表現で説明している四聖諦を原型に分類し、次のように表現している¹²。

第1項（苦諦）：

どんな名前でも、生き物が望まないものについての叙述。

第2項（集諦）：

そのものの原因、あるいは発生についての叙述。

第3項（滅諦）：

どんな名前でも、生き物が望むものについての叙述。

第4項（道諦）：

何としてもそれを得させる行動、あるいは実践法。

この原型を生きものに対して適用することにより、生物多様性に関してヒトが守るべき4つの義務が以下のように記述できる。ここで、生きものとは生きとし生けるものを指す。

- ❶ 生きものにとって望ましくない現象を知り、明確に理解する。
- ❷ 生きものが望まない状況を生じせしめる原因を消滅させる。
- ❸ 生きものが望むもの（目的）を明確に表現する。

④ 生きものが望むものを生じさせる法則を明確にする。

ブッタタートの思想を体現した多くの僧が、タイの森林開発をやめさせる取組みに参加しており、彼らは「森林保護僧」と呼ばれている¹³。彼の精神を受け継いだエンゲージド・ブディストのスラック・シワラックは、ビルマとタイを結ぶパイプラインの森林破壊を妨害したとのことで逮捕された。彼は「叡智は森にあります。森には多様性、つまり調和があります。」と言っている。

日本におけるエンゲージド・ブディストの影が薄い理由を、安然の「草木自成仏説」がよって立つ随園真如に求めるべきではないかと考えた。すなわち真如とは「あるがままであること」という意味があり、現実的な行動やラディカルな行動を否定するという側面を持っているからである。

第6章 結言

縁起の理法の世界を洞察することによって、釈迦は四聖諦を発見した。見えない生命や無機物も含めた生きとし生けるもの全ては縁起の理法にしたがっている。釈迦はそれを「悉有仏性」と称した。生きものと環境は相即相入の関係にあり、それら双方が目的を持ち、同等の価値を有するのである。道元禅師の「草木国土悉有仏性」と云う言葉が、この関係性をもっとも良く表現しており、生物多様性の保全に合致していると思う。

本稿執筆中に訃報を聞いた。かつて9歳の私に「マルサスの人口論」を熱く語った兄は握りこぶし大の真っ白い髑髏となった。元田昌志の遺影に本論考を捧げたい。

参考資料

- 1) 縮小社会第2号「特集ー生物多様性に関する論考・随筆」縮小社会研究会 2017 同志社大学プリントステーション
- 2) 当時の比叡山の僧侶は仏教経典が不明な場合、唐の高僧に伺いを立てた。これを唐決と称した。安然の課題は3代座主円仁の入唐目的の一つである。
- 3) 草木成仏の思想 末木文美士 2015 (株)サンガ
- 4) 同上 99 ページ
- 5) 竜樹・親鸞ノート 三枝充恵 1997 法蔵館 24-33p
- 6) 同上 149p
- 7) 文芸日女道 2018年4月号巻頭時評 元田武彦
- 8) 荘子 福永光司 1998 中公新書 131p
- 9) プッタタート比丘 - Yahoo!ジオシティーズ
space.geocities.jp/tammashart/ ターン・プッタタートの法施図書室
生涯、法話、著作（ブッダヴァチャナによる四聖諦）より
- 10) <http://space.geocities.jp/tammashart/siseitai/mokuji.html> 前書き 他
- 11) 荘子 福永光司 1998 中公新書 89p
- 12) <http://space.geocities.jp/tammashart/houwa1.html> 四聖諦の知り方
- 13) 環境倫理ータイ仏教の視点から「東洋学術研究」第53巻1号
2014年5月号 ドナルド・スウェアラー著 大西克明 訳

釈迦の真理から俯瞰する科学の目的と生物多様性 -Object of Science and Biodiversity from View Point of Gotama Buddha's Four Principles-

博士（工学） 元田武彦

【abstract】

Considering the Buddha's truth system, I showed that the concept of "all living things" is one of the survival styles of phenomenon, cause, purpose, rule. I will bird's-eye over from this and propose adding Buddha's objective items to Descartes' "Discourse on the Method."

第1章 はじめに

「上座仏教から観る生物多様性」¹において、四聖諦である苦・集・滅・道の四つの真理が、現象・原因・目的・法則の四つを意味していることを示した。これらは、「生きとし生けるもの」のあり方の普遍的な表現形式そのものである。生命は地球上に誕生してから、38億年の歳月をかけて共通の祖先から多様な生物に共生進化してきたことが分っている。単細胞の微小な生命体が、環境との相互関係のなかで、快適な状態（滅苦）を目指して生きることを選択した瞬間から、生きもの＝「生きとし生けるもの」が誕生したと言える。同時に地球自体も生き

ものの一部として位置づけられたのである。なかでも微生物の環境適応力は抜群であり、数年で地球を一周すると云われている²。ちょうど卵子に精子が侵入した瞬間、卵子表面にバリアーが張られるように、生きものは地球上にバリアーを張っているのである。

近年、ウイルスが地球上にバリアーを張った例として、インフルエンザやエイズのパンデミックがあげられる。最近ケンブリッジ大学の Julia Gog 博士が「インフルエンザの流行速度を予測する実験」を実施したところ、14週で英国全土に拡散する結果が出たと報告している³。

第2章 「生きとし生けるもの」の生存様式

生物と地球は「生きとし生けるもの」として不可分な関係を保ちながら、快適な生き方を追求した。膨大な種類の微生物たちは生存するために快適な状態を創り、種として増進するために、相互に遺伝子交換を行い、周囲環境に適応し、時に周囲環境を改変し、無数の化学反応系を創り出すことにより共生進化した。20億年かけて、かれらの呼吸は大気の組成自体を己が生存に適した状態に変化させていったと思われる。

そして宇宙誕生以来の現象・原因・法則の三元系とは異なる目的原理で動作する「生きとし生けるもの」の四元系として新たな生存様式を確立したのである。単細胞生物から多細胞生物が誕生し、視覚、聴覚、臭覚などの外部認識器官が発達するとともに、環境適応・活用・改変能力は劇的に進化した。そして

外部認識器官の発達に伴い、「生きとし生けるもの」はより明確な目的意識を持つ生きものとなっていった。最終的には、ホモ・サピエンスが様々な試煉を克服しながら精妙で高度な思考能力を獲得し、ついに精神と呼ぶべきものを創造したと考える。

厳密に言うと、四元システムが支配するのは、全宇宙で生きものが影響する範囲内にとどまり、生きものが影響しない無生物のみの宇宙には目的は無いと考えるのが正しく、宇宙においては現象・原因・法則の三元系で表現される。それは宇宙誕生以来、生きものが誕生するまでの全ての現象に適用出来る表現形式である。宇宙創成を研究する科学者は如何なる奇抜なアイデアであろうと、この形式の枠内で考えている。

第3章 釈迦の「四聖諦」とデカルトの「方法序説」

釈迦は、四聖諦の三番目の真理として滅苦という目的を設定した。釈迦出家の原点であり、人のところを対象とする世界において「苦の消滅」を目的とすることは必然の成り行きである。しかし、悟りを開いてからの釈迦は「生きとし生けるもの」の滅苦を目指していた。

しかし、2500年に渡って教えられてきたこの真理の体系は、近代科学の世界に導入されなかった。現代社会における世界中の開発技術者や研究者たちは、現象・原因・法則を追求するばかりで、目的を設定していない。そして、かれらの科学の方法論は、デカルトの「方法序説」⁴を原点としている。もし、正し

い目的が設定されておれば、現在世界で発生している様々な矛盾は解決していたであろう。

釈迦が四聖諦を発見してから約二千年後、デカルトが 1619 年に哲学史上有名な《炉部屋の思索》で西洋近代科学方法論の基礎となる『方法序説』を構想し、精神を導く 4 つの規則として以下の四項目を主張した

第一、名証的に真であるとみとめた上でなくてはいかなるものをも真として受け入れないこと。

第二、吟味する問題の各々を、できるかぎり多くの、しかもその問題を最もよく解くために必要なだけの数の、小部分に分かつこと。

第三、私の思想を順序に従って導くこと。最も単純で最も認識しやすいものからはじめて、すこしずつ、いわば階段をふんで、最も複雑なものの認識にまでのぼってゆくこと。

第四、何ものをも、見落とすことがなかったと確信しうるほどに、完全な枚挙と全体にわたる見直しとを、あらゆる場合に行うこと。

ここで釈迦の四項目を基準として、デカルトの四項目を考察する。

第一項は、どちらも対象とする現象について「それが何であるか、どこに、どのような状況で・・・」等を正確に記述することである。現象を誤り無く表現することが何よりも優先される。

第二項は釈迦の第二の真理である原因に相当する項目であり、「できるかぎり多くの、しかもその問題を最もよく解くために必要なだけの数の、小部分に分かつこと」という詳細で具体的な表現になっている。この場合、第三項と連結すれば考えやすい。彼は幾何学を例にとってイメージしているが、身近な物理現象を例として考えてみる。

例えば複雑なものの認識例として、ろうそくが燃える現象を取上げる。ライターに火をつけ、ろうそくの芯に近づけ、炎が発生し、それが安定するまで適当な距離にライターの火を保持する。このときろうそくの先端では、まずライターの火がろうそくを溶かす（輻射や対流）、溶けたろうそくが芯に浸透する（濃度拡散）、ろうそくが揮発してガス化する（気化）、ガスが酸素と反応して炎が発生する（酸化）。ろうそくは瞬間的に燃えるが、その原因はさまざまな要因からなっていることが分る。「問題を最もよく解くために必要なだけの数の、小部分」とは、本例の場合、輻射・対流・気化等の小部分に分けることを指す。こうすると小部分の現象は一つの法則（メカニズム）で支配されるため、実験モデルの作成や実験条件による検証が容易になる。実際、デカルトはたくさんの実験を行っている。そのうえで、「省察」において、人々を助けるためには彼の方法に基づく膨大な実験が必要であり、其の方法を公開することが重要だと弁明している。公開して得られる福利は、教会等から糾弾されるリスクを上回ると判断したのである。

第三項は、第二項の発展形であり、事例で説明したように、最も単純な輻射・対流・気化等の認識から複雑な燃焼の認識にさかのぼれることを示している。以上より、デカルトの示した第二項と第三項が、釈迦の第二の真理「原因」と第四の真理「法則」に該当することが読み解ける。

第4項は「枚挙の規則」であり、問題について吟味すべきいろいろな事情をもれなく取り上げたかどうかを調べることである。

釈迦の四つの項目と比較すると、デカルトの四項目に目的が明示的に含まれていないことが分る。良識として、第四項に目的を入れるべきであろう。そのようにしなかった理由は、彼が神（自然）の存在を証明したことにあると思われる。目的判断は神の領域にあり、不完全な理性が判断する領域ではないと考えたのであろう。

第4章 結言

デカルトが「なぜ神の存在証明をしたのか」についての考察が、京大哲学研究会のサイトに掲載されていた⁵。それによると、「我」の証明方法が決定論に導き、精神の自由が無くなることを恐れたからとある。つまり、彼はプラトン以来の伝統的西欧精神である心身二元論の呪縛から逃れられなかったのである。

それ故に、ニーチェ、サルトルらヨーロッパの哲学者達が「神は死んだ」と言って既存のキリスト教の価値観からの脱却を図った後、科学技術はフリーハンドであらゆる所にあらゆる

方法で進出して、多数の種を絶滅の危機に瀕しさせた。実際、1600年から1997年に至るまでに少なく見積もって、織管束植物396種、哺乳類110種、鳥類103種を人間は絶滅させている⁶。このような事実を踏まえると、全ての科学のアプローチに対して目的を設定することが緊急の課題となる。

釈迦が目指した「生きとし生けるものの幸せ」を目的として設定すれば、新たなシステムは世界を正常な営みに戻し、生物多様性を保証するものとなるであろう。

具体的には生物多様性に関してヒトが守るべき4つの義務は、以下のように記述できる。

- ① 生きものにとって望ましくない現象を知り、明確に理解する。
- ② 生きものが望まない状況を生じせしめる原因を消滅させる。
- ③ 生きものが望むもの（目的）を明確に表現する。
- ④ 生きものが望むものを生じさせる法則を明確にする。

これらは「上座部仏教から観る生物多様性」の論考で表現したもののだが、これら釈迦の4項目を見て今更ながら驚きを禁じ得ない。かつてホモ・サピエンスは生きものをこのような観点から取り扱ったり、研究したことがあったのだろうか。

例えば、文化としての生け花を人間は美しいと感じるが、草花はそのような不自然な状態を望んでいるのだろうか。素晴らしい宇宙を表現すると言われる盆栽の姿を、松は望んでいるのだろうか。我々は戦後の拡大造林時代に、杉や檜の生産性向上

の研究に走るあまり、生きものの立場になって考える視点からの研究を構築しなかった。そのために、山林が一部のみ人間の都合に合わせられる形で伐採され、残りがイビツな形で放置され、鹿や猪が住むことのできる環境を奪われて人里に出没するようになったのではないのか。現在ヒトが問題視している現象は、ヒトが自分たちの価値感が正しいと信じて思い上がったことに起因する側面も大きいと思う。

これら 4 項目を理想論だと非難する前に、われわれを含めて研究者がやるべきことは山積している。

まず、絶滅危惧種に指定されている生き物に対して、

- ①生きものにとって望ましくない現象が何かを実験・研究し、それらを生ぜしめている原因を無くする方策を確認し、問題がないかどうかを検討した上で実施する。
- ②生きものが望むものが何かを実験・研究し、それらを生ぜしめている法則を確認し、その法則に従った施作を実施する。

以上の効果を確認した上、他の生きもの種に拡げていくことを提案する。

参考資料

- 1) 文芸日女道 598 号 上座部仏教から観る生物多様性 元田武彦
2017
- 2) ミクロコスモスー生命と進化ー L・マルグリス、D・セーガン
田宮信雄訳 1995 東京化学同人
- 3) <http://www.cam.ac.uk/research/news/citizen-science-experiment-predicts-massive-toll-of-flu-pandemic-on-the-uk> 22
Mar 2018
- 4) デカルト 野田又夫 1969 岩波新書
- 5) デカルト「神の存在証明」京都大学哲学研究会 2016 年レジュメ
- 6) Ballie and Groombridge 1997;Walter and Gillett 1998; May et
al

生物多様性社会は再生可能か

Will biodiversity society be renewable?

川邊泰嗣

【abstract】

We are now confronting with the problem of environmental degradation following the loss of biodiversity. Regeneration of the biodiversity society is important for mankind to escape extinction, and I propose six challenges necessary for that.

はじめに

我々は今、生物多様性が劣化しつつ崩壊の道を歩んでいる問題に直面している。はたして人類もやがて絶滅する運命にあるのかどうか、またその時の条件とは何か。その後の生物多様性社会はどうなってゆくのか。人類が絶滅を免れるためには何をすべきか。生物多様性社会は本当に再生可能か、などについて以下に考察する。

I. 人類の滅亡

植物の世界では、鎮守の森が生態学的に最もバランスのとれた自然林であるが、道路工事などの外因によりその環境バランスが崩れると、真っ先にその象徴的存在である高木が枯れる。

しかし、動物の世界では生存のための資源が枯渇した時に、生態ピラミッドの頂点にいる人類が真っ先に滅亡する可能性は、ほとんどない。なぜなら人類は植物と違って自由に移動できるうえ、哺乳動物でありながら知能を持つ雑食動物でもある。さらには農業・牧畜などで食料を生産する能力もあり、他の生物以上に気温の変化にも対応できるなど高い生存能力を備えている。その人類でさえ、将来その人口を減少しながらやがて絶滅する運命にあるのかどうか。

1. 生物多様性の崩壊

生物多様性社会は、爆発的に人口が増加し始める19世紀までは安定した時代が永く続き、種の絶滅も顕著ではなかった。しかし、18世紀半ばから19世紀にかけて起こった産業革命から数えて100年から150年を経た20世紀以降は種の絶滅が年々顕著になった。それは急速に普及した鉄道の発展により、敷設用地や枕木供給のため、あるいは鉄道による木材の大量輸送が可能になったため、森林破壊が一挙に進んだことが発端だと考えられる。加えて世界人口が爆発的に増加したことで事態悪化に拍車をかけた。

2016年IUCN（国際自然保護連合）のレッドリスト^{注1}に登録された生物は85,604種で、うち約3割に当たる24,307種が絶滅危惧種に指定されている。同じく2016年のWWF（世界自然保護基金）が発表した『生きている地球レポート2016』^{注2}は、世界の3,700種を超える哺乳類、鳥類、爬虫

類、両生類、魚類などの脊椎動物合わせて1万以上の個体群のデータを分析した結果を、LPI指数（生きている地球指数、あるいは生物多様性指数）として報告している。それによると1970年から2010年までの僅か40年の間に、世界の陸、海、淡水に生息する脊椎動物種のLPI指数が58%も減少している。これは多くの野生生物の個体数が減少を続けていて、その命の営みを支える地球の自然の豊かさが失われていることを示している。地域的には中南米83%、熱帯圏諸国56%が特に減少が著しい。

人類も例外ではない。自然生態系は、人類の生命活動にとって必須の酸素や水を供給してくれる。さらには農作物の新しい品種や医薬品の素材となる植物・微生物などの遺伝子資源、レクリエーションや野外活動の場となるフィールドや美しい風景といった観光資源など、人間社会に不可欠な資源と機能も提供してくれる。このように人類は他の生物種以上に自然生態系に依存しており、その恩恵なくしてはわれわれ人類の存在は成り立たない。特に食料を他の生物に依存している限りは、LPI指数がさらに減少すれば人類絶滅の危機に瀕することも想像に難くない。

2. 人間が住まない地域での生物多様性社会

しからは、最後まで生き残るであろう植物と早くに絶滅するはずの脊椎動物は、人間が住まなくなった地域では、はたして生存できるであろうか。

植物については、例えば日本列島各地の神社、お寺、古い屋敷、山の尾根、急斜面や溪谷沿いに今なお残されている鎮守の森^{注3}は、最も野生の原生林であり、生態系でいう遷移の過程における極相林の姿を常に維持し、周辺社会が変動してもここだけは変化しない。すなわち鎮守の森は人類滅亡後の植物の生存の一つの姿であり、早くて150年おそらく200~300年程度の遷移期間で自然再生できる。

一方でIUCN（国際自然保護連合）によれば^{注4}、脊椎動物の「絶滅の危機」の大半は生息環境の破壊・悪化によるもので、乱獲、侵入種の影響などがこれに続いている。すなわち、人間活動の拡大に伴い生息環境の破壊が進むとともに、その回復は極めて困難となっている。はたして人間が居なくなれば、生存は可能か。

色々な理由で人間が立ち入れなくなり生活できなくなった地域、例えば、福島原発避難区域、チェルノブイリ原発立入禁止区域、朝鮮半島の非武装中立地帯（軍事境界線）、ヨーロッパの鉄のカーテン（国境線の壁）、米コロラド州のロッキーマウンテン・アーセナル国立野生生物保護区（化学兵器工場跡）など、限られた地域ではあるが、種々の野生生物が生存していることが報告されている^{注5}。

さらに広範な地域で人間が居なくなった例として、過去の古代4大文明の滅亡後はどうなったのか^{注6}。すなわちメソポタミア文明とインダス文明の故地の森は消え、現在では土がむき出しになっている。エジプト文明の首都テーベと中国文明の首都

殷墟は世界遺産に登録されて辛うじて名前だけを残しているが、いずれも生物多様性が維持されているとは言い難い。一方でマヤ文明やクメール文明のように、滅亡した後に鬱蒼とした森林が再生されていて、文明はともかく生物多様性社会が残されている例もある。

このように人類が先に滅亡したとしても、動物・植物たちは種類を減らしながらもそれなりに生き残るのではないだろうか。人類は自分たちの滅亡後のことを何ら心配する必要はない。それよりも自分たちの延命のためには何をすべきかを考えるべきである。

3. 人類が滅亡する条件

2017年2月にオックスフォード大学などが「人類滅亡12のシナリオ」^{注7}を公表した。この中で、次の3つのシナリオが特に深刻である。

一つ目は、地球温暖化など気候の変化が飢餓を生み、社会崩壊をもたらす「極端な気候変化」。二つ目は、環境汚染による「生態系の崩壊」である。さらに三つ目は、世界経済がグローバル化して経済危機や貧富の拡大が起こり、大きな社会混乱や無法状態をもたらす「国際的なシステムの崩壊」である。

特に貧富の格差が問題と考える。すなわち1950年から2000年まで世界の人口は約3倍に増えたが、人口増加を上回る工業生産の拡大と、石油はじめエネルギーの使用量、鉄鋼消費量や穀物消費量が大幅に増えて、この50年間で人口増加以

上の過剰な消費が続いている。しかし現実には、一部の人間だけが資源・食料を勝手に開発・生産して富を独占しているために、貧富の格差が拡大している。こうして地球的限界の下で自然資源が枯渇してゆきつつ、人類の弱肉強食のアンバランスな格差世界が極まってきている。地域紛争や戦争による多数の難民も急増している。こうした事態の根源にある貧富の格差を是正することが、人類世界にとって何よりも急務である。

一方、科学技術の進歩に伴なう軍事技術についても、例えば、ナノテクによる新技術で小型核兵器が開発されるようになってきている。それが北朝鮮やISのテロなどに転用されて、突発的な四つ目の「核戦争」が勃発して、第3次世界戦争の引き金にもなりうる危険性が増している。次の世界戦争では、進歩した現代の技術が生み出した強力な攻撃兵器により、古代文明とは違って一瞬のうちに世界的規模で人類滅亡のシナリオが展開されることになりかねない。

Ⅱ. 生物多様性社会の劣化と再生

1993年生物多様性条約が国際条約として発効した。しかし1999年UNEP（国連環境計画）^{注8}は「いったん崩れてしまった生態系バランスは戻らず、生物多様性を保つことは既に手遅れ」と報告している。生物多様性の衰退の原因はすべからく人間の社会経済活動であることは明らかである。2016年IUCN（国際自然保護連合）^{注9}は第6回世界自然保護会議で

「持続不可能なまでの急激な人口増加と資源消費量の増大」を放置すれば生物多様性は崩壊すると警告している。

人類が今のままの資源消費型の生活を続けていたら、2300年頃までにはまず野生生物が絶滅し、2400年頃までには人類を含むすべての生物が絶滅する可能性が高い^{注10}。

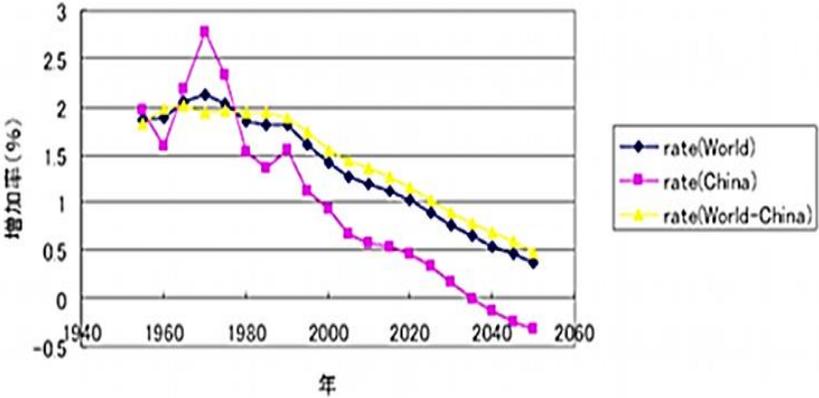
人類が絶滅を免れるためには生物多様性の劣化防止が必要であるが、はたして可能かどうか。さらに生物多様性社会の再生のためには何をすべきかについて以下に考察する。

1. 人口増加問題

国際連合中位推計 2015年 REVISION ^{注11}によれば、2015年から2100年にかけての世界人口は、実に52.6%増と爆発的に増加する見込みである。地域的には、アフリカ諸国の多くでは人口が2倍以上となる。次いで、フィリピン、パキスタン、エジプトなどの国が世界平均以上の増加率となる。

しかし、人口自体は増加し続けていても、その増加率は1975年以降減少し始めている^{注12}。2100年までには世界人口は100億人超のピークを迎えるものの、人口増加そのものも止まり以後減少する。

世界の人口増加「率」



一方で、東アジアでは日本、中国および韓国の人口が、少子高齢化の影響で減少する。またインドは2100年には中国を抜き世界最大の人口となるが、やがて減少し始める。ドイツ、イタリア、そして旧ソ連のロシア、ウクライナなどは既に人口が減少している。先進国の中で、米国だけが人口を増加させているが、その原因であるヒスパニック系の人口流入を阻止しようとしている。アフリカ諸国やフィリピン、パキスタン、エジプトなど人口急増国の人口抑制が喫緊の課題である。

IIASA（国際応用システム分析研究所、IIASA 日本委員会事務局は（公財）地球環境戦略研究機関(IGES)）^{注13}は、出生率や寿命などのファクターを加味しつつ、2300年までの世界人口の推移を予測している。その中で、もし現在のヨーロッパの出生率（女性1人あたり1.5人）が世界中でも定着すれば、

世界の人口は、2200年には30億人レベルにまで減少するだろう。そして2300年には10億人をわずかに下回ると予測している。

現在の世界人口は約70億人であるが、生物多様性が維持されていた19世紀までの人口10億人規模にまで減少させなくても、1970年の35億人レベルにまで半減することができれば、生物多様性の劣化が防止できる可能性は高まる。

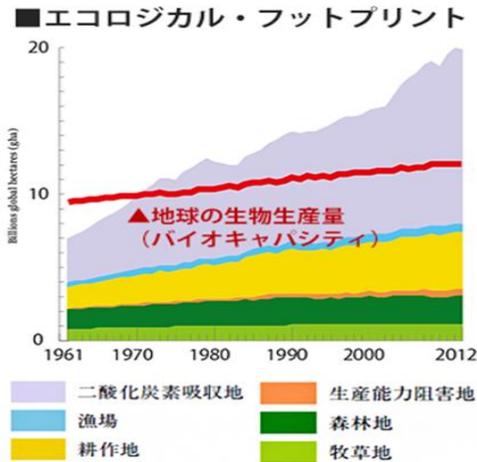
しかし、2200年まで待てない事情がある。1972年にローマ・クラブが「成長の限界」^{注14}で「人は幾何学級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しない。人口増加や環境汚染などの現在の傾向が続けば100年以内に地球上の成長は限界に達する」と警告した。食料は技術の進歩により算術級数以上に増産可能になってはいるものの、人口急増によりこの危機レポートは現実になりつつある。また先進国を中心に必要以上の過剰消費が続いていくと、世界人口が100億人に達する2100年以前に、人類に供給する食料資源が地球的規模で枯渇してしまう危険性が大きいにある訳だ。

2. 生物生産力（バイオキャパシティ）の限界

エコロジカル・フットプリント^{注15}は、さまざまな自然資源の消費をはじめとする人間活動が、地球環境に与えている圧力の大きさを示す指標である。

過去40年間に急激に上昇し、1970年地球が供給できる本来の「生物生産力（バイオキャパシティ）」を超過した。その後も超過し続け、人間が1年間に消費した自然資源は200

6年では地球1.25個分だったが、2012年では地球1.60個分にまで増加している。



エコロジカル・フットプリントが地球1個分に相当した1970年の世界人口35億人の水準まで、まず今の人口を半減させる必要がある。生物多様性の観点から「地球・自然・生き物のためにはヒトこそ総体として縮小すべし」とするディープ・エコロジーの思想^{注16}を真剣に検討せざるを得ない。エコロジカル・フットプリント自体を減らすことも必要である。CO₂の排出によるカーボン（炭素）・フットプリントの割合が高く、地球環境を圧迫している。特に温室効果ガス排出量が高い富裕国（北アメリカ、EU加盟国、日本）において、一人当たりの年間排出量を抑える必要がある。そのためには先進

各国それぞれのフットプリントを地球1個分以下にするととの視点で生活様式の見直しが求められる。

3. 生態系サービスの役割

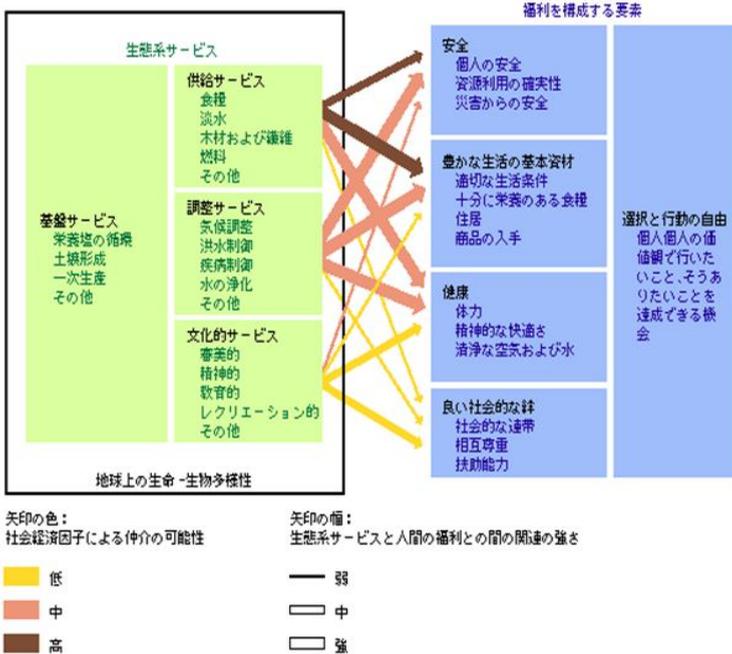
生物は「生態系」と称する一定の生物圏の中に組み込まれて、生存競争をしながらも相互依存的に生息している^{注17}。仮に、まとまった数の種が絶滅した場合には、必然的にそれを構成する個体および種の多様性の喪失を招き、その生態系はいずれ崩壊する。

「現在は種の大量絶滅時代に突入」している（03年米ワールドウォッチ研究所）^{注18}。種の絶滅はドミノ倒しのように人類を含めた生物の全滅につながる。「種」が絶滅する主な原因は、地球温暖化、人口増加、森林伐採、乱獲と外来種の5項目であり、全て人間の社会経済活動に起因している^{注19}。2010年生物多様性条約事務局は報告書（GBO3）^{注20}の中で

「2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させる」ために設けられた「2010年目標」21項目いずれの目標も達成されていないと指摘している。

生態系の劣化を防止するためには、「生態系サービス」と人間の福利との関係を理解することが重要である^{注21}。

生態系サービスと人間の福利の関係



出典：ミレニアム生態系評価報告書

「生態系サービス」は図に示されるように、供給サービス、調整サービス、文化的サービスと基盤サービスの4つのサービスに分類される。太い矢印で示される供給サービスと調整サービスが、特に人間の福利に大きく関連している。また社会経済因子の仲介による可能性として、供給サービス、次に調整サービスの役割が挙げられる。

国連が2005年に公表した「ミレニアム生態系評価」や、2007年に制定されたわが国の「第三次生物多様性国家戦略」

でもその関係と生態系サービスの役割の重要性が指摘されている^{注22}。

4. 生物多様性の劣化防止

生態系が復元することなく崩壊の道を辿るのであれば、その状態を把握し、少しでも劣化を防止せねばならない。

2012年国連環境計画（UNEP）が中心になって「生物多様性と生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム」

（IPBES）が設立された。IPBESは、世界的な生物多様性の減少と生態系サービスの劣化を食い止めることを目的に、科学と政策の橋渡しをするプラットフォームである。UNEPとIPBESの活動は注目に値する。

特筆すべき例をいくつか挙げると（文献省略）

- 2016年UNEPは、世界の6地域（汎欧州、北米、アジア太平洋、西アジア、中南米、アフリカ）ごとに環境問題を詳細に分析した「地球環境概況6（GEO-6）：地域評価」を公表した。世界中のほとんどの地域で人口増加や急速な都市化、消費拡大、砂漠化、土地劣化、気候変動が相まって水不足が問題になっている。その結果、世界的に食料問題が深刻化している。

- 2017年UNEPは、海洋ごみの主な発生源である使い捨てプラスチックの過剰利用や化粧品中のマイクロプラスチックを2022年までになくす世界規模のキャンペーン「#Clean Seas キャンペーン」を開始した。2018年のG7サミットに

て海洋プラスチック憲章が発表され、5か国とEUは、自国でのプラスチック規制強化を進める「海洋プラスチック憲章」に署名した。ただし日米2か国だけは署名しなかった。これは生物多様性を崩壊させる、倫理なき資本主義に屈した典型的な例ではないかと思う。

・2017年UNEPは、生物の多様性にとって極めて危険な状態にある10のシステムを特定した。すなわち1) 極地帯のツンドラ、2) 北極、3) アフリカのサハラ砂漠以北の沿岸にある地中海樹林、4) 魚類、5) 湖沼、6) 沿岸地域、7) さんご礁、8) ミョンボと呼ばれるアフリカの乾燥林、9) 海中プランクトン、10) 南米アマゾンの熱帯雨林の計10件である。

・一方で2016年11月にパリ協定が発効したのは大きな成果である。パリ協定は、2020年以降の気候変動対応について各国が自主的に目標を提出し、レビューする仕組みである。しかし米国が自己利益のために撤退を決めたことは残念で、世界のリーダーどころか利己的な脱落者と認識されても仕方がない。

・2016年「Planet at the Crossroads（岐路に立つ地球）」をテーマに第6回世界自然保護会議が開催された。貧富の拡大や経済成長による生態系の崩壊のため岐路に立つ地球で、自然資源を保全しつつ一般の福利を向上させるためには、各国が協力していく必要性が訴えられた。

しかしながら現代文明は、資本主義の権化であるアメリカ文明によって事実上支配されていると言ってよい。その結果、アメリカはじめ先進国だけがエネルギー・物資の生産・流通を自分たちだけに集中させる社会経済システムを構築し、世界的に貧富の格差が大きい脆弱な社会を生み出している。富を貧者にもより公平に再分配できる、従来の社会主義ではない新たな社会システムの発想が必要である。あるいはカソリック、イスラムや仏教などに代わり、貧富の格差を否定する、広く受け入れられる新しい宗教の出現が期待される。

Ⅲ. 私の提案

生物多様性の劣化防止には「生態系サービス」と人間の福利との関係を理解したうえで、自然保護だけではなく社会問題、経済問題、政治問題に加えて倫理問題などについても、多くの踏み込んだ課題対策が必要であると考えます。

1. 世界人口を2200年までに35億人レベルにまで半減 (基盤サービス)

2016年での世界人口70億人を2200年まで200年足らずの間に、エコロジカル・フットプリントが地球1個分とバランスがとれていた1970年の35億人レベルに半減させる。そのためには、過去中国で「一人っ子」政策が実施できたように、アフリカ諸国やフィリピン、パキスタン、エジプトなど人口急増国に対して、ヨーロッパ並みの出生率（女性1人あ

たり 1.5 人) に人口を抑制するべく働きかける。貧困な開発途上国においては、先進国のように義務教育の制度を徹底し、その制約のために子供を働かせられない教育システムを推進することで、結果として出産を控えさせる効果を期待する。

2. 富裕国（北アメリカ、EU加盟国、日本）のエコロジカル・フットプリントを地球1個分に削減（調整サービス）

エコロジカル・フットプリントを地球1個分に相当する1970年の状態にまで下げる。そのためには地球2個分以上の贅沢3地域のエコロジカル・フットプリントを地球1個分に下げる。

	エコロジカル・フットプリント (gha)	バイオキャパシティ (gha)	生産可能量の何倍? (倍)	地球何個分の暮らし? (個)
世界平均	2.23	1.78	1.25	1.25
北アメリカ	9.4	5.7	1.65	5.28
ヨーロッパ (EU加盟)	4.8	2.2	2.18	2.70
日本	4.4	0.7	6.29	2.47

gha (グローバル・ヘクタール) = 資源を生産し廃棄物を吸収する能力の世界平均値をもつ陸地水域 1 ヘクタール

生産可能量の何倍 = エコロジカル・フットプリント ÷ バイオキャパシティ

地球何個分 = エコロジカル・フットプリントの地域 ÷ 世界平均

(出展) 2006 Living Planet Report WWF

これらの3地域では、特にCO₂排出によるカーボン・フットプリントを減少させることが重要である。そのためにはCO₂の発生源である石油や石炭などを大量に使用する「交通」と「住居・光熱」におけるエネルギーやガソリンの使用を抑制し、また可能な限り再生可能エネルギーに換えていく。欧州ではドイツが2030年から、イギリスやフランスも2040年から基本的に電気自動車しか販売出来ない法案が通りそうになっていて、自動車メーカーはEV化の開発を急いでいる。

3. 開発途上国への経済援助（供給サービス）

途上国（アフリカ、アジア・太平洋）に対して、富裕国が水力、風力、太陽光、バイオマスなどの低炭素エネルギーの発電・発熱プラントシステムを構築する支援を積極的に行えば、途上国の化石燃料の使用を抑える効果大きい。

発展途上国、とりわけ生物多様性の豊かな熱帯圏諸国は生物多様性を石油、鉱物資源などと同等の価値をもつ資源すなわち遺伝資源と考え、それを対象とした開発や応用で得られる利益分配の権利を主張している^{注23}。一方先進国側は利益分配で譲歩する代わりとして、熱帯雨林の伐採などを規制し持続的開発を遵守するよう途上国側に強く求めているが、解決に至っていない。

1997年の京都議定書で、CO₂排出削減目標を達成するために、京都メカニズム^{注24}といわれる仕組みが設けられた。京都メカニズムは排出権取引をはじめ3つの仕組みを提案してい

る。この方式をそのまま拡大して、日本などバイオキャパシティの低い国が、アフリカ、ラテンアメリカなど余裕のある国から資源を輸入する場合に、自国分のバイオキャパシティとして加算するバイオキャパシティ取引権システムを構築することを提案する。

さらに富裕国が支援する低炭素エネルギーシステムによって代替される化石燃料や新しく生み出される再生可能エネルギーなどを、支援した富裕国のバイオキャパシティとして加算できれば、無償援助でない相互扶助の対等な取引としての意識が生まれて、より促進できる。

4.人間の立ち入り禁止地域の拡大（基盤サービス）

人類の経済社会活動が生物多様性を崩壊させる原因との認識に立ち、人間の立ち入り禁止地域を決め、その数を増加させる。例えば、

(1) 環境汚染地域を自然保護区にして人間の立ち入りを規制する。

(2) IUCN レッドリストに登録された 24,307 種の絶滅危惧種が棲息する地域を優先的に世界遺産あるいは自然保護区とする。

(3) LPI が大幅に低下している地域（中南米 83%、熱帯 56%）の陸、海、淡水に生息する脊椎動物種に対する自然保護区の設定。

5.環境破壊防止策の促進（調整サービス）

(1) 各国がパリ協定の取り組みを強化し、特に地球温暖化など海水温上昇によるサンゴ礁、海洋生態系の破壊や砂漠化の監視を強化

(2) 海洋ごみの主な発生源である使い捨てプラスチックの過剰利用やマイクロプラスチックをなくす「#Clean Seas キャンペーン」の強化

(3) 農地化を防止する強力な土地利用政策、森林保護プロジェクトやバイオ燃料作物の作付け促進

(4) 水不足による深刻な食料問題に直面する地域の水資源対策

(5) 気候変動への対応策促進および災害防止への生態系管理の条例化

(6) 山の切り崩し、湖沼や河川の埋立てや河川・海岸の護岸工事などの生態系を破壊する乱開発の抑制

(7) ゴルフ場、リゾート、コンビナートなどでの農薬による環境汚染の防止

(8) 里山の放棄や、人の手が入らなくなったことによる生態系の崩壊対策

(9) 外来種（ペットの密輸、侵入など）の持ち込み禁止

(10) 害獣（鹿、イノシシなど）の駆除

6.新しい倫理に基づく格差のない社会論の構築（文化的サービス）

(1) 富を公平に分配するための倫理の構築

(2) 資本主義社会の中で富を公平に分配する政策の構築

(3) 貧富の格差を是正する新しい社会論の構築

IV. おわりに

私は生物多様性の劣化防止のために、本稿第三章で次の6つ提案をした。

- 1.世界人口を2200年までに35億人レベルにまで半減
- 2.富裕国（北アメリカ、EU加盟国、日本）のエコロジカル・フットプリントを地球1個分に削減
- 3.開発途上国への経済援助
- 4.人間の立ち入り禁止地域の拡大
- 5.環境破壊防止策の促進
- 6.新しい倫理に基づく格差のない社会論の構築

この中で、第4節「人間の立ち入り禁止地域の拡大」と第5節「環境破壊防止策の促進」は国連環境計画（UNEP）が中心になって積極的に対策を進めている。また2016年11月にパリ協定が発効したのは大きな成果である。

全6節の中で一番に期待するのは、第1節「世界人口を2200年までに35億人レベルにまで半減」であるが、第3節「開発途上国への経済援助」と併せて推進する必要がある。

ぜひ実現したいのは第2節「富裕国（北アメリカ、EU加盟国、日本）のエコロジカル・フットプリント削減」である。少なくとも「現在の日本のエコロジカル・フットプリントが地球2.47個分であることを検証し、これを1個分に縮小する」

を目標として、日本政府が設定するよう提案する。そのためにはカーボン・フットプリントの縮小が特に重要である。京都議定書で設けた CO2 排出権取引など京都メカニズムの促進とその方式をそのまま拡大したバイオキャパシティ取引権の制定に期待したい。

注：参考文献

1. レッドリスト“2016 IUCN Red List of Threatened Species”
2. 『Living Planet Report：生きている地球レポート 2016』
<http://www.wwf.or.jp/activities/2016/10/1341727.html>
3. 宮脇昭著「鎮守の森」（2007年、新潮社）
4. 野生生物の種の減少
<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/s56/3676.html>
5. 動物の楽園になった世界の立入禁止区域 5カ所
<http://natgeo.nikkeibp.co.jp/atcl/news/15/101400284/>
6. 古代文明から如何に学ぶか
<https://sites.google.com/site/fujiiinspcclub/home/2teitansoshakai/acienthistory>
7. 人類滅亡 12 のシナリオ（オックスフォード大学等の公表したレポート）
http://www.huffingtonpost.jp/nissei-kisokenkyujyo/risk-of-human-extinction_b_7303406.html
8. 地球環境概況 2000 の概要、国連環境計画（UNEP）

file:///C:/Users/user/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/3WGSTQEW/ov-jp.pdf 9. なぜ生態系破壊が進むのか - 栗山浩

— kkuri.eco.coocan.jp/whatis/eco1.html

10. 中西香「大量絶滅時代に入った生き物」縮小社会第2号、2017

11. 国際連合中位推計 2015年 REVISION

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/1151.html>

12. Exploratory Extension of IASA's World Population Projections: Scenarios to 2300 Lutz, W. and Scherbov, S. IASA Interim Report December 2008

13. Exploratory Extension of IASA's World Population Projections: Scenarios to 2300, 2016年

14. 成長の限界—ローマ・クラブ「人類の危機」レポート 1972年

15. 平成19年度版『環境/循環白書』コラム エコロジカル・フットプリント

16. アルネ・ネス「シャロー・エコロジー運動と長期的視野を持つディープ・エコロジー運動」1973年

17. 生物多様性(biodiversity)とは何か

http://www2.odn.ne.jp/had26900/shokubutsu_no_bunrui/about_biodiversity.htm

18. 破壊される生物多様性 2010年

<http://www.chikyumura.org/environmental/report/2010/09/01080736.html>

19. 動植物が絶滅危惧種となる5つの原因 2016年

<http://eco-le.jp/articles/1447>

20. 世界における生物多様性の現状 —GBO3 の概要、2010年

<file:///C:/Users/user/AppData/Local/Microsoft/Windows/INetCache/IE/DQB84N42/1-4-1.pdf>

21. ミレニアム生態評価報告書

<https://www.env.go.jp/policy/hakusyo/zu/h19/html/vk0701020100.html>

22. 生物多様性国家戦略

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%82%B8>

23. 高橋進、海外の森林と林業 No. 91、2014年

24. 京都メカニズムクレジット取得事業の概要について 環境省
2013年

サブサハラの野生動物保護と太陽光発電 —生物多様性の種の予測について—

博士（工学） 元田武彦

【abstract】

When looking at the span until 2100, the region where wildlife is most endangered is the sub - Saharan region, where the population is increasing rapidly. If the population estimated to be quadrupled in the current situation is dispersed directly to Sub-Saharan Savannah etc., treasures of wild animals may be destroyed and lead to the collapse of the ecosystem. This paper proposes that introducing a solar system suitable for Sub - Sahara will be an excellent solution, assuming that population problems result in energy problems. Next, I judge appropriateness of existing research about the species and biodiversity in the future and propose a method to predict the number of new species.

第1章 サブサハラの人口と森林の農地化の動向

サブサハラに棲息する野生動物の将来が危ぶまれる理由として、次の3つが掲げられる。

- ❶人口増加が突出しており、現在 4.5 億人が、2100 年に 18 億人と4倍になると推計されている。
- ❷生産性が低い農業の比重が大きいため、人口増加に対応するために新たに農地が必要となる。
- ❸広大な深林とサバンナを有し、野生動物の宝庫となっているが、それらは容易に農地に転換される。

1. サブサハラの人口推計

人口が急増するタンザニア、ウガンダ、ナイジェリア、コンゴ民主共和国にエチオピアを加えたサブサハラ主要国の合計人口の推移を図 1-1 に示す。1950 年に 8 千万の人口が、2017 年に 4.5 億、2030 年に 6.2 億人、2050 年に 9.6 億人、2100 年に 18 億人に急増すると推計されている。アフリカ全体の 2100 年の人口は 44.6 億人で、内サブサハラ地域の人口は 40 億人となっている。これは世界の地域の中で、抜きん出た人口増加である。ちなみに 2100 年時点では中国 10.2 億人、インド 15.1 億人になると推計されている。

図 1-1 サブサハラ主要国の人口推計
(2017 年国連中位推計より)

	1950	2017	2030	2050	2100
タンザニア	0.08	0.57	0.84	1.38	3.04
ウガンダ	0.05	0.43	0.64	1.06	2.14

	1950	2017	2030	2050	2100
ナイジェリア	0.38	1.91	2.64	4.11	7.94
コンゴ	0.08	0.52	0.73	1.15	2.36
エチオピア	0.18	1.05	1.40	1.91	2.50
合計	0.77	4.48	6.25	9.61	17.98

2. サブサハラにおける森林の減少と農業¹

もし、人口が増加し続け、今のように森林からエネルギーと食糧を調達することを続けるならば、現存する森林が大きく減少し、野生動物の生息域が減少することに繋がるであろう。それは、現在すでに、図 1-2 の森林減少面積上位 10 カ国に 4 カ国が名を連ねていること、また、図 1-3 から、農地の拡大が森林の減少に繋がっていることから也容易に推定できる。

図 1-2 森林減少面積上位 10 カ国(2010~2015 年)

順位	国名	年間減少面積(千 ha)	2010 年の森林面積における割合 (%)
1	ブラジル	984	0.2
2	インドネシア	684	0.7
3	ミャンマー	546	1.7

4	ナイジェリア	410	4.5
5	タンザニア	372	0.8
6	パラグアイ	325	1.9
7	ジンバブエ	312	2.0
8	コンゴ民主共和国	311	0.2
9	アルゼンチン	297	1.0
10	ベネズエラ	289	0.5

出所:FAO Global Forest Resources Assessments 2015

図 1-3 サブサハラの森林と農地面積の推移

	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	2010 年
森林面積 (千 ha)	748,425	728,089	707,753	690,659	673,608
農地面積 (千 ha)	203,563	216,128	221,806	241,460	256,392

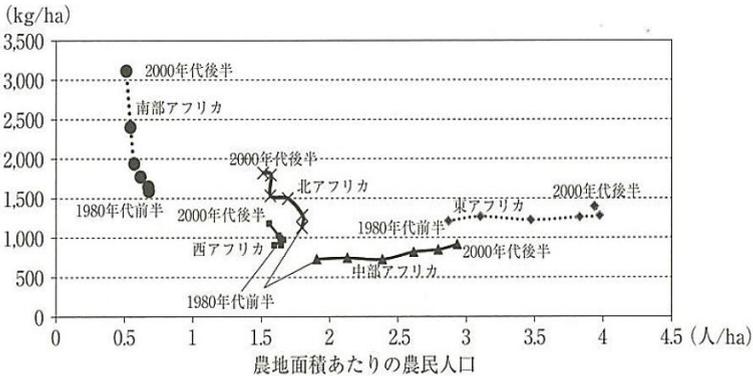
出所:世界銀行 Africa Development Indicators

図 1-4 に示すように、サブサハラの中でも、特に中部アフリカと東アフリカでは、農地面積当りの農民人口が非常に多い。また、その割合は時間の経過とともに増加傾向にある。南部アフリカ(南アフリカを含む)や北アフリカでは 1 ヘクタール当り

の農民人口がわずかに減少しているものの、1ヘクタール当りの穀物生産量が増加している。その一方で、中部アフリカと東アフリカでは、1980年代前半以降、1ヘクタール当りの農民人口が増加しているものの、1ヘクタール当りの穀物生産量にほとんど変化がないことが見て取れる。

サブサハラの土地生産性が低い理由として、自然降雨に依存する農業と無肥栽培が考えられる。サブサハラでは、雨季の開始と終了時期を予測することが難しい上、灌漑施設が整備されていないため、同地域の農業は、毎年の降水量に大きく左右されやすい。世界銀行によれば、2010年の南アフリカを除くサブサハラの農地全体に対する灌漑農地の割合は、わずか0.03%であったことから、現在も多くの農民が自然降雨に依存する農業を営んでいることを推量することができる。

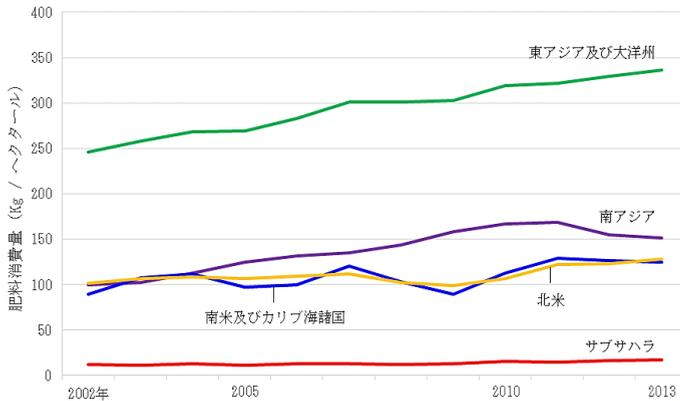
図 1-4 サブサハラにおける穀物の土地生産性の推移



出所:北川・高橋「現代アフリカ経済論」p. 136

また、図 1-5 より世界各地域における 2002 年から 2013 年までの農地 1 ヘクタールに対する肥料消費量を比較した結果から、世界の他地域と比較して、サブサハラの肥料消費量が格段に低いことが見て取れる。このように、サブサハラの 1 ヘクタール当りの農民人口は引き続き増加しているなか、灌漑施設の整備や農業用肥料の導入の遅れにより、土地生産性は依然として低いままである。現在サブサハラに生息している野生動物を守るためには、土地の生産性を上げて森林の減少を食い止めることが必須である。

図 1-5 世界各地域の肥料消費量とその推移(2002~2013 年)



出所:世界銀行 World Development Indicators

そのためのインフラ整備として、安定したエネルギー供給体制の確立が求められる。

そこで、ここ数年、急速に価格が低下し、石油火力発電並みのコストパフォーマンスを実現しつつあるソーラー発電（太陽光発電）が、サブサハラの将来におけるエネルギーニーズを満たす可能性について検討する。

第2章 ソーラー価格の長期予測に関する検証

サブサハラは地下資源にも恵まれているが、燦々と降り注ぐ太陽光は有益なエネルギー源である。赤道直下にあるため、西欧諸国の2倍余のエネルギー密度を利用できる。しかし、ソーラーがこれら諸国において導入されるためには、他の方式より価格が低いことが必須条件である。第二章では、設備やエネルギー効率等を検討しながらコスト面の長期予測の検証を行う。併せて長期予測の方法論に対する考察を加え、生物多様性への予測を試みる。

1. ソーラーの動向に関するロンボルグの長期予測²

ロンボルグは2001年発行の *The Skeptical Environmentalist: Measuring the State of the World* において、水、食料、エネルギー、地球温暖化等に関する統計データを用いてグローバルトレンドを導き出した。そのエネルギー項目の中に、ソーラーの長期予測があり³、以下にその予測項目を抜粋する。

『①一番安い太陽電池は、1978年に比べると効率が3倍になり、価格は1970年代初期に比べると50分の1まで下がり

た。太陽電池はまだ十分な競争力はないが、価格はさらに下がると予想され、2030年には5.1セント/kWhまで下がることがと期待される。

②緑の植物の光合成は、平均して太陽エネルギーの1-3パーセントしか使わない。一方で、太陽電池なら、15-20パーセントのエネルギー効率となる。そのため、太陽電池は植物に必要な面積の1/13しか必要としないし、しかも良質な農業用の土壌も要らない。

③石油時代はいずれ終わるだろうが、それは石油不足のせいで終わるのではない。もっと優れた代替エネルギーが出現することにより終わると考える。有力候補としてはソーラー発電が挙げられ、21世紀末に実現されると推定されている太陽光発電コストは、ほとんどの分析ではほんの数十年前に実現されると考えられている。そのため、特別な支援策などの「後押し」なしでも、再生可能エネルギーが21世紀半ばまでに競争力を持つようになる見込みは大きい。』

2. ロンボルグの予測の検証

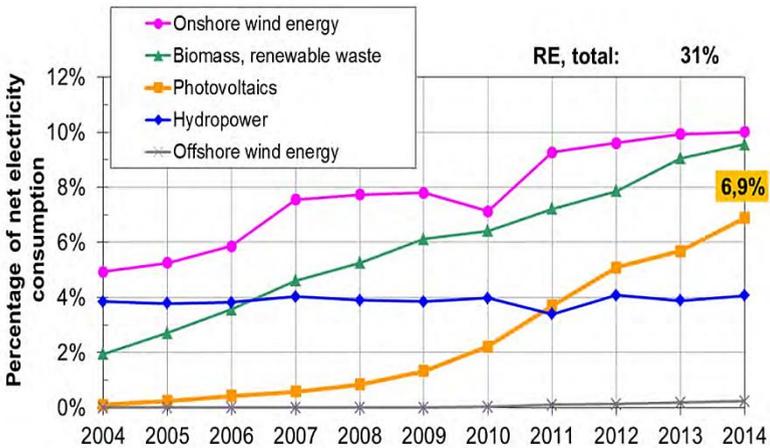
日本を抜いて、ソーラーでトップを走るドイツにおける太陽光発電価格の減少トレンドを検証する。

[ドイツにおける太陽光発電の真実—2015 フラウンホーファー太陽エネルギー研究所レポート]⁴より抜粋

2-1. 純電力消費に占めるソーラーエネルギーの比率

図 2-1 に示すように、電力消費に占めるソーラーの比率は 2014 年が 6.9%であり、再生エネルギーの中での伸び率がトップで、指数関数的に上昇している。この傾向を注目する必要がある。

図 2-1: ドイツの純電力消費(最終エネルギー)に占める再生可能エネルギーの比率(2004-2013)



出典:[BMWi1], [AGEB5], [AGEB6], Press Release BDEW.

2-2. ソーラー発電の原価構成と原価低減傾向

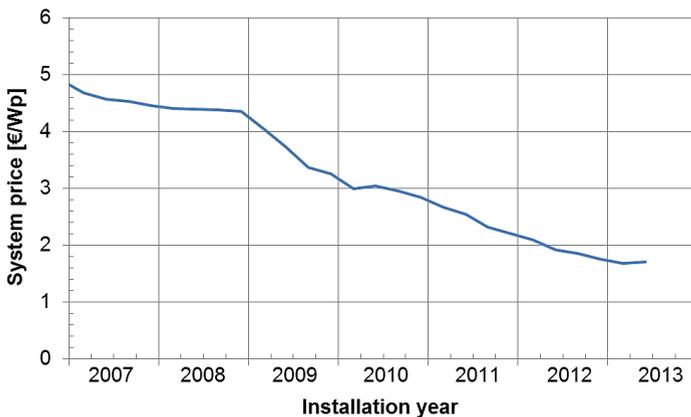
太陽光発電所で生成された電力の均等化発電原価(LCOE, The Levelized Cost of Energy)は、発電所の総費用(ユーロ)を総発電電力量(キロワット時、kWh)で割ることによって計算される。どちらも、発電所の経済的耐用年数に対する数値であ

る。それゆえ、太陽光発電所の発電原価[ISE1]に影響を与える要素は主に、以下ようになる。

- ① 発電所の建設・設置のための初期投資額
- ② 資金調達条件(投資利回り、利率、発電所の寿命)
- ③ 発電所が寿命に達するまでの運転費用(保険料、メンテ費用)
- ④ 日照量
- ⑤ 発電所の寿命と毎年の設備劣化

技術進歩と規模の経済の影響により、太陽光発電設備の投資費用(最大の費用項目)は2006年以降、年平均で13%ずつ低下している。図2-2は、定格出力10kWp[キロワットピー未滿の屋上設置型太陽光発電設備の、近年の価格の推移を示している。

図2-2: 定格出力 10 kWp 未滿の屋上設置型太陽光発電設備の平均末端価格(純システム価格) [BSW].



太陽光発電所において、太陽電池モジュール費用は総投資費用の半分以上を占めている。太陽電池モジュールの価格低下は、いわゆる学習効果曲線に従っており、この曲線において、導入される設備容量が 2 倍になると、一定の割合で価格が低下する。

図 2-3 は、2013 年ユーロ為替相場を基準として算出した太陽電池モジュール価格の変遷を示す。

(1) 横軸に示す累積設置容量が 2 倍になるごとに、価格が 20% 低下している。

(2) 新規設置の大規模太陽光発電所は 2011 年の段階で、国内消費者にとってのグリッドパリティ[発電原価が電気料金以下になること]を達成している。それ以来、公定買取価格は税込み電気料金を大幅に下回っている。

(3) 2012 年初頭からは、新規設置の小規模屋上設置型太陽光発電設備もまたグリッドパリティを達成している。太陽光発電のグリッドパリティは、ほんの 10 年前には考えられなかったような、重要で画期的な出来事である。

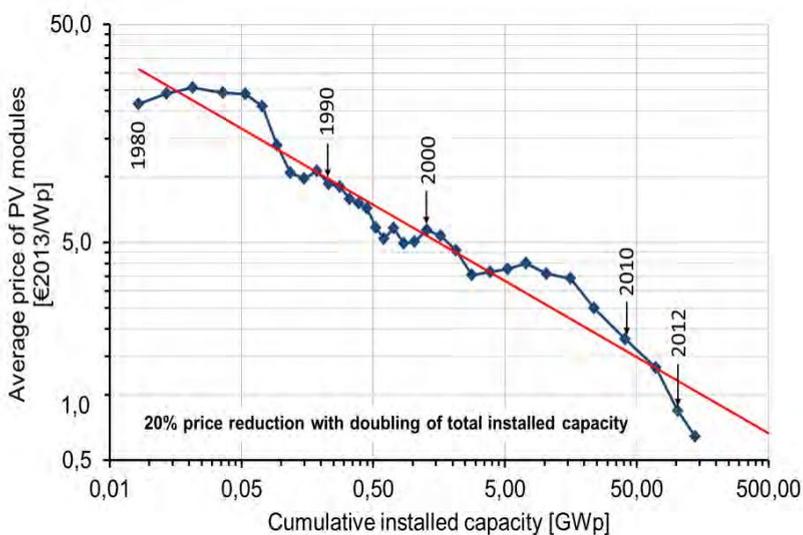
2014 年末には、太陽電池の累積導入容量は、世界全体で約 180ギガワットに達した。将来的にも製品と製造プロセスが発展し続ければ、この経験則に従って価格は下がり続けると予測される。

2-3. 2030 年にソーラー発電価格が 5.1¢/kwh になる可能性

図 2-3 より、累積設置容量が2倍になると価格は 20%低下するという学習効果曲線の存在が確認された。

次に世界の累積設置容量（GW）実績から将来価格の動向を推定する。図 2-4 に示すように、設置実績は指数関数的に増大している。

図 2-3: 太陽電池モジュール価格の変遷(直線はトレンド)



出典: PSE AG/Fraunhofer ISE(データは Strategies Unlimited/Navigant Consulting/EuPD による)

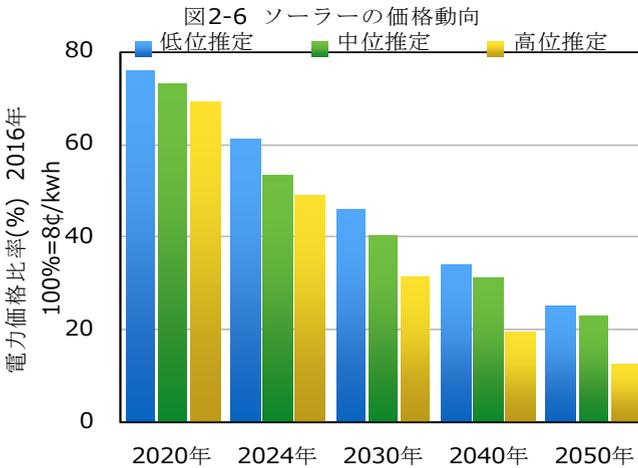
図 2-4 世界の設置容量の実績 (REN21 白書 2017 より)

	2010	2012	2014	2016	2017
累積設置容量 (GW)	40	100	177	303	402

図 2-5 ソーラー設置容量の想定伸び率に対する発電コスト

設定期間 年度	2017- 2020	2021- 2024	2025- 2030	2031- 2040	2041- 2050
①伸び率： 低位	25%	20%	15%	10%	10%
累積容量	732	1518	3512	9109	23626
発電コスト	76%	61%	46%	34%	25.2%
②伸び率： 中位	30%	25%	20%	15%	10%
累積容量	857	2092	5206	12042	31234
発電コスト	73.2%	53.5%	40.3%	31.3%	23%
③伸び率： 高位	35%	30%	25%	20%	15%
累積容量	996	2845	8682	53756	217473
発電コスト	69.4%	49.2%	31.5%	19.4%	12.5%

図 2-5 は、設定期間年度別に設置容量の伸び率を低位、中位、高位の 3 水準に設定した場合、累積設置容量から発電コスト（2016 年の 8¢/kwh を 100%とした場合に対する比率）を



試算している。ロンボルクは太陽電池による発電価格が 2030 年に 5.1¢/kwh になると予想したが、これは 2016 年発電価格の 64%に相当する値であり、図 2-5 より伸び率中位の場合、5.1 セント/kWh の価格は 2023 年頃に達成される。

図 2-6 は、この表を棒グラフで示したものである。伸び率が中位の場合、2030 年には 3¢/kwh 程度に低下する。実際、既に 2016 年第 3 四半期の電力購入契約に関する入札価格の国際ランキングでは、既にチリ；2.91、メキシコ；3.55¢/kwh の低価格を達成している。熱帯地方における日照状態の良さが反映されている。

以上より、ロンボルクの予想は現在のデータにより十分に検証されていると考える。

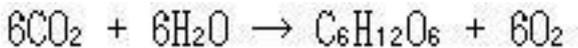
2-4. 太陽光利用に関する光合成効率とソーラーの効率の比較

日本の緯度では、光エネルギー密度の最大値は約 800w/m² であるが、昼夜・晴雨・季節による変動をすべてならした実測値としては約 145 w/m² という値が知られる。

これに 3600 (秒) × 24 (時間) × 365 (日) をかけ、あとの話との関係上、1 m² 当りから 1 ha (10000 m²) 当りの値に換算すると、太陽光エネルギーの年間値は以下ようになる。

$$\begin{aligned} & \text{日本で 1 ha の面積が受ける太陽光エネルギーの年間値} \\ & = 4.6 \times 10^{10} \text{ kJ/ha/y} \end{aligned}$$

光合成プロセスは、次のように、二酸化炭素と水からグルコース (ブドウ糖) と酸素ができる反応だと考えてよい。



各物質の値 (CO₂ : -394.36 kJ/mol, H₂O : -237.13 kJ/mol, C₆H₁₂O₆ : -910 kJ/mol) から計算すると、反応のギブズエネルギー変化は +2880 kJ となる。

このときできるグルコース 1 モルの質量は 180g で、植物体をつくるセルロースはグルコースの重合体であるため、取り込

みエネルギー値と植物の重量増加は、おおむね次の関係で結びつく。

蓄積エネルギー 2880 kJ \leftrightarrow 重量増加 180 g ; (A)

赤外線はクロロフィルに吸収されないため、これだけで変換効率は50%近くに落ちる。

次に、光吸収の仕組みと、光合成の内部メカニズムに起因するエネルギー損失が、変換効率を8%レベルまで低下させる。さらには、光吸収の不完全さ（植物が緑色をしている事実）、植物の生理（成長や代謝にエネルギーをつかう事実）を考慮に入れると、太陽エネルギー変換効率の理論的上限値は2~3%になる。

作物を含めて野外の植物が育つには、少なくとも数ヶ月の時間がかかる。その間に生育条件も変わるため、生育の全期間で平均すると、太陽光エネルギー変換効率はせいぜい1%である。現実にそうなることを、稲作を例にして、試算してみる。

稲作にはほぼ5ヶ月を要する。式(A)は年間値を計算するものであるため、これを5/12倍し、次に1/100(1%)をかければ、1 ha 当りに期待できる蓄積エネルギーは 1.9×10^8 kJ となる。

さらに(A)に基づいて、エネルギーを植物体の重量に換算すると、 1.2×10^7 gつまり12トンになる。この重量は、いわゆるコメだけでなく、稲の茎・葉・根も合算したもので、コメの部

分は全体のほぼ半分に当たる。統計データを見ると、日本のコメ生産量は1ha当り約6.5トンで、今の見積もりによく合っている。

以上より、稲の光合成効率は約1%であり、ソーラーの効率の1/15以下であると推定できる。

2-5. エネルギー消費大国の将来動向

中国やこれから出現するインド、インドネシアなどのエネルギー消費大国がどのようなエネルギー政策を取るかによって、生物多様性は大きく影響される。彼らが化石燃料に大きく依存することになれば、急激な化石燃料の枯渇、化石燃料争奪戦の勃発、地球温暖化等、我々が懸念している最悪のシナリオが進行し、生物多様性は重大なストレスにさらされる。森林破壊は急速に進み、特定の種の絶滅スピードが早まることが予測される。

これらの国のエネルギー政策は、2015年末に提携されたパリ協定（気候変動）に大きく影響されている。以下に、代表事例として、インドと中国のケースを考える。

結論を先に言うと、中国やインドでは自然エネルギーの開発が、コストの関係もあって、優先されるようになったために、重大な生物多様性の崩壊は起こらないであろうということである。やはり、古代文明を築いた叡智は残されていると考えるべきであろう。そして、生物多様性の最大の懸念はサブサハラにあると考える。

1) インド

インドの GDP 成長率は、1991 年に経済改革を実施したところ、年平均 GDP 成長率 6.5%を達成し、2040 年まで、毎年 6.5%の成長率を見込んでいる。人口は 13.4 億から 16 億人に増加すると推計されている。

インドはパリ協定において、2030 年までに、GDP 当たりの CO2 排出量を、2005 年比 33~35%削減すると表明した。そのために 2030 年までに 40%の発電容量を非化石電源にする計画である。そのため、2022 年までに太陽光発電 100GW 等の自然エネルギーで 175GW を導入するとしている。

インド政府は政策インフラとして、GW クラスの太陽光発電を集中的に開発する「ソーラーパーク」計画、電力需要地への送電網やアクセス権を保証する制度などを整備し、開発事業者に対して安定的な事業環境を整えた⁵。その結果、発電コストが急速に低下し、2017 年にはインドの標準的な石炭発電コスト kwh 当たり 3.4 ルピーよりはるかに安い 2.44 ルピー（約 4 円）の落札価格を実現した。さらに政府は、欧州の送電網や電力取引市場などの最新政策を取り入れようとして、ベンガル湾沿岸諸国との間で、国際送電網による電力取引で協力する覚書を締結した。

2) 中国

GDP 成長率は 1991-2011 年は 10%前後で、2012-2016 年は 7%前後の値である。今後は緩やかに低下し、

2040年には2%程度になると思われる。GDPは11兆ドルから2022年に16兆ドル程度になる。人口は14.1億人から2030年にピークで14.4億人、2050年には13.6億人に減少する。総発電設備は2015年の1530GWから2040年には4500GW程度になると思われる。

中国はパリ協定において、2030年までに、GDP当たりのCO₂排出量を、2005年比60～65%削減すると表明した。そのために必要とされる、2016～2030年の累積投資額は30兆元と推定されている⁶。投資の大部分は、50%以上占める旧式の石炭火力発電所の炭酸ガス排出抑制に要する費用と考えられ、それを低コストで達成する技術開発が鍵になると考えられていた。

しかし、英米中研究者からなる共同調査チームが、最新データに基づいて2007～2016年のCO₂排出量を算出したところ、2013年以降顕著に減り続けていることが分かった⁷。そして、2018年にパリ協定の目標を達成すると推定している。調査チームは、再生可能エネルギーへの移行や、エネルギー効率の増加といったエネルギー利用の構造的変化が2015年辺りからはっきりと見て取れ、それが主要な要因だと結論づけた。

すなわち、旧式の石炭火力発電所の改造ではなく、再生可能エネルギーの導入で代替していると推定される。その結果、世界1の排出量である99億トンが80億トン程度に削減されたのである。

2-6. サブサハラの人口増大に伴うエネルギー消費の将来

図 1-1 に示された、2100 年のサブサハラの人口が必要とするエネルギーをソーラーで賄うならば、薪炭を採取する場合の森林面積の約 15 分の 1 の面積で必要なエネルギーを確保できるため、現状の 4 分の 1 の森林面積（必要森林積： $17.98/4.48/15=0.27$ ）で充分である。しかし、彼らも先進国並の文化的生活を営むようになると想定すると、中国の 2040 年に 4500GW を参考にして 5000GW 程度のエネルギー消費を見込まねばならない。1GW の火力発電所を建設するには 1000 億円かかり、トータル 500 兆円の設備投資が必要となる。

ドイツにおける 10KW 以上のソーラー設備価格は 2014 年で 1500 ユーロ/KW (National Survey Report of PV Power Applications in Germany) である。設備価格が発電価格に比例するならば、中位推定で 2031-2040 の 31.3% で約 470 ユーロ/KW (約 6 万円/KW) となる。1GW では 6×10^{10} で 600 億円、5000GW では 300 兆円の程度で可能となる。ただし、日射量が日本の約 2 倍あるので設備利用率を 30% と見積もると、全てをソーラーで賄う場合、1000 兆円の費用を見込まねばならない。ここで、年間設備利用率 (%) = $\frac{\text{年間発電量}}{\text{発電設備容量} \times 365 \text{ (日)} \times 24 \text{ (時間)}} \times 100$ で算出される数値である。

ただし、ソーラーは設置直後からエネルギー送電ができるため、大部分は運転資金として経費処理ができる。このため設備

投資額は、送配電投資が大部分を占めることになる。後述のように、効率的な都市設計を行えば、総費用の 20%に当たる 200 兆円に収めることが可能であろう。

パリ協定では、先進諸国は年間 1000 億ドルの支援を約束している。2050 年までに 50%実施するとすれば、総支援額の 4.7%程度でエネルギーインフラを賄えるので、ほとんどの金額を上下水道や交通システム等に振り向けられる。

1) ウガンダでの状況事例

ユニセフの小宮氏レポート【2013年2月8日ウガンダ発】
「ウガンダ北東部、ケニア国境沿いのカラモジャ地方は、ウガンダの中でも貧困率が高く、80パーセント以上の人が1ドル以下の生活を強いられている。そんな地方で数多く見られたのは、太陽光発電技術、すなわち、ソーラーパネルの存在だった。

ウガンダにおけるエネルギーの 92 パーセントは薪などのバイオマス燃料で、電気が占めている割合は 2 パーセントしかない。88パーセントの人々が地方に住んでいるにもかかわらず、国营電力会社が配給している電力の恩恵を被れるのは、1 パーセント未滿。田舎に行くと、ほとんど電気がない。経済成長に伴い、電気の需要が増えている現在、どのように電力を確保するかが大きな問題となっている。ここで注目されたのがソーラーパネルだった。日本の平均年間日照時間が、1500 から 2000 時間である一方、ウガンダの平均年間日照時間は 2500 時間から 3200 時間であり、太陽光発電はウガンダに適した技

術体系である。それに加えて、素人でも少し勉強すれば簡単に使える技術のため、政府や援助機関は太陽光発電を普及させようと躍起になっている。実際、ウガンダ政府は2001年に「地方における電気の戦略計画（RESP）」を打ち出し、太陽光発電に力を入れることを決定した。（2012年までに、世界銀行や民間会社の援助を受け、8万もの太陽光発電システムを導入することを目標にしている）。その結果、町を歩けば、学校や保健所に設置されているソーラーパネルを簡単に見つけることができる。」

1962年に独立して以来、政治的には民族抗争、アミンによる独裁政治、ウガンダ内戦・抗争、第二次コンゴ戦争などの政治的不安定が続き、経済的にはインド人の追放による経済破綻や経済政策の失敗により世界最貧国となっていた。しかし、1997年より開始された初等教育無償化政策により成人識字率は73%となり、高等教育も三万人の学生と三千人の大学院生を擁する名門のマケレレ大学がある。経済面では、肥沃な土地、豊富な水資源や地下資源に恵まれており、経済発展できるポテンシャルはかなり高いと考えられる。エネルギー面も、原油の採掘や高価になるであろう化石燃料の輸入に頼らずに、太陽光をエネルギー資源の柱にする政策を推進する必要があると考える。ソーラーの問題は設備稼働率であり、将来の効率アップを見込んで40%程度が上限で、火力発電の半分程度である。その対策として、国の立地条件を生かしたエネルギーネットワー

クシステムを立案し、人口が急増する 2030 年までに技術開発を進める必要が有る。

自然エネルギー世界白書はいう。「ベースロード電源の必要性は、もはや神話に過ぎない。変動する自然エネルギーの発電（風力や太陽光）の割合を高めて統合していくことは、化石燃料や原子力などのベースロード電源がなくとも、電力系統の国際連系、セクター・カップリング（電力と熱・輸送燃料等との連携）や ICT、エネルギー貯蔵システム、電気自動車、ヒートポンプなどにより電力システムの柔軟性（フレキシビリティ）を十分に備えることで達成できる。こういった柔軟性は、変動性の発電に対して調整するだけでなく、電力システムを最適化し、当然、全体の発電コストを減らすことができる。それゆえ、自然エネルギーによる発電が 100%近く、あるいは 100%を超えたりするピークをうまく運用する国の数は着実に増えている。例えば、2016 年にはデンマークは 140%、ドイツは 86.3% という電力需要に対する自然エネルギー比率のピークをうまく運用することができた。⁸⁾

これらは EU のような高度に発達した社会でいえることであり、欧米先進国に翻弄されてきたアフリカにはアフリカ流のやり方が有るはずである。21 世紀はアフリカの世紀であると言われてきたが、やっと立ち上がりかけたアフリカに対して、日本はアフリカの地域特性に適したソーラーシステムの開発や経済状況に適應した事業の仕組みを目指すべきであると思う。設備に関しては、熱帯地域の高い温度でも効率が低下しない冷

却熱利用型のソーラーユニットおよび熱利用プラントシステムを研究すること、経済に関しては、現地の人材を活用してソーラー部材の生産、組み立て、設置が容易にできる生産システムを開発することである。

第3章 検証の結論

3-1. 全体

2000年時点における太陽光発電に関するロンボルクの考察は適切なものだったと評価できる。自然エネルギー世界白書2017によると、2016年度のソーラー設置容量は47%増加している⁹。

価格は彼の予想以上に早く低下すると推定され、その場合、世紀末の温度上昇は0.7°C程度になる。

3-2. 野生動物への影響

ソーラーエネルギーシステムの以下のような特徴を考えると、エネルギーインフラの整っていない熱帯地方ではソーラーが主役となって、森林やサバンナの減少すなわち野生動物の減少を止めることが出来る。

- 1) 太陽光エネルギー利用効率は作物生産の15倍である。
- 2) 太陽光エネルギー密度は熱帯地方では2倍近い。
- 3) 発電部（セル）に可動部分が無く機械的故障が起き難いのでメンテが容易。

4) 規模を問わず発電効率が一定なため小規模・分散運用に向く

5) 需要地に近接設置でき、送電コストや損失を最小化できる

ただし、18億の人口が森林やサヴァンナに分散するのは悪夢であり、都市の魅力を高め、人口の都市集中を計る必要がある。

3-3. エネルギーと人口・食糧問題

エネルギー消費量は人口と比例し、食糧消費量は人口と比例する。日本でもエネルギーが枯渇すると、食糧生産が大幅に低下して飢餓に直面する¹⁰。逆に、飢餓に直面しているサブサハラでもエネルギーを確保していけば、人口・食糧問題解決の見通しがたつことになる。エネルギーがあれば、灌漑、肥料、作物の選定などにより、同一面積における収量を4倍にすることが可能になる。

ソーラーの導入により、人口・食料問題に対処できる可能性を秘めている。ただし、人口に関しては、都市の魅力を高め、都市化率が70%以上になることを目標に、都市インフラである交通・電気・上下水道を整備する必要がある。

3-4. サブサハラの都市化

サブサハラでも都市化が進行し世紀末の都市化率を70%と仮定すると、平均して1000万都市が126個存在する勘定になる。それらの都市で消費するエネルギーを3500GWとすると、都市当り28GWのソーラー発電が必要となる。その場合、必要

な設置面積は、同じ緯度のインドの Kamuthi Solar Power Project 事例(648Mw; 10km²)を参考にして見積もると、GW 当り 15.4km² の設置面積が必要となる。将来の効率アップを 1.5 倍程度と見込めば、280km² (約 17km 四方) のソーラー用地が確保できれば、サブサハラでも現在の先進国並の生活を享受しつつ、森林面積を増加させることが可能となる。ソーラーエネルギーは、パワコンを 10 年に一度交換すれば数十年間利用(劣化速度は 0.1%/年)できるため、人口がピークを越えればエネルギー輸出国に転向することも考えられる。

以下、都市化の実態について「地球環境の本当の実体」(70p)より抜粋する。

『「世界中、裕福な国、貧しい国にかかわらず、多数の人口が密集して快適に暮らすことはできない。十分な水や下水処理設備もなく、人々はひどい状況の中で生活を送る」とのこと。これはまちがった議論の古典的な例だ。欧米の基準で見れば、多くの人々が貧民街で貧しい生活を送っているというのはその通りだ。でも実際は貧民街の住民さえも、農村地域の人間よりはましな生活を送っているのだ。

さらに人口の密集している地域では、マラリアや眠り病などの非常に危険な伝染病はあまり脅威ではなくなってくる。建物が密集すればするほど、蚊や蠅が繁殖する沼地のスペースも減るからだ。そのうえ、水供給、下水設備、衛生サービスは農村地域より都市部の方がまだましだ。教育は都会の方がずっと簡単に手に入るし—発展途上国のほとんどでは都市と農村での教

育格差 10 パーセント以上一都市部の住民の方が平均して良い食事をとっているし、栄養状態も悪くない。

農村地域の方が世界的な貧困問題で圧倒的な割合を占めているのだ。逆に町や都市はパワーセンターで、大きな経済成長をもたらす。発展途上国の都市部は、人口は全国の 1/3 なのに、GDP の 60 パーセントを稼ぎ出す。世界資源研究所 (WRI) ははっきりとこう結論づけている。「都市が成長しているのは、平均して農村地域よりも大きな社会的・経済的便益をもたらすからだ」』。

3-5. 再生エネルギーの最近の動向

再生エネルギーに関する自然エネルギー世界白書は、2018 年 6 月 4 日に発表されたもので、世界の自然エネルギーの概況を最も包括的に示す年次報告書である。以下に日本語要約版から抜粋する。

『178GW の自然エネルギーが 2017 年に全世界で導入された。

自然エネルギー発電設備は 2017 年に世界の発電容量の正味増加分の 70% を占め、近年で最大の増加となった。しかし、合わせて世界の最終エネルギー需要の 5 分の 4 を占める熱利用と交通部門での自然エネルギー利用は、電力部門に比べて大きく遅れをとったままである。

太陽光発電の新設容量は記録的な規模となった: 2017 年に新設された太陽光発電の設備容量は前年と比べて 29% 増の

98GW だった（図 2-5 で中位推定レベルに該当；著者注）。これは、石炭火力発電、天然ガス発電、原子力発電の正味拡大分の合計よりも多かった。風力発電も自然エネルギー発電の拡大に貢献し、世界全体で 52GW が新設された。

新設自然エネルギー発電への投資は、火力発電への巨額の補助金が現在もあるにもかかわらず、火力発電所と原子力発電所の正味追加分への投資額の 2 倍以上となった。2017 年には発電部門への投資の 3 分の 2 以上が自然エネルギーへと向けられた。その理由は、自然エネルギー発電のコスト競争力が高まっていることに加え、今後も電力分野での自然エネルギー割合は増加の一途をたどると考えられているからである。

自然エネルギーへの投資は特定の地域に集中している。2017 年の世界の自然エネルギー投資の約 75%が中国と欧州、米国に向けられた。しかしながら、GDP 当りの投資額で見ると、マーシャル諸島、ルワンダ、ソロモン諸島、ギニアビサウ、その他多くの発展途上国において、先進国や新興経済国と同等かそれ以上の投資が行われている。』

また、太陽光発電が世界のエネルギー経済を変革する中心的役割を担うと言う共通認識のもとに、独フラウンホーファー研究機構太陽エネルギーシステム研究所、米国国立再生可能エネルギー研究所、産総研の 3 研究所間の国際連携により 2018 年 5 月にワークショップを開催した¹¹。

太陽光発電の将来の方向性を示すことによって、太陽光発電の導入・普及を加速するための重要課題の解決や研究開発の推

進に貢献し、太陽光発電がエネルギーシステムの中心的役割を担うことによって、持続可能なエネルギーシステムへの転換を加速するとの意図である。

第4章 環境問題のグローバルトレンドに関する考察

本稿においてソーラーの将来見通しを得るために使った資料は、2001年に発行されたロンボルグの「地球環境の本当の実体」である。本資料のデータと彼の主張の妥当性に関しては、欧州の科学界で賛否の議論が起こり、彼はデンマークの環境系の科学者に起訴された。科学技術イノベーション省はこれを審議して、問題なしとした上で、国家予算を使ってロンボルグの提言に基づき、コペンハーゲンコンセンサスを立案した。2008年の同コンセンサスでは、ノーベル賞を受賞した5人の経済学者らにより、環境問題に関する優先順位が設定され、実質上、国連の途上国援助はロンボルグの線で運用されている。優先度の基準は、コストパフォーマンスであり、当時の優先順位では途上国の教育支援や HIV 予防が上位に来て、地球温暖化は最下位になっている。

彼は、提起されている多くの環境問題に対し、長期レンジの統計データを用いて、グローバルトレンドとして把握することを主張した。そのうえで、長期レンジの統計データを無視して危機を煽り立てるワールドウオッチ研究所の「地球白書」や世

界自然保護基金(WWF)を名指しで批難している。このために多くの科学者の恨みを買ったと思われる。

地球環境がグローバル化している現在、見通しを得る方法としてはロンボルグの方法論は正しいと考えられる。ただし、ロンボルグの方法論を正確に適用するためには、当該環境問題の状況を数値に反映し、かつ信頼できる長期統計データが必要である。この条件を満たしているのは、食糧危機とエネルギー危機の領域であろう。これに反して、地球温暖化と生物多様性の保全問題には適切な指標や統計データが不足していると考えられるため、彼の説は採用できないと判断するのが妥当である。特に、地球温暖化に関しては、未だ火山や地震予知が不可能であることから類推すれば、適切で重要な指標が欠落していると考えべきである。

一方、生物多様性に関しては、統計処理以前の問題で議論が錯綜していると判断されるので、次章でその問題を取り上げる。

第5章 生物多様性一種の絶滅予測に関する考察—

5-1. 毎年4万種が絶滅する

以下はロンボルグの「地球環境の本当の実態」364pからの抜粋である。

『毎年4万種の絶滅という推計は、もともと1979年にマイヤーズが出したものだ¹²。その本の中で「1900年まで4年ごとに1種、1900年以降は毎年1種全滅したと述べている。そし

てマイヤーズは、1974年の会議を引用している。そこで絶滅速度が現在年間100種になったという「憶測が出回った」という。この数字は、ほ乳類や鳥類だけではなく、「科学で知られていようといまいと全生物種の絶滅率だ」から、年に1種という数字よりはるかに多いのは当りまえだ。そしてここで議論の肝心な部分がやってくる。だがこの数字ですら少なく思える。（中略）仮に、この人間による自然環境の扱い（引用者注：熱帯林の開墾を指す）の結果、今世紀最後の25年間で100万種の絶滅が目の当たりにされると想定しよう——あり得ない見通しではまるでない。これはつまり、25年にわたって計算すると、1年当りの平均絶滅速度4万種、あるいは、むしろ、一日100種以上という計算になる。

このお話はアメリカの公的環境レポート『西暦2000年の地球』により世界に伝えられた。それ以降、これはぼくたちの共有意識の一部になった。アメリカの元副大統領アル・ゴアは著書『地球の掟』で、この4万種という数字を繰り返している。

以上が4万種絶滅の論拠であり、それが繰り返し引用されることにより、通説となって人々に刷り込まれた。

有名なハーバード大学の生物学者エドワード・O・ウィルソンは、年27,000から100,000種が絶滅していると指摘する。負けてなるかとポール・エーリックは、1981年に毎年250,000種ほどが絶滅し、2000年までに地上の生物種の半分が滅び、2010-2025年には全滅するとまで推計している。』

以上は、ロンボルグの記述であるが、Myers の著書に関する部分の日本語訳は妥当なものであった。これらの錯綜した議論から言えることは、「種の絶滅速度に関する生物学者達の判断にはなんの根拠もない」ということである。すなわち、生物学者は、種の統一的な数え方を知らないということであり、それは、なぜ種が増加するかについての基本認識に欠けているからだと考える。

5-2. 種の増加についての考察と試算

今はやりの種の絶滅論者に対して逆説的だが、私は、「種はかってないほどに増加しており、これからも増加していく」と主張したい。

生物学者の種の推計値は 1,000 万から 8,000 万種の間ではらついている。主たる要因は、種の 99%以上を占める微生物の種数が不明であり、知られているのは培養できる微生物に限られているからである。L.マルグリス¹³ は、生命誕生以来、原核生物（細菌）が 20 億年ものあいだ地球を支配したという。そのあいだ細菌は、数千億世代もの盛衰を繰り返しながら、環境に適應すべく、あらゆる化学反応を編み出し、無数のタンパク質を合成し、相互に遺伝子交換を行い、共生しながら進化を遂げてきた。

生命と環境との間係は、有機対無機の関係ではなく、生命体として一体となって目的を遂行する関係を構築してきた。細菌

は環境適応力が抜群であり、インフルエンザを見れば分かるように、世界的な規模の環境に1～2年で対応できる。というのも、細菌が新たな環境に入ると直ぐ、細菌叢が遺伝子交換を行いつつ適応するタンパク質を作り出す。この反応は秒・分単位で行われ、数時間で新たな反応系を確立して、新たな環境に適した新種の細菌叢が誕生すると考えられる。このように環境と生命は、哲学的に表現すると即自対自の関係にあり、仏教用語では相即相入の関係にあると言える。この考えは、9世紀後半に比叡山でひたすら「草木自成仏説」を追求した安然が到達した結論に非常に似ている。彼は、環境と有情（生きもの）は真如により同等になると言っているが、真如を共生進化の原理と考えると同じになる。道元禅師の「山川草木悉有仏性」と言ってもよく、釈迦の悟りである「悉有仏性」と言っても良い。つまり、悉有は38億年の進化を共有しているのである。

ブルドーザーで森林を破壊した場合、細菌にとっては新たな環境が出現することであり、それに適応した新種の細菌叢が出現することを意味する。森林を破壊すれば、そこに生息している哺乳類、昆虫、鳥、爬虫類や両生類は減少するかもしれないが、その数十倍～数千倍の新たな細菌叢が出現するのである。飛行場のように一様形状するのではなく、ランダムに近い状態で地球の地面を引っ掻き回すことは、エントロピーを増大させて、細菌の活動領域を拡散・拡大することにつながるであろう。ただし、プラスチックのような人工合成物の場合、細菌の活動領域の拡大につながらないとかんがえられる。

このように、ある特定の環境と細菌叢の関係が1対1である意味を、生物学者は理解していないように思われる。異なる環境の数だけ細菌叢は存在する。したがって、大雑把に細菌の数を推定する場合、地質、温度、湿度、圧力、PH等の異なる条件がこの地球上に幾つあるかを算定すれば良いことになる。例えば、1群の細菌叢が持続的に生存するために必要な環境体積を $1\text{m}^3=10^6\text{cm}^3$ と仮定する。地球の陸地面積は約 $1.5 \times 10^{18}\text{cm}^2$ であるから、深さ1mまで生息域があると仮定し、 10^6cm^3 単位の体積で環境が変化するとすれば、 1.5×10^{14} 種の細菌叢が存在できる。もちろん海中にも細菌が存在しているので、細菌の種数は生物学者が推定するMax.8千万種の 10^6 倍を凌駕することになる。おそらくMyersの「25年間に100万種絶滅」の対象はこの細菌種数のことを指しているのであろう。

図 5-1 1600年から現在にいたる種の数と記録に残った絶滅数

Taxa	種の概数	1600年以來の絶滅数
脊椎動物	47,000	321
哺乳類	4,500	110
鳥類	9,500	103
爬虫類	6,300	21
両生類	4,200	5
魚類	24,000	82

Taxa	種の概数	1600 年以来の絶滅数
軟体動物	100,000	235
甲殻類	4,000	9
昆虫類	100,000	98
織管束植物	250,000	396
合計	約 1,600,000	1,033

出 所:Ballie and Groombridge 1997;Walter and Gillett 1998; May et al

結論として、自説によると、微生物の種数を心配する必要はないということになる。そのため、生物多様性保全の対象は、図 5-1 に示す登録 160 万種と未知の昆虫種と考えるが良い。特に、昆虫種に関しては最大限の注意を払わねばならない。なぜなら、彼らは特定の植物種と固有の共生関係を築いて進化を遂げてきたのであり、いかに小さくても、それが失われると云うことは、38 億年の進化を反映しているユニークな生態システム全体が失われることになるからである。

参考資料

- 1) サブサハラアフリカの農業と気候変動対策 2017 中西 平
- 2) The Skeptical Environmentalist: Measuring the Real State of the World 2001 Bjorn Lomborg 地球環境の本当の実態 2003 山形浩生訳
- 3) 同上 11.10 太陽光エネルギー 191-192p
- 4) ドイツにおける太陽光発電の真実 2015 フラウンホーファー太陽エネルギー研究所レポート
- 5) 自然エネルギー財団レポート <https://www.renewable-ei.org/activities/column/20170630.html>
- 6) 中国における「パリ協定」後の気候変動対策 李志東 IEEJ Energy Journal June 2016
- 7) livedoor's NEWS 2018.8.27 中国がパリ協定のCO2削減目標を12年早く達成見込みとの調査結果
- 8) 自然エネルギー世界白書 2017
- 9) 自然エネルギー世界白書 2018
- 10) 日本における農業とエネルギー Antony F.F. Boys 2001 茨城キリスト教大学短期大学部研究紀要 第40号
- 11) 産総研ニュース 2018/05/28 第2回テラワットワークショップを開催
- 12) The Sinking Ark: A New Look at the Problem of Disappearing Species 1979 Norman Myers
- 13) ミクロコスモス—生命と進化— 1989 L・マルグリス D・セーガン 東京化学同人 田宮信雄訳

ソーラーはライオンとマサイ戦士を救えるか

元田 武彦

小学2年のとき、山川惣治の「少年ケニヤ」が産業経済新聞に連載された。主人公のワタル少年が金髪少女のケイト、マサイの大酋長ゼガ、大人の背丈ほどの胴体を持つ大蛇ダーナとともに、連れ去られた父親を探してケニヤの草原や密林を走破する大冒険物語りである。その間、姿を見せない猛毒の蛇ブラックマンボに襲われたり、ケイトがティラノザウルスに捕るなどの苦難を乗り越え、最後はキリマンジャロの火口壁でティラノザウルスと大蛇ダーナの死闘が繰り広げられる。挿絵も面白く、毎日ワクワクして新聞が配達されるのを待っていた。いま読むと、どうしてそんなにと思うほどだが、ケニヤの動物たちとマサイ戦士のイメージは鮮烈であった。そのため、大人になった今でも、マサイの人々には幸せになって欲しいと感じ、動物たちには生き生きと自由に走り回ってほしいと願わずにいられない。

国連人口統計の伸び率中位推計によると、ナイジェリア、タンザニア、エチオピア、コンゴ等の人口は、2100年には現在の4倍の20億人を越えると発表された。いまのように草原や密林周辺に分散して居住し、薪炭で煮炊きする生活を続けていけば、これら草原・密林地帯が裸地になり、野生動物に対して重大な脅威が発生するのは明らかである。

確かに、アフリカでも人口の都市集中は始まっており、現在は約 55%の人口が都市部に住んでおり、2100 年には都市部の人口割合は70%を越えると予想されている。その一方で都市のスラム化が著しく、大きな社会問題となっている。独立して40年以上たっても、部族の主導権争いで内戦が起こり、大量の難民が発生して農村部から都市部に流入している。この現象は、英、仏など旧植民地国が部族間の対立を煽って支配してきた後遺症が現れているものと思われる。

スラム発生の要因は、都市インフラで必須となる電気・水・交通設備が人口増加に対応しきれていないことである。2015年に締結された地球温暖化対策の国際枠組みであるパリ協定では、2020年以降、先進国は毎年1000億ドル（日本円にして約10兆9,000億円）の途上国支援を目標とし、日本も率先して1.3兆円の支援を約束した。パリ協定の主役は旧植民地国であったが、旧植民地支配国には、期待割り当て額以上の支援を果たす責務があると考えられる。となると、途上国支援金を、都市インフラの整備資金に回すことにより、都市環境を良くする政策が重要である。人口の都市集中による経済活動の活発化を通じて経済成長と文化の高度化が生じ、22世紀以降は、人口が減少する社会になるであろう。そうすれば、結果として、森林やサバンナの生態系が守られていくことになる。そしてそのためには、都市部の経済活動を支える電力供給が必要不可欠となる。安定した電力供給源が得られれば都市人口を支えるためのエネルギー需要が満たされるため、草原や密林周辺の人口

は都市部により流入することで、森林やサヴァンナにおける人口の密集が減少し、生態系も回復して植民地化以前の状態に戻すことが出来るだろう。その切り札になるのは、化石燃料の半分以下の費用でエネルギーを賄えるソーラーであると考える。ソーラーは温室効果ガスを排出しない上に、サブサハラ諸国は赤道近辺に有り、太陽光の強さが温帯先進国の倍もあり、エネルギー面で圧倒的に有利な状態にある。私が昔から親近感を抱いているケニヤのマサイ族を例として、彼らの文化がどう変化するかを想像してみよう。

少年ケニヤが連載された翌年から、ケニヤは最大部族(22%)のキクユ族を中心に英国植民地からの独立を求めてマウマウ戦争を闘い、十年後に独立を勝ち取った。ケニヤを構成する四十二部族の内、マサイ族は少数派で30万人程度である。政府の政策、環境保護団体などの圧力により、マサイの居住地は国立公園で囲われ、定住化を強いられ、ライオンの狩猟を禁じられた。しかし、マサイは草原での遊牧・放牧生活の中で培った希有の文化を持つため、マサイにとってライオンは自己のアイデンティティを確立する重要なパートナーである。

一昨年の正月、マサイ族の男がライオン6頭を殺した。家畜が襲われたことへの「報復」である。政府当局者は「絶滅の危険があるライオンが殺されたのは悲しい」と述べ、責任者を特定し訴追する方針を明らかにした。マサイ族とライオンの長い関わりにおいて、ライオンがマサイ族を襲ったあと彼らの報復がいかに熾烈なものであるか、ライオンはよく知っている。そ

のため、マサイ族の子供が草原を歩いていてもライオンは襲わない。つまり、マサイ族はライオンの天敵なのだ。

そしてマサイ族の文化では、ライオン狩りは一人前の戦士の証である。銃を使わず、鎗と刀でライオンに立ち向かうのである。成人男性は猛獣退治や牛の放牧以外の労働をせず、普通の仕事は全て女性や子供が行う。これは戦いのみが男性の仕事で、武器以外の道具を持ち運ぶことすら恥とする彼らの価値観による。外部の人間が仕事を与えても「自分たちの文化ではない」として受け入れない。何ともシンプルで逞しい男の文化である。

環境保護団体が 2012 年から「マサイオリンピック」なるものを実施している。得意とする垂直ジャンプや投げやりなどの身体能力を競わせ、彼らのエネルギーの捌け口をライオンからスポーツに向けようとの魂胆である。一位の賞品はヤギ 1 頭 1 万 5 千余円とのことである。しかし、彼らは日常的に、放牧中は家畜を襲う猛獣と鎗とナイフで闘い、ときには村落を襲ってくる象とも戦う。マサイの男はライオンとの命がけの闘いをくぐって初めて戦士としてのアイデンティティを獲得できるのであり、スポーツとは全く次元が異なるのである。

オックスフォード大学などの欧米研究チームが 2015 年にライオンの生息数を発表した。近年行われた生息調査のうち、信頼性の高いデータだけを選び、アフリカ全体の 47 地域で少なくとも計 8221 頭が生息していると推定した。そして今後二十一年間にケニアなど東部では 14 地域のうち 6 地域で生息頭数が 3 分の 2 以下に減少すると評価している。これは人口増加に伴

い野生動物の生息できる地域が減少して草食動物が減っている上、政府の保護予算が少ないのが主因とのことである。

1950年に六百万人だったケニアの人口は、現在五千万人にまで増え、2100年には一億四千万人になると推定されている。増加する人口が従来通りに居住すると、ライオンを頂点とする動物王国が消滅する。幸いに人口の都市集中化が進んでおり、ケニアにおいても2100年には七割以上が都市に住むようになる。また草原の居住者にはクッキット（五ドル程度）のようなソーラーキッチンを無料配布すれば、森林を伐採してエネルギーを作る必要もなくなり、密林や草原へのストレスは大幅に緩和され、以前の動物王国が復活する可能性も考えられる。そのような努力を続ければ、百年ほどで生物多様性豊かな大地を取り戻し、草原のサファリでライオンと戦うマサイ戦士の勇士を見るのも夢物語ではないと考える。

外来種雑感 -Miscellaneous Thoughts on Introduced Species-

尾崎雄三（縮小社会研究会）

外来種生物が問題になっている。さいきん昨年話題になったのがヒアリであり、アルゼンチン原産の種がアメリカ、中国と広がり、日本にもコンテナに入って上陸した。人が刺されると死ぬこともあるとのことで、大騒ぎになったが、今のところ水際対策が成功して定着はしていない。数年前にはセアカゴケグモが問題になり、これはほぼ定着したようであるが、今はほとんど忘れ去られている。

外来種が問題になるのは、急速に増殖して在来種を駆逐することや、なんらかの物的、人的被害を及ぼすからであり、環境省が「特定外来生物」を指定して被害防止を図っている。よく知られているのが、毒蛇のハブを退治する目的で導入されたが、ハブを取らずに天然記念物のアマミノクロウサギなどの貴重な在来種を捕食し、問題となった奄美大島のマングース、ペットとして輸入されたが、大きくなって手に負えないようになってから捨てられて、増殖したアライグマやミシシippアカミミガメ(ミドリガメ)、ルアー釣りの目的で輸入して川や湖、池に放たれて大繁殖し、在来種のフナやアユなどを捕食し、その数を減少させたブラックバスやブルーギルである。古くは、食用目

的で導入されたウシガエル、アメリカザリガニが日本全国に広まった例がある。植物の例として、西洋タンポポやセイタカアワダチソウなどがあり、これも全国に広がっている。

では、外来種は本当に害しか及ぼさないのかということ、そうでもない。ニンジン、白菜、ナス、ゴボウ、ジャガイモなど、私たちが日常食べている野菜は、元はすべて外来種であり、日本で出回っている野菜の約95%は外来種だといわれている。日本原産なのは、フキ、三つ葉、ウド、ワサビなど、山菜やそれに近いものばかりである。

外来種がその地で増殖するのは、天敵がいない、土地や気候が適している、動物の場合には餌となるものが十分にあるなどの条件がある場合で、日本に持ってきたらすべて増殖して害悪を及ぼすというわけではない。逆に日本の生物が海外の国で外来種として問題となっている場合もある。ワカメは、孢子が船についてニュージーランドに移動し、大增殖して養殖されているムール貝に被害を与えているし、ツル植物のクズはアメリカで建物や農地に広がってこれらを覆い、問題になっている。また日本の在来種のオオハリアリは、日本では問題視されていないがアメリカで増殖して現地の在来種のアリを殺して生息数を大きく減少させて問題になっている（日本経済新聞 2018年8月5日）。

外来種が問題になるもう一つの理由は、人間の食習慣である。琵琶湖のニゴロブナやアユは、完成した調理法があり、日本人が食べなれているが、ブラックバスやブルーギルは食べる人は

少ない。もしおいしい調理法ができて広まり、多くの人々が食べられるになれば、漁も盛んになり、問題はなくなるかもしれない。食べたことはないが、いずれの魚もなかなかおいしいという評価を見たことがある。ワカメ、クズは日本では食用にされるが、現地では食習慣がない。ワカメなどは健康によいことから、食べればよいと思う。

現在はグローバル化が進み、人や物の移動が頻繁に行われるような状況なので、外来種が新天地に入り込んで増殖することを避けるのは難しい。ただ、当初は猛威を振るう外来種も、時間がたつと自然のバランスに組み込まれて落ち着くようであり、一時空き地を占拠して話題になったセイタカアワダチソウも最近は大繁殖しているところは見かけない。

史上最悪の外来種は人間であるといわれている。人類はアフリカで発生し、出アフリカを経て世界に広まり、科学技術を手にして自然環境を破壊しているのだから、まさにそのとおりである。アメリカでは、イギリスなどヨーロッパ各国から移住した人間が在来種である原住民を駆逐して大繁殖、いや大繁栄している。日本でも渡来人である弥生人が在来の縄文人を駆逐したと考えられている。

問題となっているミシシッピアカミミガメ、アライグマなどは、売れば儲かるという人間の欲望で輸入され、そして手に負えなくなったから捨てるという人間の身勝手の結果である。

自然界の生態系のバランスは長い年月をかけて出来上がったもので、これを科学技術を手にした人間が急速にかく乱してお

り、その結果生物の多様性が大きく損なわれつつある。自然のバランスを崩すとそのしっぺ返しはどこかで何らかの形で自らに跳ね返って来ると考えるべきではないだろうか。

靈的進化の予備体験

縮小社会研究会 川崎尊康

【要約】

心身を洗練し、持続的に普遍的真理を追究し続けることによって靈的進化の可能性は開かれる。以下に示す5つの領域の体験をありのままに記述することにより、靈的進化の予備体験とはどのようなものかについての具体的なイメージを重ねていただけたらと思う。

1. 絵画の領域：デッサン（精密描写）とクロッキー（素描）に専念して得た、繊細な感性
2. 食の領域：玄米正食を実践すると、感覚が鋭敏になる
3. 心身の領域：空手の稽古で気付いた、精神と思考が身体能力を高めるメカニズムと、その向こうにある、揺るがない心
4. 音楽の領域：音楽の無い日はない
5. 友人の領域：私の人生に大きな影響を与えた亡き友人の話

1. デッサンとクロッキーに専念して得た繊細な感性

1) 描くための選択

一般社会では何が行われているのか、そこで生きるとは、ど

うということなのか。大学を卒業後、そんなことを考えながら、横浜にある大企業に就職した。そして、2年後に退職を選び、念願だった絵を描くために京都に戻った。その時、私は24歳になっていた。学生のころ暮らしていた、西院にある、古いアパートの一室を、また借りるために、よく知る大家さんを訪ねると、彼女は驚きながらも、再会を喜んでくれた。

引っ越しが落ち着くと、荒神口にある、京都文化芸術会館（通称、芸館）で、毎週土曜日の午後で開催される、クロッキー会に通い始めた。そこで出会った九州出身の画家、I氏に、岡崎にある、日本最古の洋画研究所を紹介された。それは、洋画家、浅井忠創設の関西美術院であった。そのおかげで、翌週からデッサンとクロッキー、そして一ヶ月後には油絵の制作も再開できたのである。

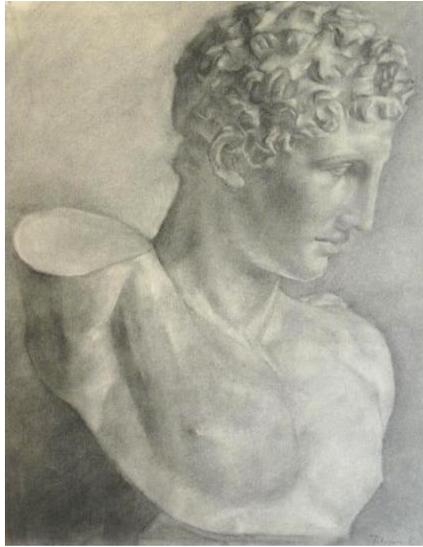
2) デッサンとクロッキー

古代ギリシアやローマの彫刻には、見る者を捉えて離さない、圧倒的な存在感がある。石膏のレプリカになっても変わらないその神秘的な美しさを、炭の濃淡だけで再現する石膏デッサンは、実に興味深い作業である。長時間、時には何日もかけて一枚のデッサンを仕上げるが、それは途方もない、描いたり消したりの繰り返しをひたすら続ける作業である。その繰り返しは、木炭を操る「手の動き」によって生まれる画面の変化を察知する「感性」、その刹那、次の動作を決定する「判断」によって引き起こされるが、私はこの3つ、即ち【身体性】、【感

性)、【判断】の働きを統合するものを「思考のダイナミズム」と呼んでいる。

デッサンでは部分である石膏象の目鼻だけでなく、細部のすべてと、それらが構成している彫像の全体像を、平面上で有機的に関連づける。それと同時に、彫像の内面性をも形に変換し、炭の濃淡であらゆるニュアンスを与えて表現するために、ある部分で構築し、別の部分では破壊、次の刹那はその反対、というように集中力を向ける先を、感じるままに変えることになる。そのため、思考のダイナミズムは、画面に美が出現するまで、何千回も、全体と部分を行き来する。

このように、思考のダイナミズムは通常の思考では分析が困難な、「部分と全体」のような関係性を分析し、且つ具現化しようとする。デッサンの場合、分析したことを、芸術の領域にある美に収斂させることが、その具現化ということになる。



ヘルメス、デッサン/紙に木炭、筆者 1983

従って、描かれた対象に、自分が求める美を見出したとき、画家はデッサンを終えるのであるが、それは同時に、彼の思考のダイナミズムが、石膏像の全体と、その細部の関係を隈なく観察・分析し、描写した結果、そのデッサンに芸術性を備えた美が出現したということである。

美の出現には、描かれる、部分と全体の関係が厳密であると同時に、自然であることが求められる。デッサンにおける、このような思考のダイナミズムを A モードの思考と呼ぶことにする。A モードの思考は、部分と全体の関係を厳密に分析し、自然な形に再構築するために、それらの間を、際限なく行き来する。そのような反復運動を繰り返すことによって、思考のダイ

ナミズムは、ついに画面上に美を捉える。しかも、思考のダイナミズムが画面上に美を捉える瞬間は、自らのダイナミズムを強める瞬間でもある。そして、一層繊細になった感性は、対峙している画面上の美が、より洗練されることを望み、思考は、その望みに応えるべく、自らのダイナミズムを、更に強め、洗練させるのである。

このように、一度、思考のダイナミズムが、美の具現化を目的として働きだすと、本来自分の持っている、普遍的な真理を求め、エネルギーをも強めることとなり、そのエネルギーが目的の美を、さらに洗練させるというループを形成して進化するのである。

レオナルド・ダ・ヴィンチが、一生、「モナ・リザ」を手放さず、加筆し続けたのは、完全な美を求め、どこまでも描き続けることで、結果として普遍的な真理を追究していたことになるであろう。

3) 絶対の美は、人間精神の内に見出されるものである

絵画に限らず、何らかの自己表現によって美を追求すると、「完成」という到達点がないことに気付く。それは、絶対の美が思考の及ばない領域に根差していることを意味しているが、プラトンの言うアイデアの在処とは違う。

プラトンの「美のアイデア」が、天上界にあって、人間は、それを地上から仰ぎ見る（想像する）存在であるのに対し、私が思う絶対の美は、思考のダイナミズムが躍動して感性が美を求

めている状況の下で、初めて自らの精神のうちに感じ取れるものである。

思考のダイナミズムの反復運動は、必然的に靈的進化の方向に向かう。私の言う「靈的進化」とは、人類がより良い社会を築くために必要な精神的成長のことである。現代文明が抱える問題の多くは、人の心の在り方にその原因が見出される。私たちは、進化を想定した方向に、より良い心の在り方を探り、やがて全ての人類がこの素晴らしい星を共有できるように、悠久の時の流れに進化を待たず、自らの意思で新たな人類に再生しなければならない。私は、人が、この崇高な目的のために果たす進化を、靈的進化と呼んでいる。

プラトンが天上界にあるという真・善・美の本当の在り処は、その反復運動が向かう先にあるが、それは天上界ではなく、普遍的な真理を捉えることが可能となった人間の知性の中にあると考える。

4) なぜ抽象画を描くのか

後に、私は、国内外において油彩で抽象画を大量に描くようになった。例えば 1993 年のオーストラリア、アデレード市のライオンセンターで行った個展では、同市において 60 点以上を制作し、43 点を展示した。1994 年 11 月、大阪心齋橋の小丸画廊にて 35 点の抽象作品展を、1996 年には、ニューヨーク、モンセラギャラリーで 30 点余りの抽象作品展、翌年の 1997 年、東京の、東京現代美術クラブ画廊において開催した個展では 40 点近い抽象作品を展示した。

私は30年前に絵画における表現形態を具象から抽象に切り替え、現在に至っているが、その変わり目は1989年のことであり、ギャラリー・中井（京都市木屋町三条）で開催した6回目の個展の直前であった。その個展では、入って右半分と正面の壁面に具象作品を配置し左壁面に抽象作品を展示することにより、具象から抽象への移行をレイアウトの趣旨とした。

会期中は、それまでの傾向を知る人達から、作品が抽象になった理由を問われたが、穿った説明ができなかった。というのも「何かであること（具象）を振り切るかのように筆を走らせ、キャンバスに絵の具を擦り付け、何ものをも想起させない、純粋な色彩のハーモニーが出現すれば、その時点で完成とする」というような作画を、会期が始まる一週間前に突然始めたからである。

そうして、できた作品の制作動機は、「色彩のコンポジションを、自由に追求すること」などというものであった。今なら、「思考のダイナミズムを躍動させること」であり、「学んだことを、世界のために生かすには、それらを一旦、抽象化する必要がある」と言うであろう。

5) クロッキーによる思考モードの変換

クロッキーを数か月、何百、何千と描いた後、描くための思考が変わったと確信したときがあった。「分析的思考ではなく、感動で描く」、敢えて言葉にするとそのようになる。

デッサンの時と同じAモードの思考で数百枚描いたころ、何

かに違和感を覚え始めたが、その違和感が何なのか分からないまま、さらに描き続けていると、自分が、生きたモデルを、石膏像のように見做していることに気付いたのである。



裸婦、クロッキー/紙に鉛筆、筆者 1988

デッサンを描いている時のAモードが捉える全体が、あくまで、画家の観察対象であるのに対し、クロッキーに適した思考モードで捉える全体とは、画家自身を含む全体、ということができる。その思考モードをBモードと呼ぶことにすると、Bモードが対象とする全体とは、モデルと、それを描写する画家自身が創り出す、生命の場、ということになる。この、Bモードの思考が、もう一つの思考のダイナミズムである。

そのことを前提にして、クロッキーを描くときの思考のダイナミズムが、どのように働くのか、考えてみたい。クロッキーを描くうえで捉えるべき全体は、生きたモデルと画家が創り出す、生命の場である。そして部分及び細部は、モデルと画家を

含む、その生命の場を構成しているものすべてである。思考のダイナミズムが相手にするのは、石膏像のように、命を持たない、静止した物体ではなく、生きて周囲の環境（状況）を巻き込み、変化し続ける生命の場である。

では、何を描くのか。モデルは何のために、そこでポーズをとっているのか。モデルが意思をもって、所定の位置につき、動きを静止させたとき、その空間は、明らかにそれまでとは違う空気に支配される。時間が止まったような緊迫感の中を、静止しているはずのモデルから伝わってくるのは、命の躍動、即ち、彼女の気迫である。

モデルからやってくる気迫を受け止めた画家は、それを一本の線に託して表現するのである。生命そのものが放つ気迫を一本の線で表現することは、石膏デッサンを一生続けても知ることのない、命と命が真剣に向き合った刹那に生まれる、存在そのものの歓喜が、線となることである。それは、正に「美の誕生」であり、私の理想とする芸術の本質もそこにある。

このことから言えるのは、デッサンにおける対象の時間は止まっているが、クロッキーでは、画家とモデル、双方の時間が流れており、モデルがポーズをとっている時間は、異なる瞬間の連続であり、同じ瞬間は二度とやって来ない。即ち、「クロッキーを描く」とは、「変化し続ける生命の場から、ある一瞬を切り取る」ということであり、ある一瞬を切り取れることは思考のダイナミズムがどのように作用するのかを洞察する上で、極めて重要なことである。

従って、クロッキーを描いているとき、画家には、石膏像を観察しながら何十時間もかけて、思考のダイナミズムに反復運動をさせているような時間の余裕はない。別の言い方をすると、クロッキーでは、対象を客観的に観察し、紙面に再現することに何の意味もないのである。

クロッキーの価値は、瞬間を切り取ることであり、画家の気迫が描かれた線に感じられることである。その為、画家はモデルを見ることに執着せず、モデルが放つ気を感じ取ることに意識を集中させなければならない。

モデルが発する気のエネルギーを受け止めた刹那、そこから生まれる画家自身の歓喜を、即座に形にするために、画家は、先ず、繊細、且つダイナミックに、モデルから来る気のエネルギーを感じ取らなければならない。そして、次の瞬間、自身に湧き上がる歓喜のエネルギーを、モデルの姿を借りて、間髪入れず表現するために、彼は俊敏でなければならない。素早い腕や手の動きが必要なのは、クロッキーにおいては、歓喜が一瞬で失われるからである。即ち、気と気が調和して生まれる歓喜を、画家の気のエネルギーによって、瞬時に活きた線に変換するのが、Bモードの思考の働きである。



裸婦、クロッキー/紙に鉛筆、著者 1988

Bモードの思考が、Aモードと違うのは、そこに満ちている
気に含まれる諸々の想念（嫌悪、怒り、悲嘆、歓喜、希望、感
謝など）が自分に与える影響を受け入れることである。Bモー
ドの思考は、そこから、気のエネルギーを高める、喜びや希
望、感謝のような有益な想念を生かし、気のエネルギーを損な
う、怒りや悲嘆、嫌悪などの想念を排斥することによって、自
らの靈的進化に結びつけようとするのである。

2. 玄米食が変える感覚

1) 玄米は生きている

私は、子供のころ、夏休みになると、妹と両親の夫々の実家に行くのが楽しみだった。母の実家に滞在していたある夜、祖母と叔母たちが話しているのを、ぼんやり聴いていて、興味を覚えたことがあった。それは、「玄米は、撒いたら芽が出る」という祖母の一言だった。前後の脈絡は忘れたが、祖母が、自分の娘達に教えるように、ぼそっと言ったことが、いつまでも記憶に残っていた。

18歳で親元を離れ、京都で一人暮らしを始めて最初に買いに行ったのが、圧力鍋だった。玄米を炊くためである。祖母の一言のおかげで、玄米を食べてみたいという思いが募っていたのだろう。親元では叶わなかったが、玄米を実際に食べるためには、圧力鍋が必要だということは知っていた。

当時、玄米の炊き方がよく分かっていなかった私は、何度か失敗を繰り返した。苦労の末、やっとまともに炊けた玄米を食べてみると、やたらと下痢になるのである。よく噛まないせいだと思い、何十回も咀嚼してみるが、やはり下痢。仕舞には、何を食べても下痢をするようになってしまったのである。そして、おそらく、そのせいで痔を患ってしまったのだが、それを境に玄米食を打ち切ったのである。

それから時は流れ、関西美術院でデッサンに励んでいたころ、両親を尋ねたある日、父の本棚に有吉佐和子の『複合汚染』があったので、借りて読んでみたことが、玄米食への復帰と、その後の研究のきっかけになった。それ以降、現在に至るまで、途中、何度も中断していた期間はあるものの、研究を続

けながら、40年近く玄米と付き合っている。

なぜ、有吉佐和子の『複合汚染』と出会ったことにより、玄米食に復帰したかということ、本の内容から、あの下痢の原因に思い当たったからである。最初に食べた玄米は、下宿の近くにある米穀店の精米する前の状態の玄米であった。その玄米が下痢の原因だったことを検証する術もなかったので、食しても安全と思える玄米を求めて、美山町までバイクを走らせたのである。誰かに教えてもらった農家で、無農薬玄米を、何キロか分けてもらった。それをもって帰ると、すぐに炊いて夕飯の一善とした。すると予想通り、その夜は、トイレに用がなかったのである。

現在、私は、自分と多くの患者さんの為に、2軒の農家から玄米を分けてもらっているが、いずれも、私たちの健康を支えてくれていると信じている。

2) 玄米と付き合って分かってきたこと

さて、今日まで、私が玄米から学んだことの中から、「霊的進化」に関わると思うことを、いくつか紹介したいと思う。

私は、今は菜食生活をしているが、厳格な菜食主義者というわけではない。菜食志向といったほうが近い。以下は、私が、厳格な菜食主義を避ける理由である。

I 魚は家畜と違い、死のカルマがない（と思っている）のと、天然ならば、人工飼料の心配もないので食べる。（マイク

ロプラスチックのことは気になるが・・・)

II どうしても食べなければならぬ状況では、腹をくくり、
獣肉も喜んで食べる。

I について

最も厳格な菜食主義者のことをビーガン (vegan) という
が、彼らに野菜だけを使った日本料理を出しても、すぐには
箸をつけないだろう。例えば、「カツオだし」が使われている
みそ汁は、鍋に戻されることになるし、私の好きな茶わん蒸
しは、鶏やエビが入っていなくても見向きもされないだろ
う。彼らは卵や蜂蜜も口にしない。私がビーガンになりたく
ない理由の一つである。

II について

例えば、食事に招待してくれた家の奥さんが、丹精込めて作
ったタンシチューを出してくれたら、私は誰よりも喜んで、そ
れを平らげるだろう。実際は、招かれた段階で菜食志向の事情
を知らせておくので、このような状況は滅多にないのだが、も
しあったとしたら、私はそうする。なぜなら、人の真心を、喜
びをもって受け止めることほど、人間的なことはないからだ。
私は「真心を喜ぶこと」を、靈的進化の予兆として感じたいの
である。このような状況に限らず、人と協調性をもって接し、
幸福を分かち合おうとする心は、靈的進化にとって、より重要
である。

というわけで、私は厳密な菜食をしているわけではないが、

菜食を選択させているのは玄米である。なぜなら玄米はオカズを選ぶのである。玄米の味わいは、滋味に富み、ほのかに甘く、特に主張するわけではないが、独特の香りを持つ。だが最も重要なことは、味わいの奥に、生命力に裏打ちされた大地のエネルギーを秘めている点である。

これらの味わいが分かってくると、当然のことながら、その味わいを生かしてくれるオカズが欲しくなる。そして玄米に合う、食材や料理を求めていると、結果的に、きんぴらごぼうやぬか漬けのような伝統料理が愛おしくなってくるのである。

3) 気づけば、感覚が別人になっている

こうして玄米を食べて暮らしていると、よき友の影響を受けると、生き方が変化するように、好みや価値観まで変わってくる。

私は小学3年生のころから、昆虫に興味をもち、修学旅行にも捕虫網を持参していた。中学の修学旅行は、四国のVラインコースをバスで巡るというものだった。途中、トイレ休憩中、大歩危溪谷で完品のウスバシロチョウを2頭捕獲し、印象深い旅行になったことを、今でも覚えている。

だが、学生の頃に、ボール紙の標本箱が、虫に食われ、それまで集めた蝶や甲虫が、カツオブシムシによってほぼ全滅した。あのウスバシロチョウも思い出とともに粉塵と化したのだ。嘆き悲しんだ末に、昆虫の収集をやめたのだったが、24

歳のころ住んでいた、長岡京市の家に、トビイロトラガという美しい蛾が舞い込んだ時があった。

眠っていた昆虫少年が復活したのは、その日からである。捕虫網と三角ケース、それに毒ピンを新たに揃え、どこへ行くにも持ち歩いた。ボール紙の標本箱は、ドイツ箱と呼ばれるしっかりした木製の箱に変え、年に一回ナフタリンを二粒入れることによって、カツオブシムシによる被害を防止した。蝶や蛾、今にも這い出しそうな甲虫が入った何十ものドイツ箱は今でも倉庫に安置してある。

ところが、大好きだった昆虫採集は、玄米食に復帰してしばらくしたころから、次第に行かなくなり、この 10 年ほどは一度も行っていない。たまに珍しい蝶が庭に飛来しても、敢えて標本にしたいという思いは湧かず、飛翔の様子を眺めているだけである。今更こんなことを言うのは、若干恥ずかしさがあるが、敢えて言うと、「生きている虫たちが愛おしい」のである。それは、価値観（死生観かもしれない）が変わったことを示す一例である。倉庫に安置された標本箱を見ないようにしているのは、私が命を奪った昆虫たちに対する懺悔と弔いの方法が、まだ分からないからかもしれない。

もう一つ、味覚の変化についてもここに記す。ある日を境に、私は肉料理を好まなくなった。それまでも若い頃ほど、好んで肉料理を食べていたわけではないが、皆のために、ローストビーフや鴨ロース、ダッチオーブンで蒸し焼きにするタンド

リーチキンなど、肉料理を提供することもしばしばであった。

勢い、肉料理には、白いご飯か、パンということになるのだが、私は一人、玄米ご飯を頂いていた。しかし、すでに述べた通り、玄米はオカズを選ぶのである。私ではなく、玄米が肉料理を嫌った。その為、「肉を食べたいので、白いご飯かパンにする」のか、はたまた、「玄米を食べたいので、肉を諦める」という単純な選択を迫られた後、私は後者を選んで菜食志向になったのである。

旅行に出かけるときに、私のように、凍らせた玄米のおにぎりを、大量に持参する人はあまりいないと思う。旅館やホテルにチェックインした際には、冷凍おにぎりの保存と温め処理をお願いするために、まず調理場に向かう。そのような、(宿泊先にとっては迷惑になりかねない) 習慣が身に付いたのは、旅先で、玄米食べたさに、早く帰りたいと本気で思った経験からである。

これらの事実は過去の自分の嗜好から考えても、「玄米によって感覚が変わった」としか思えない。最近、ある敬愛する人物から、「無理に玄米を美味しいと、思おうとしているのではないですか?」、と訊かれたので、「私にはそんな面倒くさいことをしている暇はありません」と答えた。

3. 空手と思考

1) 中高年が始めた空手

空手を始めたのは、五年前の寒い冬の日であった。子供の精神修養のために、車で10分ほどのところにある道場に連れて行ったのが、きっかけである。道場の隅で正座し、稽古の様子を見ていると、師範の先生から、「寒いので、よかったら、一緒に身体を動かしてください。」と、声を掛けられ、練習に加わった。師範の真似をして、「エイッ、エイッ」と、繰り返し宙を突いていると、先ほどまで寒さに震えていた身体が、たちまち汗ばんできた。

それから、毎週火曜日の夕方、同じ状況を3回繰り返した後、師範が手渡してくれたのは、かつて自身が使っておられたすり切れた道着だった。それは入門の勧めととれたが、その時は、恐縮とお礼の言葉を述べるにとどめた。そして翌週、改めて入門を申し出たのである。

毎回、稽古の最後に、黙禱して唱和する道場訓がある。

道場訓

- 一、空手道を修めんとする者は
身体を鍛錬し、精神を修養することを
第一の目的とする

- 一、空手は湯の如し
絶えず熱度を与えざれば
元の水に還る

一．空手は礼に始まり

礼に終わることを忘れるな

空手道初段の私は、毎週、稽古に励んでいるが、特に段位が欲しいわけではない。稽古をしていて、気が付くことや、突然閃くことに尽きない興味がある。

稽古は、「組手」と「形」を行うが、どちらも学ぶところが多い。昇段試験においては、「移動基本」、「分解」、それに「形」の正確さを試される。移動基本とは相手を執って、何種類かの動作を、「攻撃」と「受け」に分かれて、交互に繰り返すが、動作を間違えると、相手も自分も痛いことになる。分解は文字通り、「形」を分解した、3～4種の動作を、相手を執って途切れなく行う。これも動作を間違えると痛い目に合う。

2) 身体性と霊的進化

整体師でもある私は、患者の施療は、全身をほぐすことから始める。うつ伏せで背骨をゆすった後、背骨の両側にある経絡を3往復以上指圧する。横臥で肩関節を回し、肩甲骨はできるだけ広く展開する。さらに、肩関節部と腸骨を反対方向に押圧し、脊柱全体を旋回させる。反対に向け、同じことを行った後、仰向けで、股関節は伸展及び旋回、膝は伸展を行う。必要があれば、足首を伸展・屈曲、或いは旋回させる。さらに必要があれば、足指の夫々に、伸展、指圧を加え、指間を開く。特に必要な部位には、精油を使い、アロマテラピーを併用したマ

ニュピレーションを行う。そして、特に問題がある症状には、最も適していると思われる治療を施す。これだけの治療を、気を入れ、心を込めて行くと、午前中4人、午後5～6人診るのが精いっぱいである。

しかし、治療に入る前に励行していることがある。屋内外の清掃と鉢植えの水やり、花活けである。これらは、私にとって、よい治療を行うために必要な行事である。

以前は、そのような治療を終え、6時か7時に帰宅すると、ぐったりして、しばらく何もできない状態であった。それでも、夜に空手の形の練習を試みたことがあったが、続けることはできなかった。

そのため、早朝ならどうだと思い、6時に起床して練習を試みると、これが正解で、日中も元気で過ごせるのである。不思議なことに、早朝練習が習慣になると、帰宅後も練習できるようになった。最近は、「5・4・3・2練習法」という独自の練習法を編み出し、大いに楽しんで励んでいる。5・4・3・2とは、回数の中で、重要な形を5回、二番手の形を4回、併せて9回早朝に行う。夜は、其々2回減らし、併せて5回、帰宅後すぐに行う。形を練習する前には移動基本と分解の練習を、其々2回、朝晩行うのである。

形を覚えると、動作の速度も上がり、その分、筋肉を酷使していて、疲れるはずである。以前は、未完成の形の練習を1、2回、それも、帰宅時だけ、師範の見本の動きを思い出しながら、ゆっくりと行った。それでも終わったら、何もする気がし

ないほど疲れた。それで、練習方法の何がどう違うのか観察しながら練習していると、以下のことが判ってきた。

次に示すⅠ～Ⅳ項は、身体能力の変化を観察する上で、「疲労度」を目安とし、身体と思考の関係を、私なりに段階的に考察した結果である。

- Ⅰ 身体の動きに気が入ると、疲れにくい。
- Ⅱ 身体の動きを思考が分析できると、さらに疲れにくい。
- Ⅲ 各動作の一瞬手前で、その動作を正確にイメージできるようになると、疲れは半減する。
- Ⅳ 流れの緩急に合わせて、自分が理想とする動きができる様になれば、疲れないばかりか、練習を始める前より元気になる。

Ⅰ について

「気が入る」というのは、他のことに気づかないほど集中している状態である。だらだらやるより気を入れて、しっかりやるほうが疲れないのである。

Ⅱ について

今、自分が行っている動作について、自分の言葉で解説ができること。例えば、お茶の師範がお点前を行いながら、その一連の所作について解説できることに似ている。

Ⅲ について

空手は、速度が命と言われるほど、早く、正確な動きが要求される。しかし、早さに捉われると、身体の動きは、不

正確な軌跡を描くようになる。次の動作を、その瞬前で、正確にイメージすることを心掛けていると、速度は自ずと増してくる。そして無駄のない俊敏な動きが、心身を軽快で快適な状態に導き、疲れは半減するのである。

IV について

この段階で、形の動作は、自己表現を伴うようになる。それは、ここまでの努力が結実し、一心に形の完成を目指してきた過程に、一種の芸術性が加わったことを意味している。さらに、身体は、自由に思い描いた形を表現しようとする意思に、喜んで従うようになる。それは精神と身体が相互に賦活し合う関係になったことを示しており、その結果、練習者は一層元気になると考えられる。

上述したⅡ～Ⅳの過程は、思考のダイナミズムが、自己の身体において往復運動をしている状態である。デッサンやクロッキーが目指す「全体」が、紙の上に出現する真理（理想の美）であるのに対し、空手が目指す「全体」は、「精神と身体性の一致」である。

即ち、「形の完成」という目的をもって、繰り返す動作を通して、「思考のダイナミズム」を働かせ、部分である、すべての動きを完全に把握し、第三者の観察に耐えうる状態を目指し、精神は、より高い身体性を必要とし、身体はこれに応え、「自己表現」という新たなステージにおいて、精神と一体になるのである。

しかし、知性は、「精神と身体性の一致」は、さらに重要なこ

とを成し遂げるためのプロセスであることを承知しているのである。

知性が肉体を使って、理想を表現しようとするとき、最後に、全てを観察している知性自身が観察している身体と一つになる必要があるということである。それは「知る、もしくは理解する」の究極の地点といってよい。簡単に言うと、「ありのままの自分を受け入れる」ということになる。

3) 身体の障害を乗り越える精神は靈的進化そのもの

私は、数年前、身体に障害を持つ青年が、空手の稽古をしている姿を見て、胸を打たれたことがある。それは三井寺の勸学館で行われた、宗家による指導を受けたときのことであった。一見して身体に障害（後に小児麻痺と判明）を持つ青年が、大勢の空手家に交じて体をよじらせながらも、懸命に練習していたのだ。その時の私は、自分が何に胸打たれたのか、わかっていなかった。だが、その場面は、帰宅したのちも繰り返し心に浮かんだ。

「彼は、他者との比較に、生きる価値を求めず、ひたすら自分自身のために生きているのである」、恐らくそれが、私が、今でも思い出すと胸打たれる理由である。そのようにしか動かない身体と一つになることが、彼の全世界なのだ。そして、それは誰も崩すことのできない、永遠の、牙城である。

彼が空手を選択した真意は分からない。だが、道場訓が指す空手の目的を超越し、その先の境地を獲得した彼にとって、空

手は、彼自身の靈的進化のための手段だったのかもしれない。

4. 音楽の無い日はない

1) 50歳が近づいてきたころ始めた声楽

今から 12 年ほど前の秋、ブライアン・ウィリアムズという絵描きが、我が家にやって来て、次のようなことを言った。「文化奨励賞の授賞式に行ったら、隣に座っていた人がソプラノの歌手で、レッスンを受けることになったが、よかったら一緒に歌はないか？」という、音楽への誘いだった。当時、私は、個展の開催に向け、空いた時間は筆を握っていたので、その旨伝えたら、「絵もよくなるよ！」と言うのだ。その一言にほだされ、一度だけ付き合うことにしたのである。

それは、10月も終わりに近づいた、秋晴れの日だった。車で五分ほど走れば、彼が暮らすかやぶき屋根の家がある。玄関を入ると、ダイニングと、後に音楽室になるリビングルームがのれん越しに見える。私が到着したとき、テーブルに並んだ3つのカップに、ちょうどお茶が注がれようとしていた。

それを啜りながら、彼の歌を聴いていると、一段落ついたタイミングで、「何か、ご存知の曲を歌ってみませんか？」と、予想していた展開が始まった。私は、「はい！」と答えて、次の問いかけを待った。「何がいいですか？」という問いに、私は、決めておいた曲を告げた。その日から声楽をたしなむ日々が始まり、12月に入って、現在、京都交響楽団の合唱団で活躍してい

る、生物学者の岡本州弘氏が加わり、それ以降、三人仲良く練習に励んだ。



オルブリエコンサート、左から筆者・北村麻也子さん・森琢磨さん

/京都毎日ホール '13

数年後のある日、いくつかの事情が重なり、別の先生に師事することになった。新しい先生は、伴奏ピアニストの北村麻也子さんである。三バカおっさん隊（ブライアン・ウィリアムズが命名）は、彼女から、貴重な音楽理論と、心の籠った指導を受けることとなった。彼女は後に、作曲家でシンセオルガニストの森琢磨氏と私の計画に加わり、「オルブリエ」というバンドを結成することになる。

2) 音楽をなめてはいけない

ある日、「きちんと歌うためには、もっと楽譜を見ないといけません」と、言われ、「暗譜しているので、もうじき、きちんと

歌えます」と、答えたところ、「音楽をなめてはいけません!」、という気を放ちながら、「暗譜って何ですか?何を暗譜したのですか?」と訊かれたので、さすがの私もハっとした。麻也子先生の言われた要旨は、以下のものであった。

「音程やリズムは、歌っているつもりではいつまでも正確になりません。もっと、ピアノの音に注意を払って、発声する前に、頭の中でその音を再生してください。リズムも同じです。自分勝手なリズムを刻むのをやめて、流れている音楽に、リズムを感じ取って、それに合わせれば、何人共演者がいてもズルことはありません。楽譜を目で追ってください!とにかく、つもりはだめです。証拠を聞いてみますか?」

高性能の録音機から流れてくる自分の歌を聴いて、私はゾっとした。それは動かぬ「証拠」だった。音程は時に上ずり、時にぶら下がっている。そして自分とは思いたくない、誰かが刻んでいるリズムは、独りよがりな、私の態度を証明していた。それは、恥ずかしい不調和というしかなかった。

その時は歌を辞めようかとも思ったが、それでは、あまりに不甲斐ない。何より、これまで(不調和に耐え)辛抱強く指導してくれた先生に申し訳ないではないか。以後、私は音楽の為に、つもりを法度にした。

3) 音楽に救われた幼い兄妹

私は音楽を奏でることによって、霊的進化が促進されると感じている。また、美しい音楽は、調和であり、愛の実践であ

る。それ故、優れた音楽は、演奏者にとっても、それを聴く者にとっても霊的進化の疑似体験になり得ると思っている。

幼いころからいつも、母の歌を聴いて、音楽に触れていた私は、子供心にも、その歌声が、よく響く、愛おしいものだと感じていた。例えば、母がモーツァルトの子守歌を歌ってくれた時には、母の声が美しすぎて眠れないものであった。♪月は、窓から～銀の光を～注ぐこの夜～眠れ、良い子よ～♪と、歌われても、瞼に幻想的な光景が浮かんで来て、眠ってなどいられない。そのまま想像の翼に乗って、どこか知らない外国の、「♪鳥も羊も、みんな眠っているまきば」を彷徨ったりするのである。

我が家には、小さなポータブルプレーヤーがあったのだが、そのターンテーブルが回らない日はなかった。何枚かあったレコードの一枚はそのプレーヤーに（無理やり）付いていたもので、ショパンのワルツやノクターンの名曲が 10 曲ほど入っていた。

ある日、母の荷物持ちで街の商店街に行くと、その中の一曲が聞こえてきた。それはウラジミール・ホロヴィッツが弾く、「子犬のワルツ」であった。その子犬は、10分後に私のものになるのだが、展示品のプレーヤーから聞こえていたのである。小学三年生の私は、そのレコードがどうしても欲しくなって母にねだり、最後には、母がその電気店の店主に頼んで、展示品ごと買ってもらったのである。思わぬ出費をした母は、自分の買い物を諦め、その原因を抱きかかえて喜び私を見てほほ笑ん

でくれた。

それからしばらくして、両親は一年ほど別居することになったが、家からいなくなったのは母で、私と妹は「お母さんは、病気で遠い病院にいる」という父の説明が信じられなかった。そして、まだ一年生だった妹と下した結論は、「母は、病気で死んでしまい、もういないのだが、父は本当のことが言えないでいる」というものだった。実際は、父との喧嘩の末、実家に帰っていただけで、父が言えなかったのは、その事実であった。

家事は父がしていたが、しばらくすると、私と妹も、大抵のことはできるようになった。父の帰宅が深夜になることもあり、自分たちで料理も作るようになったが、母のいない切なさはどうしようもなかった。「子犬のワルツ」を聞くと母への思慕が募り、泣きだしそうな私の姿を見て、妹も泣くのがだった。

一年後、母と再会した時のことは、今でもよく覚えている。母は、あの電気店からすぐのところにある、商店街の喫茶店に座っていた。なぜその喫茶店で会うことにしたのか分からないが、父に連れられて妹と一緒に店に入り、母と思しき女性の姿をちらりと見たとき、母に会える嬉しさは、不安と戸惑いに変わっていた。その女性に抱き寄せられても、顔を見ることができなかった。ただ、懐かしい、干し草のような母の匂いがそこにあったため、「これは夢じゃない」と思った。そして一家四人の生活がまた始まったのである。

あの擦り切れて雑音に近づいていたホロヴィッツに代わってやって来たのは、マリア・カラスだった。私は彼女にぞっこん

になり、朝晩逢う日もめずらしくなかった。特に、カルメンの「ハバネラ」は大好きで、歌手はフィリッパ・ジョルダノになったが、今でも時々聴く。それだけではない、自分のコンサートで、たまに歌ってしまうのだ。

本来、メゾ・ソプラノで歌われるこの曲を、バリトンの私が歌うのだから、犖蹙を買うだろうと思っていたら、歌い終ると他の曲より沢山の拍手を買うのだ。私はそんな時も、無数の思い出と共に、脳裏に去来する、大好きな音楽たちに感謝するのである。

5. 友人の領域

この文章を書いている最中、37年来付き合いしてきた良き友の訃報を、友人の奥さんから告げられた。2018年9月28日午前8時、M氏は71歳でその生涯を閉じた。10年前の5月、パプア・ニューギニアのジャングルに分け入ったとき、彼は既に「多系統小脳萎縮症」という病魔に侵されていたのである。

初めて彼と出会ったのは、それを更に遡ること27年、1981年の夏、アブラゼミの鳴く、長岡京市奥海印寺の山中であった。捕虫網を持つ少年の左手を握る彼は、昆虫少年の良き父親そのものであった。しかし私は、その捕虫網を実際に使うのはM氏だとすぐに認識した。なぜならそれが、子供が使うにはあまりにも高価な、専門家仕様のものだと知っていたからであ

る。

「こんにちは！」という挨拶の言葉に続いて、メスグロヒョウモンを捕獲したことを言うと、「まだいたんですね。もうこの辺りにはいないと思っていました。」という、予想を裏切らない言葉が返ってきた。三角紙を開いて証拠の品を見せると、彼はにっこり笑って、自宅でコレクションを見ないか？と誘ってくれたのである。

その後、私と M 氏は、福井県の武生市にギフチョウを採集しに行ったのを皮きりに、海外の採集旅行を共にする、親しい友人同士となった。私の個展には、ほぼ毎回、足を運んでくれ、94年の小丸画廊の折は、M 子夫人を伴って来廊し、オープニングパーティーで気の利いたスピーチを披露してくれるなど、35年以上にわたる良き友人であった。

しかし、この数年、病気の進行に伴って、彼は次々と身体の一部を奪われていった。手足の筋肉が麻痺して歩行不能となり、言語障害に続いて嚥下障害のため気管切開が必要となり、声帯を切除することになって発話能力を失い、かろうじて動くのは、目、口、腕、手指を残すのみとなった。私は残された運動機能の維持・向上のため、毎週火曜日の午後、蹴上にある完全看護付きマンションに通ったものの、この3年ほどは筆談もできなくなっていた。

何か彼の気晴らしにならないものかと、いろいろ試してみたが、最後まで続けたのは、英語で話しかけることと、施療しながら歌う事であった。彼が英語に堪能だということと、音楽が

大好きなことは何十年も前から承知していた。英語は日本語より反応が良かったし、歌は、好きな曲にだけは反応した。

それは、彼の手の握り具合でわかるのだ。「歌い終わったとき、〈ブラボー！〉は、私の手を強く握る。〈普通かダメ〉は、手を放す。」などと決めてあったので、うまく歌った後は握手して、判定を待った。彼の、正直で誠実な性格は、そんな状況でも変わらなかった。私はそれが嬉しくて、手を振り払われても笑った。

また彼は、面白い話をすると、笑った。勿論健常者の笑いではないが、わずかに口角が上がり、閉じた瞼に、泣き出しそうにも見える、微妙な緊張が走るため、私は彼が笑っていることを悟った。

彼がどのような話を好んだか例を挙げよう。私だけがブラジルのジャングルで食べた巨大な芋虫（カミキリムシの幼虫）の話については、何度同じ話をしても涙を流して笑った。どのような話かというと、ブラジルのジャングルで私たちが夢中になってモルフォ蝶を捕獲し、一休みしていると、一人の現地人ポーターが、それを私の口元に差し出したのだ。驚いて M 氏を見ると、「このあたりの御馳走!? だから、食べないと失礼になる。美味しいから、お先にどうぞ」という意味のことを確かに言ったので、私は彼を信じて、味わうことにした。

だが、一噛みして、私は後悔した。もちろん吐き出したりなどできない。魚の内臓にカメムシのあの匂いを併せたような、その味わいは、夕方まで鼻腔の奥を漂うことになった。「どう

だ、旨いだろう！」と言わんばかりに、人懐っこい顔で私を覗き込むポーターに笑顔で頷きながら、私は小刻みに笑って震えている M 氏の背中を睨んだ。今、また笑ってくれるなら、彼の策謀に何度嵌ってもよい。

そのような思い出が、頭の中を駆け巡っていたかはわからないが、はっきり言えることは、M 氏の意識が対峙できるのは、自分自身しかなかったということである。世界中のあらゆる文物に触れ、それらに精通し、多くの国や企業から敬意を以って迎えられ、文化と蝶をこよなく愛した彼は、その対極とも言える状況で、この世を去った。M 子夫人は、毎日のように彼に付き添い、あらゆることに気を配っていた。M 氏が夫人の細やかな愛情に支えられていたことは、誰の目にも明白であった。

彼が逝って一週間ほど過ぎた朝、元気なころの彼を見たような気がした。そして、「思っていることを書けばいいよ」と言ってくれたように思えたのだが、そう思ったのは、彼を治療していたとき、いつも考えていたことが、今まさに書こうとしていることだったからかもしれない。

「自分と向き合う」と言ったとき、そう発言した自分と、向き合うべき相手である [自分] は違う。「自分と一つになる」と言ったときも同じことである。空手の稽古をしていた、あの青年が、空手を通過して「自分と向き合い、永遠の牙城を築いた」のなら、M 氏は、多系統小脳萎縮症という病気を受け入れて、「自分と一つになり、絶対無比の存在に至った」のではないか、それは「霊的進化」そのものではないのか、と思ったので

ある。霊的進化は、思考によって成されるものではなく、自己の状態をあるがまま受け入れ、揺るぎない自己を確立することによって、他者との境界を消し去ることではないかと考えるようになった。

6. おわりに

最後に、この文章を執筆中に逝った友人の M 氏に捧げたい言葉がある。三十数年前、故人が私の個展に来てくれた折に贈ってくれた言葉であり、ベートーヴェン自身が荘厳ミサ曲の譜面上に自ら記した言葉である。M 氏の思い出と共に、今度は私から天国の M 氏に贈りたいと思う。

Von Herzen - Möge es wieder - zu Herzen gehen.

願わくば、心より出で、心に入らんことを。

編集後記

前回の冊子発行から 1 年半以上が経過し、この度、2冊目の冊子発行の運びとなりました。前回と今回の冊子の違いは、「どんな読者にも楽しんでいただける冊子を」という新たな課題を加えたことです。しかし、この新たな課題は予想以上の校正の困難を招き、執筆者に10回以上の（嫌がらせに近い？）書き直しを強要したこともありました。

私自身、原稿データが消える夢や、編集が間に合わない悪夢を見て、悲鳴を上げて夜中に目を覚ましたこともありました。振り返れば長く険しい道のりだった約4か月。完成した今は「素敵な思い出」です。

私はこの市民研究のスタート地点となった本分科会が大好きです。そのため、これからも冊子編集には関わり続けると思います。

そして、この冊子を手にとって下さった読者の皆様が、「また来年も読みたい」と思って下さることを心より願っております。

生物多様性分科会 事務局 入澤仁美